新潟県埋蔵文化財調査報告書　第126集

一般国道８号

白根バイパス関係発掘調査報告書

浦　廻　遺　跡

２００３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

白根バイパス関係発掘調査報告書

浦（うら）廻（まわり）遺跡

２００３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号は、新潟と北陸・関西圏を結ぶ主要幹線道路であり、地域経済・日常生活を支える基盤施設としても重要な役割を果たしています。しかし、近年の交通量増加や車輌の大型化に伴い、白根市内では交通渋滞や交通事故など、生活環境に悪影響を与える様々な問題が増加してきています。そのような状況の中で、白根市大字保坂から大字戸頭間を結ぶ延長5.9kmの白根バイパス建設は、これらの問題を解消し、円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと期待されています。

本書は、この白根バイパス建設に先立ち、平成14年度に実施した浦廻遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、13世紀後半から14世紀前半の鎌倉時代後期における葬送に関連した遺跡であることが明らかとなりました。遺構としては大型の土坑、畝状遺構、足跡群が検出されました。遺物では、卒塔婆や呪符などの木簡、漆器や行火・扇・下駄・杓子などの木製品、人骨や獣骨などの骨が多数出土しました。特に、「元應二年」（西暦1320年）と記された卒塔婆の出土で、遺跡の年代を特定できることが注目されています。

今回の調査結果が、地域の歴史や中世の葬送を解明するための研究資料として広く活用され、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御支援を賜った白根市教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は、新潟県白根市大字戸頭字浦廻4369番地ほかに所在する浦廻遺跡の発掘調査記録である。

2　調査は、国道８号白根バイパスの建設に伴い国土交通省から新潟県が受託したもので、発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、平成14年度に実施したものである。

3　整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成14年度に埋文事業団が県教委から受託し、これにあたった。

4　出土遺物及び調査・整理・自然科学分析に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は浦廻遺跡の略記号「ウラ廻」とし、出土地点や層位を続けて記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　遺物番号は土器・木製品と木簡に分けてそれぞれ番号を付し、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

8　引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　本文中の敬称は省略した。

10　航空写真撮影は、国際航業株式会社に委託した。

11　人骨の分析については、新潟県立歴史博物館の藤田　尚氏から玉稿を頂いた（第Ⅴ章5A）。獣骨の分析については、新潟県立小千谷高校講師の堀川秀夫氏から玉稿を頂いた（第Ⅴ章5B）。

12　第Ⅵ章自然科学分野に係る各種分析は以下の機関に委託し、それぞれの報告書を受領している。なお、本書には各機関の了解を得て再編集したものを掲載した。

珪藻化石分析・放射性炭素年代測定・花粉化石分析…株式会社パレオ・ラボ

木製品の樹種同定…株式会社パリノ・サーヴェイ

13　遺構・遺物図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本 文 ・ 挿 図：テキスト形式・Excel形式データ、トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：原図・レイアウト図・文字データ

遺物図面図版：原図・レイアウト図

写 真 図 版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

14　11・12に示す以外の本書の執筆は、高橋　保（埋文事業団国土交通省担当課長代理）の指導のもとに本間克成（同　主任調査員）、山口勇雄（同）、飯坂盛泰（同）、清田明子（同　文化財調査員）、田中一穂（同　嘱託員）がこれにあたり、編集は本間が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

本間：第Ⅱ章1、第Ⅳ章、第Ⅶ章１・２・５　山口：第Ⅰ章　飯坂：第Ⅱ章2、第Ⅴ章１～3、第Ⅶ章３

清田：第Ⅲ章　田中：第Ⅴ章4、第Ⅶ章４

15　本遺跡について、埋文事業団2002「白根地内（浦廻遺跡）一次調査」『年報』、現地説明会（2002年９月28日）、「浦廻遺跡」『発掘調査報告会2003』発掘調査報告会などに概要が報告されているが、本報告書の記載内容がこれらに優先する。

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相沢　央　　赤羽正春　　浅井勝利　　伊東　崇　　潮田憲幸　　小野映介　　大平明夫　　木村浩一

小林昌二　　狭川真一　　鈴木郁夫　　竹田和夫　　舘野和己　　田中和徳　　鶴巻康志　　富樫秀之

富岡直人　　長谷川伸　　前嶋　敏　　松井　章　　堀　建彦　　水澤幸一　　宮内信雄　　矢田俊文

渡辺　亨

国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所　　白根市教育委員会　　白根市都市建設課　　中央公論新社

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　一次調査 …… 1

B　二次調査 …… 3

1）調査方法 …… 3　　2）調査の経過 …… 3

C　整理作業 …… 5

D　調査・整理体制 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 6

1　地理的環境 …… 6

2　歴史的環境 …… 8

A　文献から見た白根市周辺 …… 8

B　周辺の遺跡 …… 9

第Ⅲ章　調査の概要 …… 11

1　グリッドの設定 …… 11

2　基本層序 …… 11

3　遺構・遺物の検出状況 …… 12

第Ⅳ章　遺　　構 …… 14

1　概　　要 …… 14

2　記述の方法 …… 14

3　遺構各説 …… 14

A　土　　坑 …… 14

B　畝状遺構 …… 15

C　足跡群 …… 16

第Ⅴ章　遺　　物 …… 17

1　概　　要 …… 17

2　土　　器 …… 17

3　木製品 …… 17

4　木　　簡 …… 21

A　多宝塔及び地蔵菩薩等木簡 …… 23

B　南無阿弥陀佛 …… 23

C　南無大日如来 …… 23

D　頭部墨彩木簡 …… 23
E　柿　　経 …… 24
F　種字バンを重ねる木簡 …… 24
G　呪　　符 …… 24
H　その他の木簡 …… 25
I　墨痕のない木簡・木札 …… 25

5　骨 …… 26
A　人　　骨 …… 26
1）はじめに …… 26　2）人骨の所見 …… 26
3）まとめ …… 27
B　獣　　骨 …… 31
1）骨の所見 …… 31　2）まとめ …… 32

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 33

1　堆積物中の珪藻化石群集 …… 33
A　はじめに …… 33
B　試料の処理方法 …… 33
C　珪藻化石の環境指標種群 …… 33
D　珪藻化石の特徴とその堆積環境 …… 34
E　おわりに …… 36

2　放射性炭素年代測定 …… 39
A　はじめに …… 39
B　試料と方法 …… 39
C　結　　果 …… 39
D　考　　察 …… 40

3　花粉化石群集 …… 41
A　試　　料 …… 41
B　方　　法 …… 41
C　花粉化石群集の記載 …… 41
D　考　　察 …… 42

4　木製品の樹種 …… 45
A　はじめに …… 45
B　試　　料 …… 45
C　方　　法 …… 45
D　結　　果 …… 45
E　考　　察 …… 47

第Ⅶ章　まとめ …… 52

1　自然科学分析結果からみた遺跡の環境 …… 52

2　遺　　構 …… 52
A　大型の土坑 …… 52
B　畝状遺構 …… 52

3　漆　　器 …… 53

4　木　　簡 …… 54

5　骨 …… 56

《要　約》 …… 58

《引用文献》 …… 58

《遺物観察表》 …… 60

挿図目次

第 1 図　遺跡周辺図 …… 2
第 2 図　調査範囲と一次調査トレンチ位置図 …… 4
第 3 図　越後平野の地形区分図 …… 7
第 4 図　越後・佐渡の主要荘園・国衙領分布 …… 8
第 5 図　周辺の中世遺跡 …… 10
第 6 図　グリッド設定図 …… 11
第 7 図　基本層序 …… 13
第 8 図　遺物の出土分布 …… 20
第 9 図　木簡の出土分布 …… 21
第10図　南無阿弥陀佛等木簡出土分布 …… 22
第11図　南無大日如来等木簡出土分布 …… 22
第12図　呪符等木簡出土分布 …… 22
第13図　人骨の写真（1） …… 28
第14図　人骨の写真（2） …… 29
第15図　人骨の写真（3） …… 30
第16図　獣骨出土状況 …… 31
第17図　堆積物中の主な珪藻化石分布図 …… 37
第18図　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真 …… 38
第19図　花粉化石分布図 …… 42
第20図　産出した花粉化石 …… 44
第21図　検出樹種の顕微鏡写真（1） …… 50
第22図　検出樹種の顕微鏡写真（2） …… 51
第23図　餓鬼草紙　第四段　疾行餓鬼 …… 55
第24図　犬の噛み痕のある人骨 …… 56

表　目　次

第 1 表　遺構の略称 …… 14
第 2 表　頭蓋骨計測値 …… 27
第 3 表　歯冠計測値 …… 27
第 4 表　獣骨鑑定結果 …… 32
第 5 表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 35
第 6 表　各地点の堆積物の堆積環境 …… 37
第 7 表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果 …… 40
第 8 表　花粉化石一覧表 …… 43
第 9 表　器種別樹種構成 …… 47

図版目次

［図面図版］

図版　1　遺構全体図
図版　2　土坑（1）
図版　3　土坑（2）
図版　4　骨出土状況（1）
図版　5　骨出土状況（2）
図版　6　畝状遺構
図版　7　畝状遺構断面（1）
図版　8　畝状遺構断面（2）
図版　9　足跡群
図版10　土器・木製品（1）
図版11　木製品（2）
図版12　木製品（3）
図版13　木製品（4）
図版14　木製品（5）
図版15　木製品（6）
図版16　木製品（7）
図版17　木製品（8）
図版18　木製品（9）
図版19　木製品（10）
図版20　木簡（1）
図版21　木簡（2）
図版22　木簡（3）
図版23　木簡（4）
図版24　木簡（5）
図版25　木簡（6）
図版26　木簡（7）
図版27　木簡（8）
図版28　木簡（9）

［写真図版］

図版29　遺跡遠景・全景
図版30　遺跡近景・足跡群
図版31　土層断面・地震噴砂断面・SX01
図版32　SX02・SX04・骨1号・骨2号・骨4号
　　骨5号
図版33　骨6号・骨7号・畝状遺構・UNE-A
　　UNE-B・足跡
図版34　遺物出土状況
図版35　土器・木製品（1）
図版36　木製品（2）
図版37　木製品（3）
図版38　木製品（4）
図版39　木製品（5）
図版40　木簡（1）
図版41　木簡（2）
図版42　木簡（3）
図版43　木簡（4）
図版44　木簡（5）
図版45　木簡（6）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

一般国道８号は、新潟と関西・関東（一般国道17号経由）を結ぶ主要幹線道路としての役割を担うとともに、地域経済・日常生活活動を支える基盤施設としての役割をも果たしている。しかしながら、近年の経済成長に伴う自動車交通の増大と車輌の大型化により、白根市内では交通の渋滞・騒音・振動・交通事故など生活環境に与える悪影響及び冬期除雪障害などの問題が発生している。そこで、これらの問題を解消し、主要幹線道路としての機能充実を図り、他の都市計画道路と一体となった道路網を構成し、秩序ある都市の発展に寄与することを目的として建設省（現国土交通省）は、白根市大字保坂～大字戸頭間の延長5.9㎞のバイパス化を決定した。

道路法線内には周知の遺跡は存在しなかった。しかし、未周知の遺跡が存在する可能性があるため、国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委）とが協議をし、予定法線内の白根市和泉簑口橋付近～大字戸頭間で遺物散布・地形などの把握を目的とした、埋蔵文化財分布調査を実施することにした。

県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）は、平成13年５月７日に対象範囲をくまなく踏査し、遺物の散布、地形の特徴などの地表面の観察を行った。その結果、珠洲焼２点、土師器２点、中国産の可能性がある染付１点、近世以降陶磁器６点、寛永通宝１点が採集された。一方、盛土や建物、アスファルト舗装のために、遺物散布状況の確認が不可能な部分があった。また、当該地は沖積平野に立地しており、遺跡が存在したとしても地中深く埋没している可能性もあった。こうした状況から、道路法線内で遺跡存在の可能性があるために、全域で一次調査が必要である旨を県教委に報告した。県教委はその結果を国土交通省に通知し、一次調査の協議が行われた。

国土交通省は、平成13年度管理用盛土工事が予定されている約35,000m^{2}を調査対象地として、一次調査を県教委に委託し、県教委は埋文事業団に再委託した。その結果、現地表下約2.5mから多数の木製品遺物などが出土した。特に、卒塔婆や木製品がまとまって出土した範囲6,800m^{2}について、二次調査が必要である旨を県教委に報告した。その後、国土交通省・県教委・埋文事業団による三者協議で、二次調査を平成14年度に実施することに決定した。

2　調査と整理作業

A　一 次 調 査（第２図）

平成13年７月23日から８月10日の間、約36,000m^{2}を対象に、約1,715m^{2}を一次調査（確認率4.8％）した。調査範囲内に任意にトレンチを設定（63か所）し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。対象地は沖積平野であり、土層の特徴から地山を判断することが困難であるために、深さ3mを目途に段堀りしながら掘り下げた。調査の結果、５・７～15・59・63トレンチから木簡や箸などが合わせて31点、60トレンチで木簡・漆器片・杓子・箸・火鑽棒などが45点まとまって出土した。この他に、17・20・22～24・31・37・38・40・42・48・54・56・

第１図　遺跡周辺図

（白根市役所作成「白根市全図其一・其二」平成６年修正　1:10,000 を使用）

58トレンチからも木製品などが出土したが、それぞれのトレンチからの出土点数は少なく、まとまった出土は見られなかった。また、48トレンチからは人間の頭蓋骨が出土した。一次調査では総計113点の遺物が出土した。出土層位は粘土と砂の互層で、土器などの重量のある遺物が出土せず、遺構も発見されなかった。このことから、出土した遺物は洪水などにより流されてきたもの、もしくは流水環境下における祭祀によるものの可能性が高い。また、遺物がまとまって出土した箇所の南西300mには、中世（16世紀代）に始まる寺院があり、出土遺物との関連が考えられる。以上の点から、木簡や木製品がまとまって出土した範囲の6,800m^{2}を二次調査の対象範囲とした。

B　二次調査

二次調査は、平成14年5月20日から10月4日まで行われた。調査は基本的に調査員4名、作業員60名体制で行われた。

1）調査方法

排水方法　遺跡が沖積地に立地し、発掘地点及びその周辺は水田であり、掘り下げると地下水の湧出が予想されたので、調査区周辺及び中央部に暗渠を敷設した。暗渠は幅80cm、深さ2.8mの溝を重機で掘削し、径10cmの管を入れ、砕石を充填する方法で敷設した。調査区全体で集水桝を6基設置し、排水ポンプで常時強制排水を行った。集水枡の排水ポンプの他にも大小のポンプを常備し、必要に応じて局所的な排水を行った。

層序確認　土層観察用のセクションベルトをグリッド方向に合わせて、十字に設定した。層序を決定した後、ベルトの全てを縮尺1／20、場所によっては1／10で実測した。また表土掘削で残した壁を任意に数か所選び、幅約2mずつ実測した。

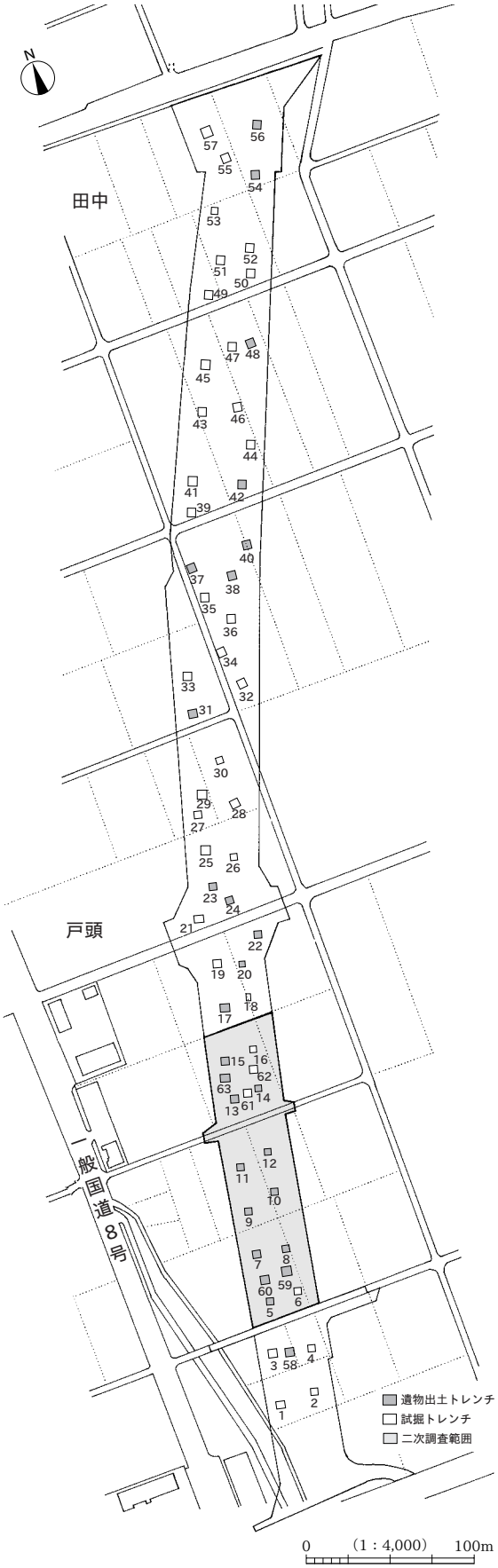
表土掘削と包含層発掘　一次調査の結果を参考に、表土と遺物量の希薄な包含層の上部は、調査員の指示により重機で徐々に掘り下げた。排土は調査区外の白根中央浄化センター建設予定地内にダンプトラックを用いて搬出した。包含層発掘は基本層序を確認した上で、ホソ・ジョレン・移植ゴテにより人力で行った。排土は調査区内の北側にベルトコンベアーにより運搬した。調査区内では場所によって発掘の深度が異なるため、出土遺物及びメインセクションでの層位の検討を随時行いながら調査にあたった。

記録作業　遺物は、包含層出土のものは層位毎に小グリッド単位で取り上げた。遺構出土のものは遺構単位で、遺構の層位毎に取り上げた。平面図と一部の遺物分布図にサイトシステムを用い、その他の図面は全て手取りで作成した。図面作成は1／20の図面を基本とし、出土状況などは必要に応じて1／10や1／1の縮尺とした。写真撮影は35mmのカラーリバーサルのみを使用した。土坑の完掘写真撮影には、ローリングタワーを設置した。遺跡全体写真は業者に委託し、ラジコンヘリによる航空写真とした。

基礎整理　出土遺物の水洗・注記・仕分け作業、遺物の実測は現場で行った。

2）調査の経過

調査は5月20日から10月4日の間に実施した。5月21日に排土搬出に関する現地協議を国土交通省と白根市とともに行い、5月30日から白根中央浄化センター建設予定地にダンプトラックで排土搬出が可能となった。それに伴い、当初の予定通り表土掘削を行うと工程上遅れが生じるため、暗渠工事を先行し、表土掘削は6月から並行して行うことにした。5月22日から暗渠工事を重機で行いながら、調査員



第２図　調査範囲と一次調査トレンチ位置図

が出土遺物の位置や層位を確認した。

６月１日から、表土掘削と遺物量の希薄なⅧ層包含層の上部掘削を重機で開始した。Ⅷ層は場所により厚さが2m以上もあったため、表土も含め現地表面下2.5mを目途に掘り進めたが、遺物が出土した時点で掘削をやめ、位置や層位を確認した。地層は傾斜し、調査区北側に向かうほど高くなっていくことが分かった。遺物は木簡をはじめ、木製品や骨が出土した。６月４日、集中して人骨が出土した旨を県教委を通して警察に報告した。６月13日、新潟県立歴史博物館の藤田尚主任研究員から出土人骨について現地指導をいただき、取り上げ方や保存方法などを確認した。６月18日に出土骨を発泡ウレタンで固め、土ごと切り取り埋文事業団へ運搬した。また、同18日には、新潟大学鈴木郁夫教授らに地震噴砂や地質・古環境について現地指導を仰ぎ、放射性炭素年代測定や珪藻化石分析などの自然科学分析を行い、当時の年代や環境を分析する必要性を教授いただいた。

６月24日からは作業員を投入し、調査員の指示のもと包含層発掘と遺構確認が開始された。木製品や骨などの遺物は調査区南側に集中しており、北側に向かって希薄になっていた。遺構は調査区南側のⅧ層中で大型の土坑、中央部のⅩ層で砂地の畝状遺構、その北側のⅪ層では多数の足跡が検出された。７月から土層観察用トレンチの掘削を始めた。７月10日、台風による豪雨で調査区内が浸水し、調査が一時不可能になった。調査区内の15D以北は表土掘削で遺物の出土が少なかったため、７月17日から３日間、重機でトレンチを掘り遺物の出土状況と層位を再確認した。その結果、遺物はほとんど出土しなかった。そこで７月22日に、県教委から15D以北は表土掘削で終了とし、排土を置くことで了解を得た。また、７月29日には、5D付近で遺物包含層が厚く遺構確認面が深いことから、メインセクションに沿ったトレンチを深掘

りし、遺物の出土状況を確認した。その結果、Ⅷ層下部からの遺物の出土は少なかった。このため、調査区周囲を巡らせている矢板の安全深度との兼ね合いもあり、現地表面から3mまで発掘して調査を終了することにした。8月7日、先の発掘終了深度について県教委も了解した。9月下旬に調査はほぼ終了し、9月25日に航空写真を撮った。9月28日、一般の方を対象に現地説明会を開催し、約150名の参加者を得た。

9月30日、県教委から終了確認を得、10月4日で現場での調査を終了した。それに先立つ10月1日から遺物の実測を開始した。10月25日、国土交通省に引き渡し、同時に現場から完全撤収した。

C　整理作業

遺物の実測は、10月1日から25日まで現場で行った。

遺物実測図の修正、遺物の写真、図版・原稿作成、その他の整理は平成14年11月1日から平成15年3月31日にかけて、埋文事業団で行った。

D　調査・整理体制

	一次調査（平成13年度）	二次調査（平成14年度）	整理（平成14年度）
期　間	平成13年7月23日～8月10日	平成14年5月20日～10月4日	平成14年10月1日 ～平成15年3月31日
主　体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）	同左	同左
調査・整理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 （理事長　板屋越麟一）	同左	同左
総　括	須田　益輝（事務局長）	黒井　幸一（事務局長）	同左
管　理	長谷川司郎（総務課長）	同左	同左
庶　務	椎谷　久雄（総務課主任）	高野　正司（総務課主任）	同左
調査・総括	岡本　郁栄（調査課長）	同左	同左
指　導	高橋　　保（調査課国土交通省担当課長代理）	同左	同左
担　当	澤田　　敦（教育庁文化行政課主任調査員）	本間　克成（調査課主任調査員）	同左
職　員	後藤　　孝（調査課主任調査員）	山口　勇雄（調査課主任調査員）	同左
	渡辺　　弘（調査課主任調査員）	飯坂　盛泰（調査課主任調査員）	同左
	田中　一穂（調査課嘱託員）	清田　明子（調査課文化財調査員）	同左

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

浦廻遺跡の位置する越後平野は、我が国でも第三紀以降、特に第四紀の地殻変動が最も活発なところとして知られており、地形の主な配列はこの運動によって規定されている。越後平野周辺の地形は、褶曲運動による北北東－南南西に雁行配列する山地・丘陵列が最も顕著であり、新第三紀以降の向斜構造の中を信濃川が流れている。それに対して、阿賀野川・胎内川・荒川などの河川は、それらの主方向と直交するように先行谷を形成しつつ越後平野に流入している。このような褶曲運動は現在も継続しており、沈降速度は平野中央部に位置する白根付近で４～5mm/y.、東縁及び西縁の丘陵に近い平野部では１～2mm/y.と見積もられている。そのため、白根付近の完新統の厚さは、約140mにも達すると言われている。越後平野は、このような褶曲運動による凹地を信濃川・阿賀野川・胎内川・荒川などの河川が埋積してつくりあげたものである。

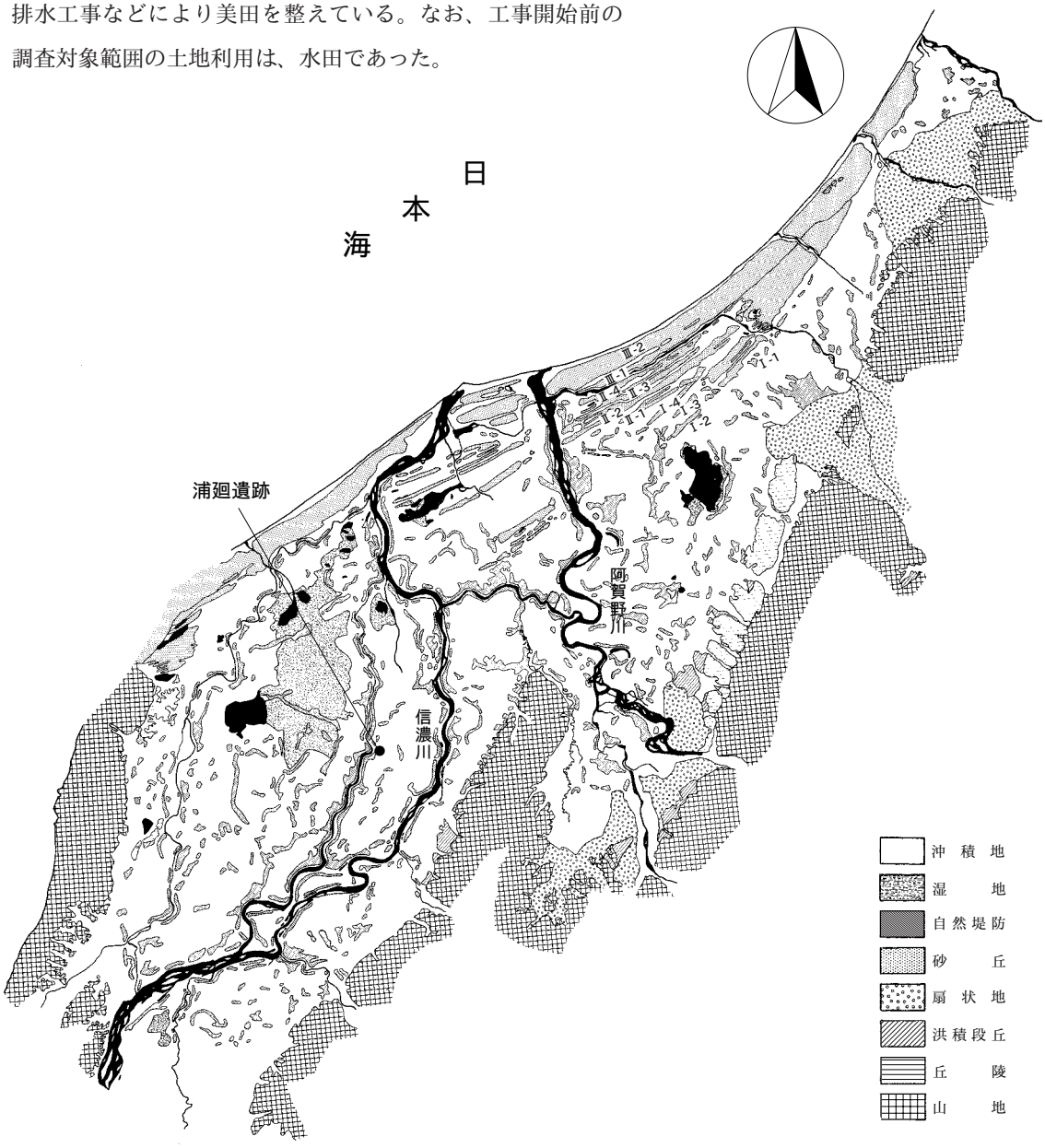
越後平野は濃尾平野とともに日本最大の沖積低地の一つであり、面積は約2,000km^{2}に達する。越後平野の地形的な特徴の一つは、海岸部に砂丘・砂堆列が著しく発達していることである。もう一つは関東平野・濃尾平野などの太平洋側の平野と比べて、更新世に形成された段丘地形の発達が悪く、平野の大半が完新世に形成された標高の低い平坦な沖積平野からなっていることである（第３図）。

新潟砂丘は日本最大級の規模をもち、海岸線に沿って角田山麓から三面川河口まで約70kmに達する。場所によっては、海岸線から内陸へ10kmに及ぶ砂丘・砂堆列を構成しており、北東端と南西端ではより新しい砂丘が古い砂丘を覆い、一列の砂丘列となっている。一般に内陸部の砂丘・砂堆ほど連続性が悪いが、これについては浸食されてしまったか、あるいは沈降運動によって沖積面下に沈んでいるためと考えられている。新潟古砂丘グループ［1974］は、砂丘表面の腐植層、砂丘砂の風化度、及び地形的特徴から、新砂丘Ⅰ（Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4）、新砂丘Ⅱ（Ⅱ-1・Ⅱ-2・Ⅱ-3・Ⅱ-4）、新砂丘Ⅲ（Ⅲ-1・Ⅲ-2）の３つの砂丘列群に区分した。そして、それらの形成時期を主に遺跡の立地、遺物の分布から、それぞれ縄文時代中期以前（新砂丘Ⅰ-1は縄文時代前期末葉以前）、古墳時代以前、室町時代以降とした。しかし、その後の資料の増加により、砂丘の形成をさらに古く捉える傾向が強まってきている。大平［1992］は、ボーリング資料の解析、珪藻分析、^{14}C年代測定結果を基に検討し、砂丘列の基礎となる浜堤列の形成期として、新砂丘Ⅰ-1は縄文時代前期以前、新砂丘Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4は縄文時代前期以降中期以前、新砂丘Ⅱは縄文時代中期以降晩期以前、新砂丘Ⅲは縄文時代晩期以降の形成であると推定している。

砂丘・砂堆列の背後には、標高5m以下の沖積低地が広がり、信濃川や阿賀野川のほか、中小河川の旧流路が形成した自然堤防や後背湿地が数多く見られる。そこには、かつて鎧潟・白蓮潟・鳥屋野潟・紫雲寺潟（塩津潟）といった潟湖が多数形成されていた。正徳～明和年間の絵図には、多数の潟湖やそれを結ぶ河川流路が描かれている。入手できる最古の明治44年測量の地形図にも多数の湖沼が描かれており、さらに潟をもつ地名が平野全面に渡って分布している。1947～48年に米軍が撮影した空中写真でも、きわめて新しい時代まで多数の湖沼が存在したことが分かる。また、信濃川の河川勾配は平野の始まる長岡から下流にかけて僅か3,000分の１であり、傾斜がきわめて緩やかである。さらに、標高5m線は信濃

川河口から直線距離で28kmも内陸になり、庄内平野の最上川が河口から9km、富山平野が海岸線から7.5kmなどに比べれば、その低平性は著しい。この平坦な地形は、平野の形成において信濃川などが頻繁に大きく蛇行し、河道変遷を繰り返してきたことを意味している。以上列挙したように、越後平野の低湿性は他の平野に見られない特徴であり、沖積低地においては潟湖が土砂の堆積により陸化したとしても、河川の氾濫、流路変遷により湖沼化することが再三繰り返されたものと思われる。実際、潟湖周辺の土地は古くから水害の多発地帯であり、1998年の集中豪雨による被害は記憶に新しいところである。そのため、これらの潟湖では近世以降、排水工事と干拓が大規模に行われてきた。白根周辺も開発が進められてきたが、1818年の新川掘削による鎧潟・田潟・大潟の悪水抜きや1922年の大河津分水の通水、さらには、昭和に入ってからの土地区画整備がなされるまでは、排水不良の低湿地帯であった。

浦廻遺跡は越後平野中央部にあり、信濃川と中ノ口川の間の後背湿地が中ノ口川により形成された自然堤防と接する付近に位置し、標高約1.5ｍを測る。この地域は上述のように低湿地帯であったが、今では排水工事などにより美田を整えている。なお、工事開始前の調査対象範囲の土地利用は、水田であった。



第３図　越後平野の地形区分図　　（［岡本1986］を一部改変して使用）

2　歴史的環境

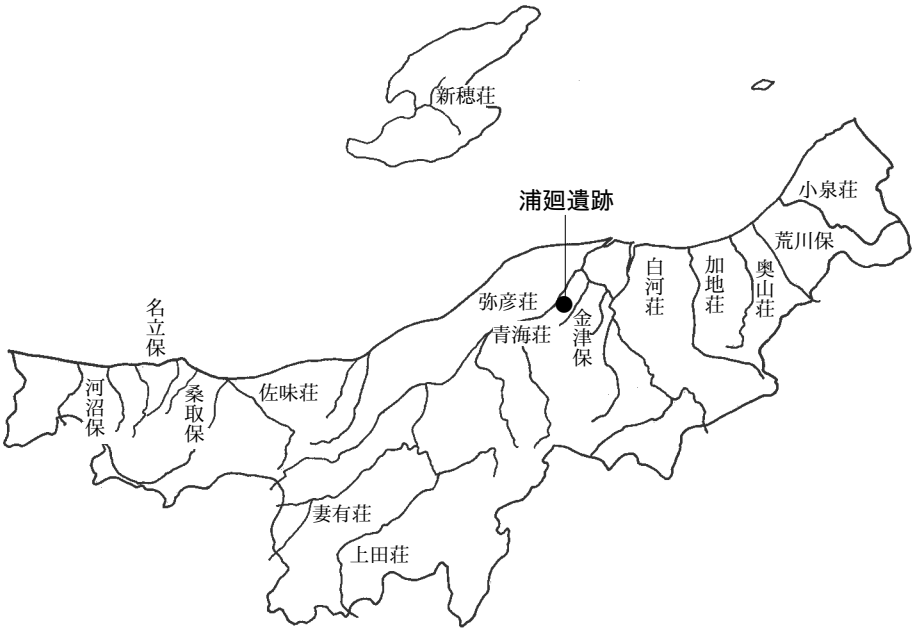
A　文献から見た白根市周辺

中世の情勢　中世社会は、荘園と国衙領（公領）を基礎とする土地・人民支配体系で、荘園・公領制を骨格としている。その頂点に位置したのは当初、皇族・公家・有力寺社で、そこに新興の在地領主が荘園・公領制に有機的に連関しつつ、構造的に組み込まれていく［田村1987］。

白根市周辺の荘園・国衙領　白根市周辺には、青海荘・弥彦荘、公領である金津保が存在した（第４図）。青海荘は永正年間（1504～1521）頃の『蒲原郡段銭帳』に記載がある。それによれば、青海荘が井栗条・坂田条・下条・河骨川条・蓑口条・山ノ内条・小吉之条に分かれていたことが知られ、現在にある地名から加茂市を中心に、中ノ口川右岸、白根市蓑口を北限とする荘園であったと考えられている［飯田1989］。弥彦荘は『越後名寄』『中蒲原郡誌』などから白根市や加茂市の一部も含まれるという説もあるが、先述の『蒲原郡段銭帳』から弥彦荘は白根市域を含まず、東限は中ノ口川と推測している［飯田前掲］。また、公領である金津保は建武３（1336）年「羽黒義成軍忠状写」に「引籠于金津保新津城」が初見であるが、中世史料では白根市域の地名が見出せないことから金津保に含まれないものと推測されている［飯田前掲］。以上から浦廻遺跡が存在する場所は、青海荘の領域に入るようである。

中世白根市の概観　平安末期、源平争乱で平氏を滅ぼした後、文治元（1185）年に源頼朝は各地に守護・地頭を設置する。越後では下越を中心に勢力をはっていた平家方の城氏没落後、伊豆や関東の武士が地頭となり、それ以前に成立していた荘園経営を掌握していく。白根市域が含まれる青海荘の初見は、『吾妻鏡』の文治２（1186）年３月12日条で高松院領となっている。高松院は鳥羽天皇皇女で、二条天皇中宮になった妹子内親王のことである。北条執権政治期の鎌倉時代中期には、文永８（1271）年の「関東引付勘文」から青海荘曽根新保の地頭を桓武平氏千葉氏の一族、下総泰俊がつとめている。

南北朝争乱期には、建武３（1336）年の「足利尊氏御教書与」に青海荘上条村を近衛局が領していたと



第４図　越後・佐渡の主要荘園・国衙領分布　（［阿部1987］を一部改変して使用）

ある。室町時代には、幕府は守護を配置し領国支配を行わせた。越後は上杉氏が守護職をつとめ、守護代長尾氏とともに支配を拡大していった。文明９（1477）年の『結番日記』には青海荘が吉良義信の所領であること、上杉氏が守護請をしていたことを示す記載がある。室町後期、青海荘は『蒲原郡段銭帳』から上杉氏所領となっている。浦廻遺跡北方にある蓑口周辺が比定される蓑口条の代官は長尾筑前守と記され、守護代長尾朝景のことである。戦国期には守護を代行していた守護代長尾氏が領国支配を掌握し、戦国大名に成長する。

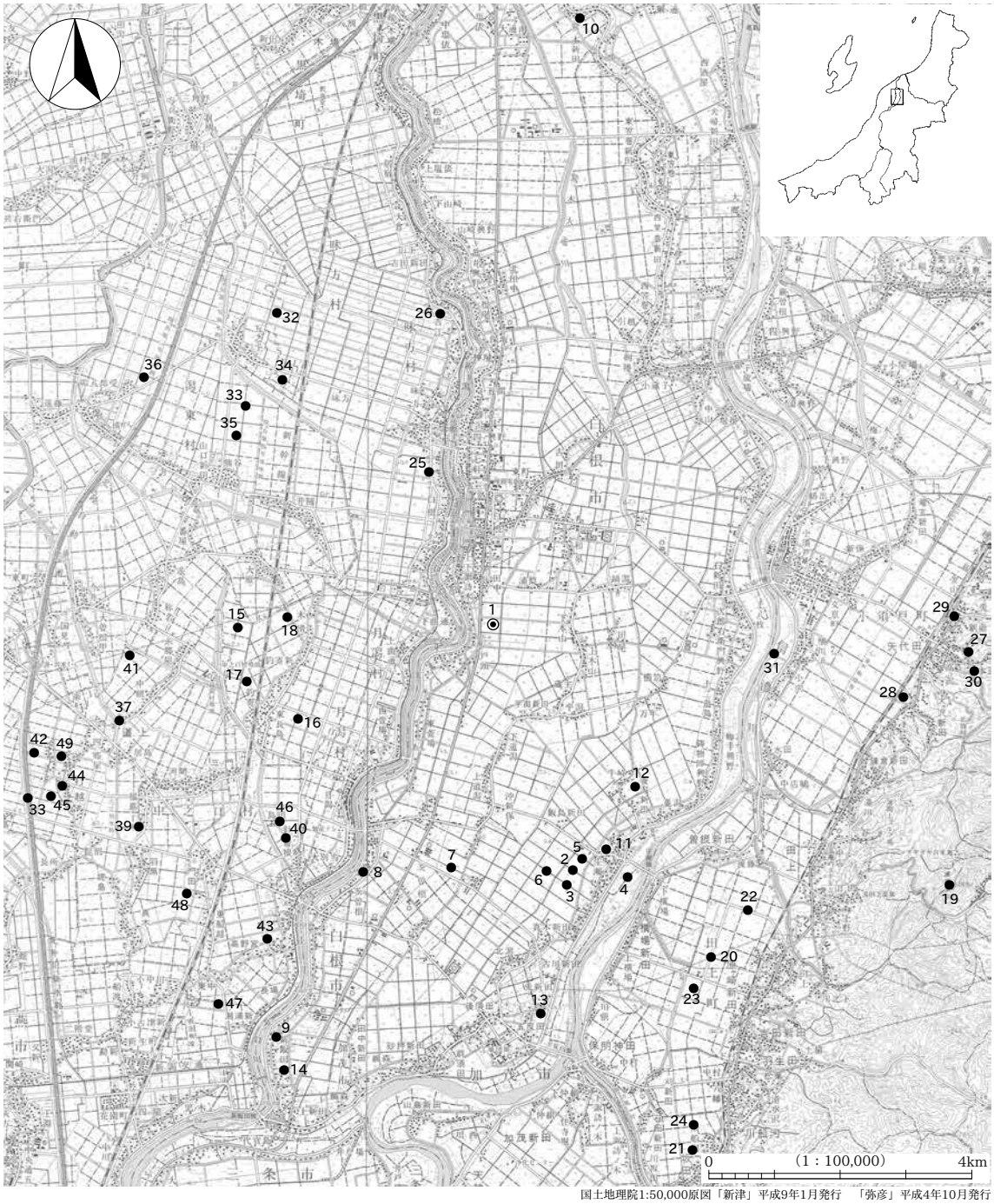
B　周辺の遺跡（第５図）

白根市内で遺跡台帳に登録されている遺跡は、15を数えるにすぎない。そのうち最も古い遺跡は後述する鎌倉時代の馬場屋敷遺跡下層で、それ以前の遺跡は発見されていない。沖積地にある白根市は、信濃川・中ノ口川などの氾濫による土砂の堆積が厚く、遺跡が埋没していて発見しづらいという要因がある。

集　　落　白根市で城館遺跡を除いた中世遺跡は５例しかなく、そのうち発掘調査が行われ、明らかにされている遺跡は鎌倉期の馬場屋敷遺跡（３）のみである。馬場屋敷遺跡は信濃川左岸の自然堤防上に存在する遺跡で、信濃川の氾濫層と考えられる間層を挟み16世紀前半に比定される中世後期の上層と、13世紀後葉から14世紀初頭に比定される中世前期の下層の２時期で遺構・遺物が検出された。特に下層からは、間層に覆われ建物の間仕切り部材・木製品・鉄製品が良好に遺存し、鎌倉期の村落の様子をうかがい知ることのできる重要な資料が出土した。木製品の中には多くの呪符木簡により当時の信仰をうかがい知ることができ、年代の記された木札から出土遺物の絶対年代の比定が可能である［川上・遠藤1983］。

城　　館　白根市で確認される城館は、平野部に位置する館のみで４例知られるが、いずれも小領主の館と考えられている。中世村落が明らかにされた馬場屋敷下層遺跡のある庄瀬地区では、庄瀬館跡（11）、牛崎館跡（12）が知られている。庄瀬館跡は天正５（1577）年の『三条同名同心家風給分御帳』に「井口分、志やう村」とあり、三条城将山吉氏の家臣井口氏の館と考えられている。牛崎館跡は史料がないが、里見氏の館と考えられている。白根市の南方にある新飯田館跡（14）は新田義顕の一族の館で、上杉氏所領時には代官の館になったと考えられている。加茂市に近い信濃川左岸にある兎館跡（13）は、須田城主須田氏の出城と考えられている。須田氏は信州高井郡を本拠としていたが、武田信玄に追われ、上杉謙信を頼り須田村（加茂市）を所領としていた。浦廻遺跡周辺では、現在のところ城館は確認されていないが、戸頭にある大坪・内囲など館の存在をしのばせる地名がある［飯田前掲］。

寺　　院　白根市に存在する寺院は38寺あり、そのうち中世が開基とされる寺院は６寺知られるが、他の土地で開基し移転してきたもので、その多くは慶長年間（1596～1615）以降に新田開発による開村に伴って開基・建立されたと考えられている。宗派は浄土真宗が多い。その理由として、慶長３（1598）年堀秀治が入封し、上杉遺民一揆後に上杉に荷担した真言宗寺院が弾圧を受けたこと、浄土真宗の浸透していた北陸地方の人たちを移住させたことなどが考えられている［小林1989］。浦廻遺跡のある戸頭には浄土真宗大谷派の長願寺が存在し、その開基は天文12（1543）年とされる。



国土地理院1:50,000原図「新津」平成9年1月発行　「弥彦」平成4年10月発行

No	遺跡名	立地	時期	種類
1	浦廻遺跡	沖積地	鎌倉	散布地
2	若宮様	自然堤防	室町	集落
3	馬場屋敷	自然堤防	鎌倉・室町	集落
4	元屋敷	信濃川河川敷	中世	製鉄関連
5	興野	自然堤防	室町	集落
6	戸石墓	沖積地	中世？	散布地
7	嵐潟	沖積地	鎌倉	散布地
8	永安寺の五輪塔群		室町	石塔
9	等運寺の五輪塔		室町	石塔
10	林葉寺の五輪塔		中世	石塔
11	庄瀬館跡	自然堤防	戦国	城館跡
12	牛崎館跡	自然堤防	戦国	城館跡
13	兎館跡	自然堤防	戦国	城館跡
14	新飯田館跡	自然堤防	戦国	城館跡
15	兵蔵遺跡	微高地	弥生・中世	散布地
16	本行寺遺跡	自然堤防	室町	散布地
17	六枚田遺跡	微高地	平安	散布地
18	長田遺跡	微高地	鎌倉・室町	散布地
19	護摩堂城跡	山頂	南北～戦国	城館跡
20	田上館跡	沖積地	室町	城館跡
21	金屋鉄滓出土地	台地先端	中世	製鉄関連
22	鰊吐遺跡	沖積地	中世	散布地
23	上谷内遺跡	沖積地	鎌倉	散布地
24	大坪遺跡	沖積地	鎌倉	散布地
25	江向遺跡	沖積地	鎌倉	散布地

No	遺跡名	立地	時期	種類
26	吉江館跡	自然堤防	室町	城館跡
27	丁専寺跡	丘陵	室町	寺院跡
28	五本田館跡		室町	城館跡
29	三沢遺跡	台地上	室町	製鉄関連
30	西善寺石仏		南北朝	石仏
31	横川浜外堤外地	信濃川河床		散布地
32	ブギリ遺跡	沖積微高地	平・室町	散布地
33	与平渇遺跡	沖積微高地	平・室町	散布地
34	宇畑遺跡	沖積微高地	室町	散布地
35	三條田遺跡	沖積微高地	室町	散布地
36	三丁下遺跡	沖積微高地	室町	散布地
37	万坊江遺跡	自然堤防	平～安	散布地
38	茶院遺跡	微高地	平～江	散布地
39	上向遺跡	自然堤防	平・鎌	散布地
40	梅田遺跡	自然堤防	平～江	散布地
41	荒田遺跡	微高地	平～鎌	散布地
42	高六遺跡	微高地	鎌倉	散布地
43	円明寺跡	自然堤防	室町	寺院跡
44	宇智古志神社	自然堤防	室町	墳墓
45	茶院Ｂ遺跡	自然堤防	南・室	古銭
46	島田Ｂ遺跡	自然堤防	鎌倉	散布地
47	高野宮館跡	自然堤防	室町	城館跡
48	東船越館跡	自然堤防	室町	城館跡
49	打越館跡	自然堤防	室町	城館跡

第５図　周辺の中世遺跡

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

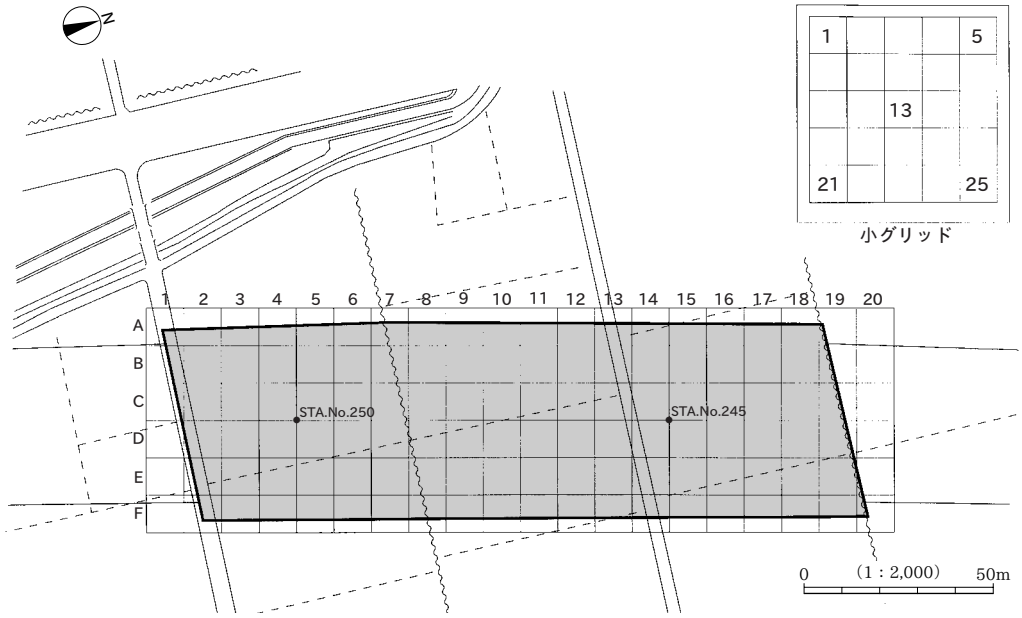
グリッドの長軸は、白根バイパスのセンター杭STA. No.245とSTA. No.250を直線で結び、STA. No.250を基準にして10mごとの方眼を組み大グリッドとした。その結果グリッドの長軸は、真北から15度16分38秒86東偏している。

大グリッドは10m方眼を１単位とし、南西側から長軸を算用数字の１～20、短軸をアルファベットのA～Fとし、両者の組み合わせで「1A」のように表現した。小グリッドは大グリッドをさらに2m方眼に分け、南西方向から１～25の算用数字を用い「1A13」のように表現した（第6図）。

なお、国家座標値（日本測地系）はSTA. No.245がX＝193916.2548、Y＝45867.6612、STA. No.250がX＝193819.7907、Y＝45841.3124である。

2　基 本 層 序

本遺跡は沖積地に立地しているため、表土・耕作土の下は植物遺体を含む粘質土・シルト・砂の互層となっており、13層に分層した。調査区内の地層は南方向に低く傾斜し、約100m離れた5B⑦（第7図⑦）と15D⑨（第7図⑨）のⅨ層上面では、2m以上の比高がある。そのために調査区南側ではⅧ・Ⅸ層が厚く、土層がレンズ状に入っていたので、それぞれ6層、2層に分層した。その中で、Ⅷ層が中世の遺物包含層に相当し、多数の木製品が出土した。



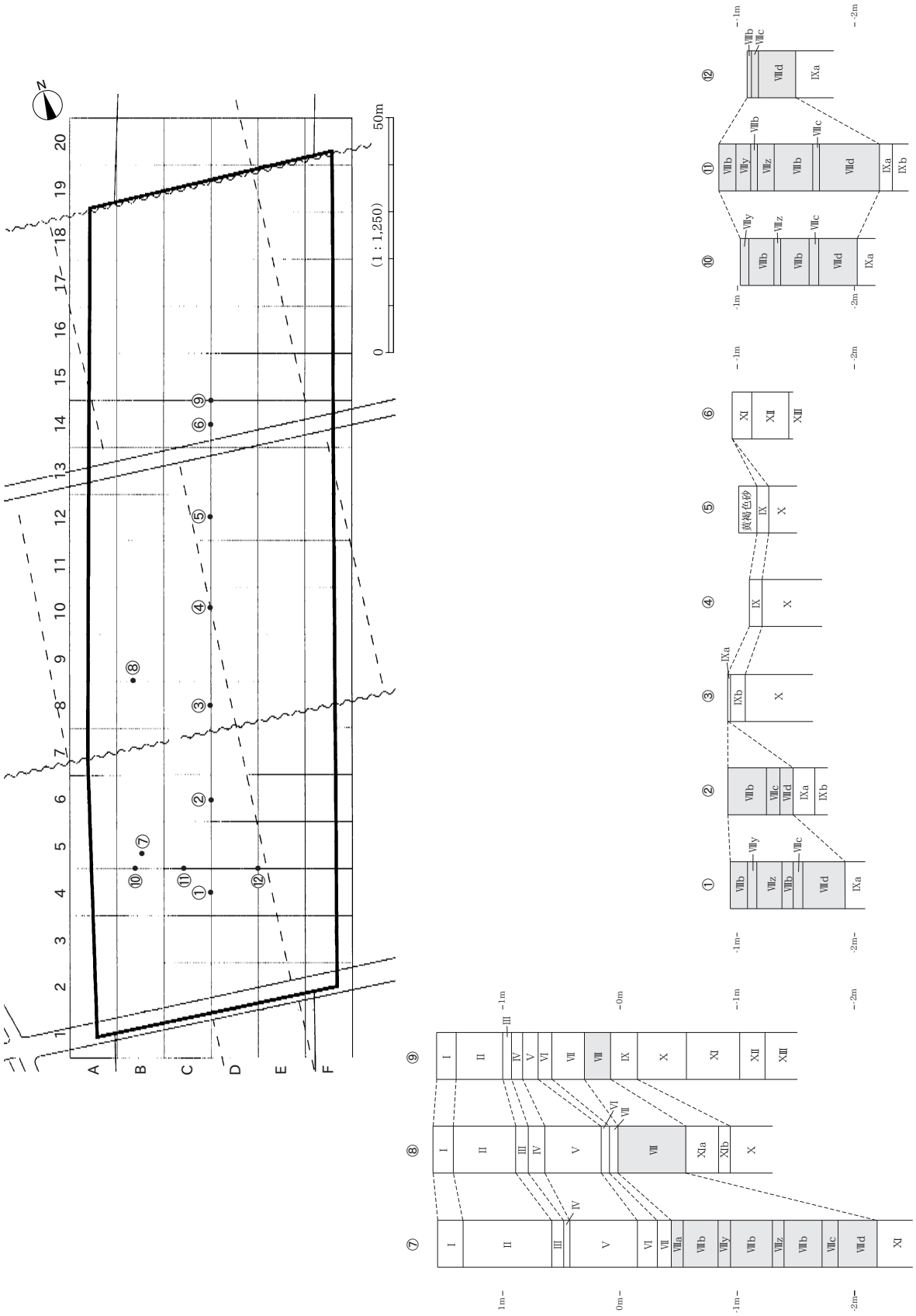
第６図　グリッド設定図

また遺跡内では、地震による噴砂や液状化現象痕が多数確認されている。図版31では、Ｘ層からＶ層近くまで噴き出している砂やⅧ層の砂層が波打っている様子が観察できた。

Ⅰ層：表土
Ⅱ層：褐色粘質土。現水田床土を含む
Ⅲ層：黒褐色粘土。炭化した植物遺体を含む
Ⅳ層：褐色粘質土。植物遺体を多量に含む
Ⅴ層：青灰色粘質土。植物遺体を含む
Ⅵ層：青灰色砂。部分的に粘土を含む
Ⅶ層：褐色粘質土。灰白色～黄褐色粘土ブロック（火山灰？）を含む
Ⅷ層：灰色粘質土・シルト・砂の互層。中世の遺物包含層。大型の土坑を検出
　Ⅷａ層：灰色シルト質土
　Ⅷｂ層：黄褐色砂と灰色砂の互層
　Ⅷｃ層：灰色粘質土
　Ⅷｄ層：灰色シルト質土
　Ⅷｙ層：灰色粘質土に黄褐色砂や灰オリーブ粘土が混在する。植物遺体を多量に含む。遺物が多数出土
　Ⅷｚ層：灰色粘質土に灰色砂が混在する。植物遺体を多量に含む。遺物が多数出土
Ⅸ層：青灰色粘土。灰色粘土ブロック（火山灰？）を含む
　Ⅸａ層：青灰色粘土
　Ⅸｂ層：暗青灰色粘土
Ｘ層：青灰色砂。植物遺体を多量に含む。畝状遺構を検出
Ⅺ層：青灰色粘質土。足跡群を検出
Ⅻ層：青灰色砂
ⅩⅢ層：青灰色シルト

3　遺構・遺物の検出状況

遺構・遺物の検出は、調査区南側に集中している。遺構はそれぞれ検出された層位が異なり、Ⅷ層に大型の土坑、Ｘ層に畝状遺構、Ⅺ層に足跡が検出された。調査区内の地層は南方向に低く傾斜しており、全ての遺構が現在の標高でほぼ同じ高さから検出されていることが興味深い（図版1）。遺物はおおむね大型の土坑や骨の周辺から多く出土している。



第７図　基本層序　（柱状図作成地点）

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

遺構は調査区中央部から南側に分布し、北側では検出されなかった。最も南側ではⅧ層で土坑が３基、中央部ではⅩ層上面で畝状遺構が２区画、その北側ではⅪ層上面で足跡群が検出された（図版1）。時期的には出土する遺物から、Ⅷ層は13世紀後半から14世紀前半に相当する。層位学的に見ると、土坑はそれ以降の時期、畝状遺構はそれ以前、足跡群はさらにそれ以前と考えられる。後述する^{14}C年代測定からも、ほぼ13世紀後半と分析された。しかし、層位学的に遺構の時期が異なることや検出数が少ないことから、遺構全体としての性格がつかみきれなかった感がある。

2　記述の方法

遺構の記載は土坑・畝状遺構・足跡群の順に記述した。記述に当たっての一応の基準と、使用する語句や数値の意味、実測図の表現方法などについて以下のように統一した。

遺構名の表記

遺構名は、第１表のような略称と遺構番号を組み合わせて表記した。略称は遺構の種類を示し、遺構番号は通し番号とした。畝状遺構は個々の溝に番号をつけず、大きく２つの区画として捉えて、それぞれA・Bと表記した。また、足跡も個別に番号をつけず、集中して検出したものを一括して足跡群と表記した。

遺構の種類	略称
性格不明の土坑	SX
畝状遺構	UNE
足 跡 群	なし

第１表　遺構の略称

遺構名の表記

SX　02

遺構略称　遺構番号

土　　坑　平面プランが不定形のため規模の記述は長軸・短軸とし、最大値を表している。深さについては重機による表土・包含層掘削で、遺構が確認できた面からの最深部を計測している。

畝状遺構　畝状遺構は砂から成り、それを埋めているのが粘質土であった。砂は崩れやすく、掘り上げるとすぐに遺構の形状が変わりやすいため、畝状遺構の凹部を埋めている粘質土を掘らずに、写真撮影、実測図作成を行った。そのため、畝状遺構の平面実測図は上場のみの図である。

足 跡 群　足跡は広範囲にあり図面化すると小さくなるため、平面実測図は上場のみを表現した。

3　遺 構 各 説

A　土　　坑

大型の土坑は、重機による表土・包含層掘削によりⅧ層遺物包含層中から検出された。そのため遺構確認面はⅧ層、あるいはそれより上面と考えられ、時期的には包含層出土遺物より若干新しくなる可能性がある。^{14}C年代測定では、SX02最下層の７層が740±30yrBP（cal AD1280）と分析された。３基の土坑の覆土は多数に分層されるが、基本的には砂・シルト・粘土の互層である。また、それぞれが断面形に

沿ってほぼ水平に堆積し、砂層内がラミナを成していることから、流水の働きにより自然埋没したものと考えられる。

SX01（図版２）

調査区南西部の4Cに位置する。不定形で長軸720cm、短軸560cm、深さ102cm、底面標高は－1.78mを測る。断面形はほぼ皿状であるが、南東側の壁面は内側にえぐられた形を呈している。７層からは箸、９層から木簡（42）が出土した。

SX02（図版３）

調査区南西部の２・3Cに位置する。不定形で長軸892cm、短軸704cm、深さ105cm、底面標高は－1.83mを測る。断面形はほぼ皿状を呈し、底面は平らであるが、最深部周辺で少し落ち込んでいる。６層から木簡（82）、４・６層からは木製品が出土した。また、６層からは関節両端の欠けた人骨の右脛骨が、最下層の７層からは頭頂部が逆さになった状態で人頭骨が出土した。しかし、それ以外の部位の骨が出土していないことや、遺構が自然埋没であることを考えると、遺構の性格は不明である。

SX04（図版２）

調査区南西隅の2Bに位置するが、遺構の西側が調査区外に延びているため、全体像を把握することはできなかった。調査区内において計測できた範囲では、長軸496cm、短軸170cm、深さ51cm、底面標高は－1.50mである。

B　畝状遺構

「畝状遺構」とは、畝の横断面形がなだらかな波状を呈しており、畝（凸部）と溝（凹部）が平行して並び群をなしている。性格は現在のところ明確ではないが、形状は群馬県有馬遺跡Ⅱ［佐藤1990］などで火山灰や軽石層下から検出されている「畠跡」の遺構と類似している。当例も畠の畝の痕跡である可能性が高く、横断面形が畝と溝の波形形状を明確に示していることから、「畝状遺構」と称することにした。

畝状遺構は、調査区中央部の東西に２区画存在している。遺構は基本的にⅩ層の砂から成り、Ⅸ層粘質土に覆われている。畝状遺構の存在する区域ではⅨ層が細分化され、溝（凹部）の底部から順に畝の形状に沿って縞状水性堆積土層が見られる。

UNE－A（図版６～８）

主に７・8D～６・7Eグリッド内にあり、畝の長軸方向に12ｍ、その直交方向に27ｍの範囲で検出される。東部は調査区外に延びており、全体像を把握することはできなかった。

検出された畝は22本を数え、長軸はN46～56°Ｅ方向にほぼ直線状に並走している。畝の長さは10.2～12.3m、畝幅は溝の中心間で1.2～1.5m、畝頂から溝底までの高さは21～29cmである。UNE－Ａ区画内27mの比高は9cmで、ほぼ平坦な地形に畝が作られている。遺物の検出は見られなかった。

畝の覆土はⅩ層青灰色砂から成るが、全ての畝（凸部）の中央部に暗オリーブ褐色粘質土が筋状に入っている。

UNE－B（図版６～８）

主に７・8B～７・8Cグリッド内にあり、畝の長軸方向に17m、その直交方向に10ｍの範囲で検出される。横断面の観察から、溝（凹部）が上下に重複しており、畝は２回にわたって作り替えられたものと考えられる。

検出された畝は、最も新しい段階のものが11本、長軸はN21～45°E方向でやや弧状に並走している。畝の長さは14.5～17.8mで、西に向かうほど長くなっている。畝幅は溝の中心間で0.7～1.0m、畝頂から溝底までの高さは10～17cmである。この区画の地形は南方向に低く傾斜し、南北両端部18.5mの比高は58cmで、畝はだいたい地形の傾斜と同じ方向に作られている。この最も新しい畝の7C17グリッドから、両端抉りのある木製品（113）が出土した。

次に古い畝は10本を数え、畝幅が溝の中心間で0.8～1.9mである。この畝は最も新しい畝に切られているため、明確な畝高は分からないが、断面から測り得る範囲では7～17cmを示している。溝の断面形は半円状である。最も古い畝は平坦で、溝が2本検出された。溝幅は1.7m、溝の深さは6～9cmである。断面形は皿状を呈している。なお、下層に当たるこれら2つの畝は、土色が似ていることや砂地で崩れやすかったこともあり、平面プランでは明確に捉えることができなかった。そのため、断面からのみの検出である。

覆土は、最も古い畝がX層の砂から成る。それを覆う畝（図版7・8畝状遺構土層注記12）は褐色～灰オリーブ色細粒砂で、溝も同じく褐色～灰オリーブ色細粒砂（図版7・8畝状遺構土層注記11）からなる。それらを切りながら、波状に整形されたものが最も新しい畝である。

C　足　跡　群（図版9）

足跡は上下2層で検出され、下層のXI層上面で集中して検出されたものを足跡群と呼称する。

足跡群は13D・E、14Eグリッド、南北12m、東西10mの範囲にあり、86歩検出された。検出層位はXI層上面で、覆土はX層の砂である。足跡の長さは15～28cmで平均22.4cm、深さは1～3cmを測る。歩行の様子は3カ所でうかがわれ、それ以外は分散している。歩行AはN35°W方向に、両足を開きながら、ほぼ並行に前進している。足跡は13歩あり、左右間は約30cm、同じ側の足の歩間は約15cmである。歩行BはN18°E方向に、歩行Aと同じように並行に前進している。足跡は7歩あり、左右間は約15cm、同じ側の足の歩間は約17cmである。歩行CはN33°E方向に進み、途中で直交して南東方向に曲がっている。歩幅は約45cmで、足跡は4歩分確認された。足の動きから考えると、曲がる直前にもう1歩あるのではないかと思われたが、確認できなかった。なお、確認面のXI層が北東方向に高く傾くなかで、この周辺が遺物希薄なため重機で一様に標高－1.5mの深さまで掘削を行った後での検出であったことから、足跡の全体像を把握することができなかった。そのため、足跡の範囲はもっと広がっていた可能性が高いと考えられる。

その他、VIII層遺物包含層中の7Cグリッド、南北2m、東西1.5mの範囲からも4歩分の足跡が検出された。足跡内の覆土は、VIIIb層黄褐色砂である。足跡は長さが平均22cm、深さ1～3cmを測る。地形的に高いN36°E方向に向かって歩行している様子がうかがわれ、歩幅は約43cmである。この先にまだ足跡が残っていた可能性はあるが、遺物の希薄なVIII層上部を重機で掘削した後での検出のため、全体像を把握することはできなかった。なお、この足跡の下層は、UNE－B東端に当たる。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

遺物は2,335点、そのほとんどが包含層からの出土で、その大半は土坑のある調査区南半側に集中する（第8図）。その種類は土器・木製品・骨である。遺物量は土器が1点のみで、木製品が2,081点と大多数を占める。このうち卒塔婆・呪符で占める木簡が108点あり、この遺跡の性格を考える上で重要な特色を示している。そのため、木簡は木製品とは項を別にして述べた。骨は人骨5体、犬4頭程で、散在的に検出したものもあるが、図版3～5に図示したものはまとまっていたものである。

観察表の記載は土器・漆器・木簡、それ以外の木製品に分けて表とし、漆器は高台径・底径・口径・器高を、その他の木製品・木簡は最大の長さ・幅・厚さの計測値を記した。

2　土　　器（図版10－1）

1がこの遺跡で出土した唯一の土器で、手づくね成形の土師器質皿である。しかし、体部は打ち欠きされ本来の機能はなく、29の柄杓の蓋に転用されていた。

3　木　製　品（図版10－2～図版19－134）

木製品は、容器・服飾具・祭祀具・杭などが出土した。容器は漆器・曲物・折敷・箱があり、服飾具は下駄・扇、生活用具は行火・火鑽臼、食事具は杓子、祭祀具は刀形・陽物形・箸などがある。製品の一部で種類が確定できない部材、不明なものなどはその他の項目にまとめた。

漆器（2～21）

漆器は20個体出土している。器種は皿・椀・片口鉢・膳が認められ、その中で椀が多い。塗膜分析は未同定である。上塗りの用語は、四柳［1995・1997など］の漆器研究に従った。漆器の大半は土坑・骨が検出された近辺から出土した。時期的には13世紀後半から14世紀前半に位置づけられると思われる。

皿（2）　皿は1点のみである。総黒色系漆で、素地の底部調整痕が明瞭に認められる。

椀（3～16）　3～10は総黒色系漆で、11・12は内面赤色漆塗りのもので、13～16は総黒色に赤色漆絵が描かれているものである。5・6は無高台（碁笥底）で、その他は輪高台である。大きさは口径が計測できたもので12.6～15.3cm、9は口縁形態が、輸入陶磁器の青磁盤に類似するもので口径が19.1cmある。器高は4.2～5.4cmである。3は体部中位に稜をつくる。10は体部に地の調整痕が認められ、底面には「入」もしくは「人」の刻書がある。13は内外面に秋草紋が描かれ、底面に「工二」と刻書されている。14は梅紋が内外面に描かれていると思われるが、外面は剥げて断片しか残存していない。底面は細かなキズが認められる。15は残存が良好で、内外面に三ツ巴紋が描かれている。見込みには3点単位で、口縁部から外面にかけて描かれているものは2点単位となっている。16は草花紋が描かれている。

片口鉢（17・18）　17・18は片口鉢で、17は有台、18は丸底状の無台である。17は外面・口唇部・見込み部に赤色漆があり、花紋が描かれている。18は外面に花紋が描かれている。底面は下地の漆が施されておらず、地のままである。

脚付膳（19・20）　19・20は周縁に木釘や孔があり、脚付きの丸膳と思われる。19は外面黒色内面赤色塗りである。20は内面のみ黒色漆を施している。

不明（21）　21は外面黒色漆であるが、内面は焼けて炭化している。

曲物（22～29）

22～26は曲物側板で、27・28は底板、29は柄杓である。側板は内面にケビキが認められる。27は側面に側板をとめていた木釘穴がある。28は周縁2か所で綴じ皮が残り、1か所に綴じ皮を装着する孔がある。割れ面にある綴じ皮は補修したものであろうか。片面には傷が多く認められる。29は柄杓であるが、1の土師器皿で閉じている方を下に向けて出土した。底板は側板にはめ込むだけのものである。葬送・供養に関係するものと思われるが、容器の内部から儀礼行為を示す痕跡は確認できなかった。柄の装着孔には栓のように柄の一部が残存する。

蓋・円形板（30～33）

30～33は曲物などの容器の蓋と考えられるものである。30～32は中央に摘みを装着する孔のある蓋板である。30は楕円形状で、中央に孔と周辺に木釘穴が2か所ある。表面は黒色に変色している。31は円形状で中央に孔、ホゾ溝があり、木釘痕が見てとれる。表面は両面とも黒色に変色している。32は中央に孔があり、表面は黒色に変色している。33は孔が2か所あり、周縁に2列の木釘痕が2か所認められる。折敷の可能性もある。

折敷（34～44）

34～44は折敷である。隅を切り整え、周縁に桟を留めるための綴皮を通す孔がある。表面は傷が認められるものが多い。

俎板（45）

脚付の俎板で、両面に無数の傷が見られる。

箱（46・47）

46・47は箱物部材と考えられるものである。46は一部こげており63のような行火の側板と思われる。下辺と側縁には取付けの木釘痕が多くあり、釘も残存する。47は周縁に取付けの木釘痕が6か所あり、内面の一部がこげている。

下駄（48～51）

下駄は歯部のみのものも含めて4点出土した。48は方形の露卯差歯下駄で、前歯が残存する。歯を差し込むホゾ穴は前後とも1か所ずつである。49は方形の小型連歯下駄である。横緒穴には鼻緒を固定させる楔が残っている。50は台形になる歯の断片である。51は楕円形状の露卯差歯下駄の台部で、歯を差し込むホゾ穴が前で3か所、後ろで2か所ある。

草履芯（52～57）

稲藁などで編み鼻緒をつけた草履の芯になる薄板で、左右対称で切り出した板2枚で片足分になる。先端の内側に小孔が1か所あり、側縁の中心やや後方に方形の切り取りがある。52～54は左右対称2枚で出土したが、55～57は片側のみである。

扇（58）

扇はSX01付近から出土した。扇骨が８枚と軸棒が残存する。扇骨の長さは32.9cmで、幅1.7cmである。

杓子（59・60）

杓子は３点出土し、その内２点を図示した。いずれも身が平たいしゃもじ形のタイプである。２点とも柄と比して身の部分が長い。

遊戯具（61・62）

SX02から出土した61は球体を呈していて、毬杖の玉ではないかと考えている。毬杖とは長い柄付の槌で木製の毬を打つ遊びである。毬杖の玉は球状に加工したものだが、完全な球形を呈しているものはほとんどないといわれている。62は形状から「竹とんぼ」ではないかと考えた。中心に小孔が２つあり、プロペラ状を呈している。

行火（63）

63は箱状を呈し、内面がこげて一部穴があいてしまっている。青森県浪岡町浪岡城出土の行火としているもの［木村1991］に類似している。また、同様なものが民具として、朝日村・黒川村・紫雲寺町などに保存されていることから行火とした。箱の下から骨片が見つかっている。

火鑽臼（64）

64は差歯下駄の歯部であるが、転用されて火鑽臼として使われている。

鞘（65・66）

２点出土した。長さが21.5cmと23.1cmで小刀もしくは刀子の鞘と考えられる。柄との合わせ部分は半円形状に削られている。65は半面しか残存しない。66は２枚に割れていて、刃部を納めるには側面にある３対の刻みから紐などで巻いて結合していたのではないかと考えられる。鞘内面は加工が施されておらず、平滑である。表面には「×」の彫りこみがある。

祭祀具（67～79）

祭祀具は刀形・陽物形の形代がある。箸は通常、食事具であるが図版４の人骨の中に箸が供されており、葬送・供養に関わるものとしてここに含めた。呪符木簡は呪術的祭祀具としてこの中に含まれるが、別項の木簡の中に含めて述べている。67は陽物形で立体的な丁寧な作りである。68・69は刀形である。共に身と茎部が明瞭で身は刃部が丁寧に表現されている。70～79は箸である。箸は全部で1,038点出土しており、出土遺物の44.5%を占めている。出土分布は調査区南半分からまんべんなく出土しているが、特に大型の土坑周辺に集中している（第８図）。77～79は長さが80cm程あるものだが形状と用途を考えると箸と同類のものと考えここに含めた。

杭（80・81）

共に先端を削り、尖らせている。

その他（82～134）

82～90は小孔があるものである。84は折敷の桟となるものであろうか。87は把手になる部分であろうか、片面に黒色漆が塗られている。89は矢印のような形状で上端に２か所木釘穴があり、表面は傷痕が目立つ。90は上端がくびれ、木釘穴が上下とも２列単位である。

91～93は工具の柄もしくは把手と思われる。92は握り部分は円形で、工具のホゾ穴に差し込むと考えられる先端は断面方形に加工している。93は柄を通すホゾ穴がある。

94は鋸歯状になっている板材である。95は半分しか残存しないが八角形状を呈し中心に孔をもつ。

96～100は棒状のものである。96は黒色漆塗りされているものである。97～100は柄杓の柄となるものであろうか。98は先端が突起状に加工されている。

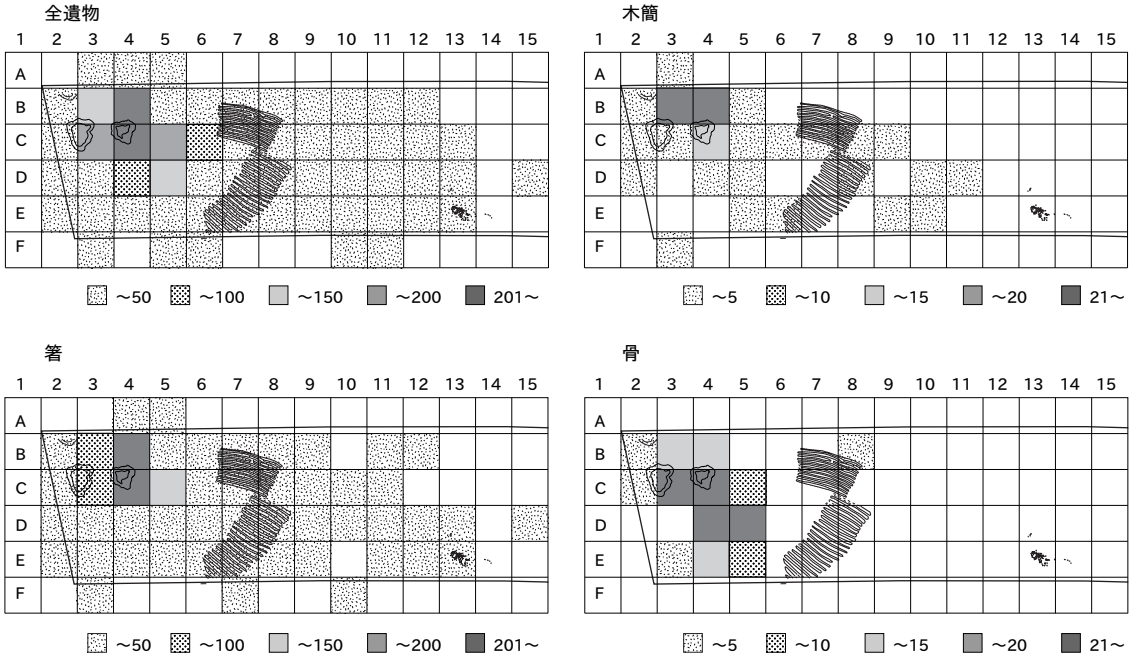
101～104は祭祀具の可能性があるが確定できないのでここに含めた。101は上端に抉りを入れて突起させている。浮子の形状にも似ている。102は頭部が突起し大型の木釘のようにも思える。103は下段に刻みを入れ、上部は鋸歯状にした加工である。104は上部に細かい刻みがあり、下方に向かってあたりを付けているような傷が見られる。

105は片端に抉りを入れ引っ掛けを作り、天秤棒のような形状を呈する。106は一側縁を鉤状にし、表面は木釘穴が連続して穿れている。107は小刀状を呈し、ヘラの可能性がある。108は角材で栓もしくは楔であろうか。109は凹部2か所に木釘を打ち把手のような形状である。

110～113は欠損しているものもあるが、両端に抉りが入るものである。似たものが和島村大武遺跡［春日2000］、中条町下町・坊城遺跡［水澤2001］であり、そこでは柄、把手とそれぞれ報告されている。113はUNE-Bから出土した。

114～120は部材である。114はホゾ溝に孔があり、上下端に1か所ずつ木釘穴がある。115は鉄釘が一本打たれている。116は他の材と継ぐ加工がされている。117はホゾ穴が側面にある。118は材を継ぐ加工が両端にされている。119は木釘穴が連続して穿れている。120は他の材と継ぐ加工がされ、表面に木釘痕が見られる。

121は木釘穴が1か所あり、先端が尖りヘラ状を呈す。122は楕円形板の可能性がある。123は木釘痕が1か所あり、側面は抉られている。124は板材で木釘穴が3か所ある。125は板材4枚あるが、元々は組まれていたと思われる。126は方形の角材で側面に傷痕があり楔形を呈する。127は表面が炭化している。131は割れているものだが、表面に黒色漆が塗られている。134は細かく砕けてしまったが、角型の火櫃のような形状を呈する。

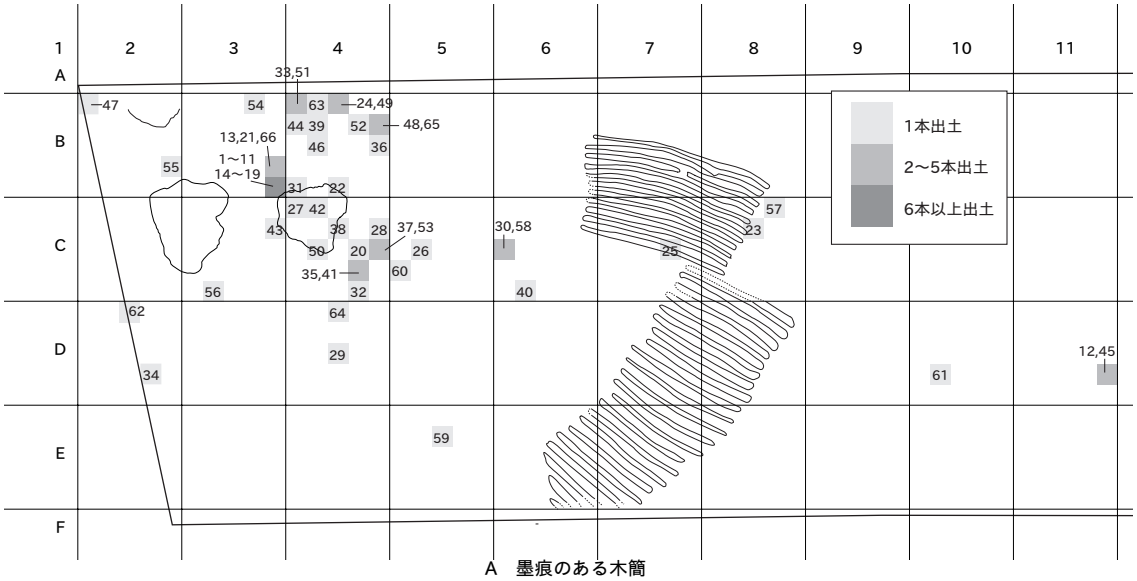


第8図　遺物の出土分布

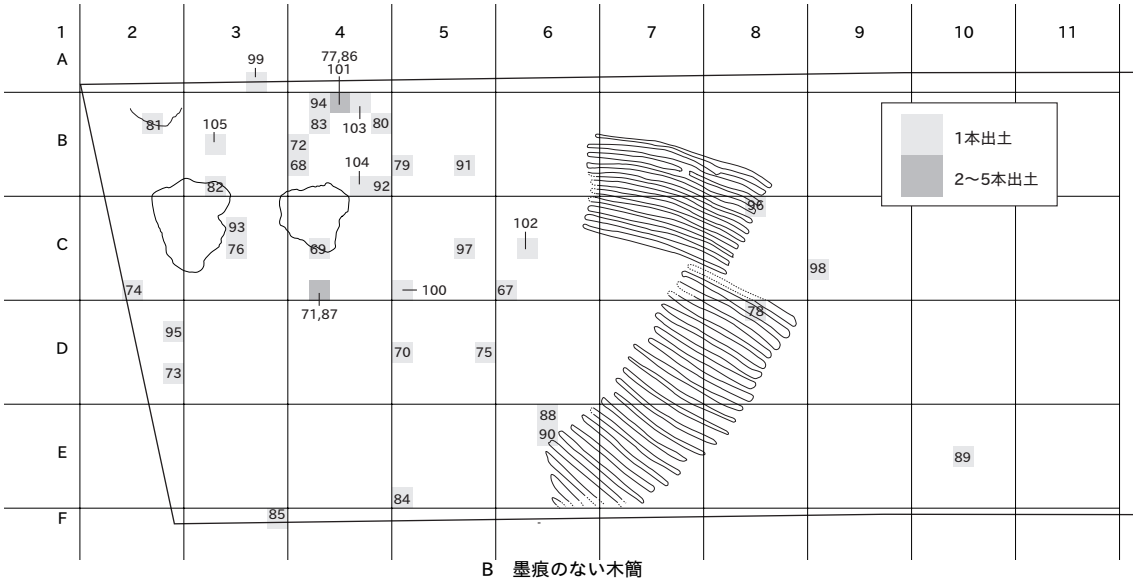
4　木　　簡（図版20～28）

総点数108点が出土した。第９図に示したように出土地点は調査区内の南側に偏り、SX01や骨類が検出された付近からの出土である。ただし、遺構内からの出土は42・82の２点のみで、残りの全てはⅧ層からの出土である。この土層は水に浸った痕跡が観察されている。しかし、木簡が一括出土したことや、年紀の判明した29号木簡が隣接する小グリットから出土した破片と接合した状況などを勘案すると、多少の移動はあったにせよ、基本的に木簡はほとんど原位置を保っていると見なされる。

木簡は中央で縦に割れているものが見られるが、人為的と確定されるものはない。刃物痕跡と思われる形状については明瞭なものもあるが、それ以外については土圧や風化などによるか意図的な廃棄にともなうかは判然としない。

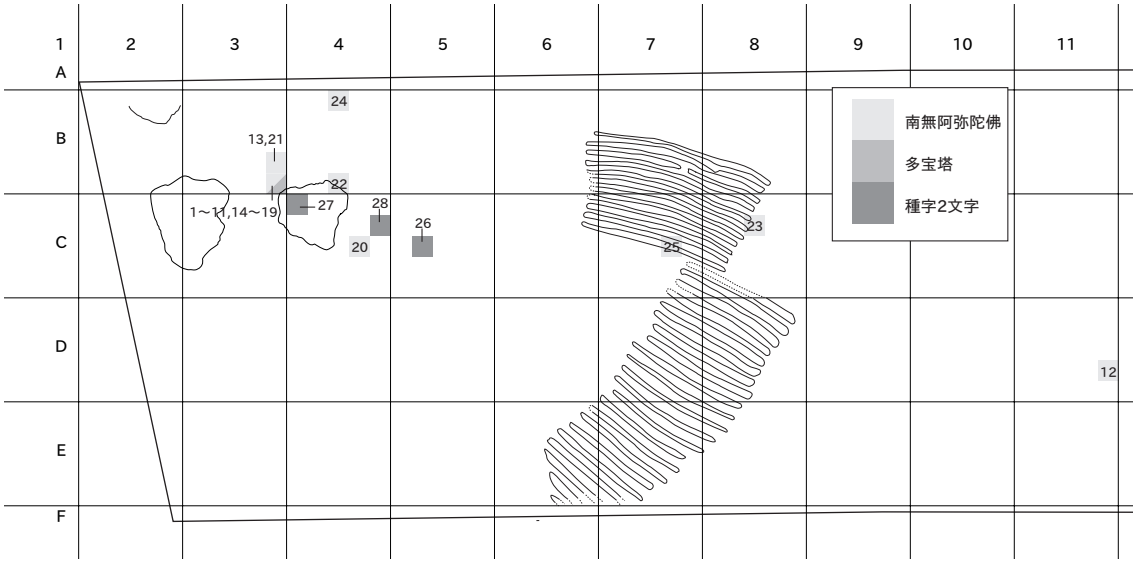


A　墨痕のある木簡

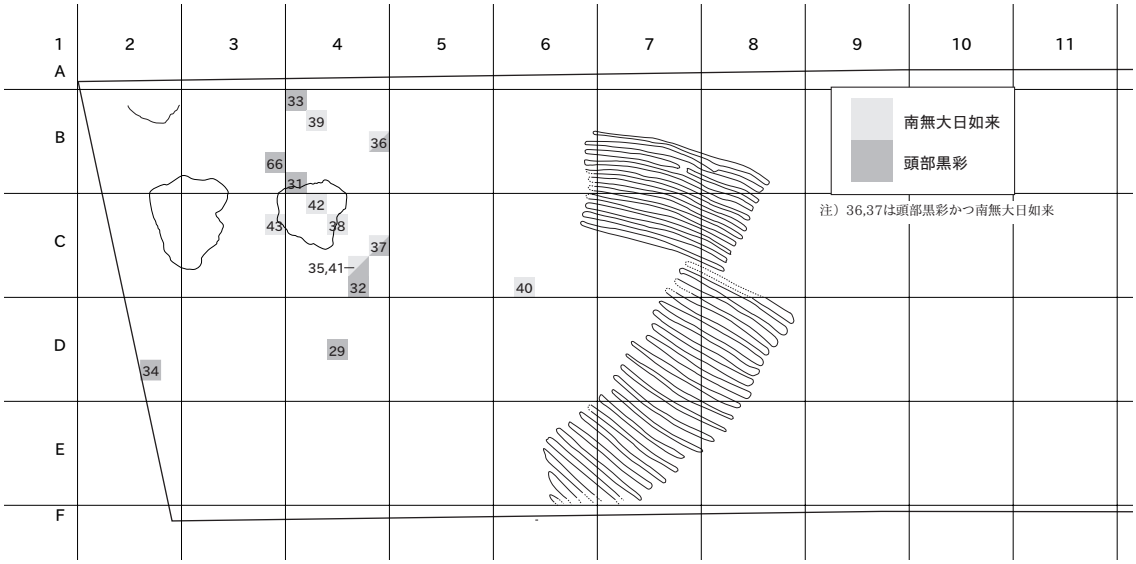


B　墨痕のない木簡

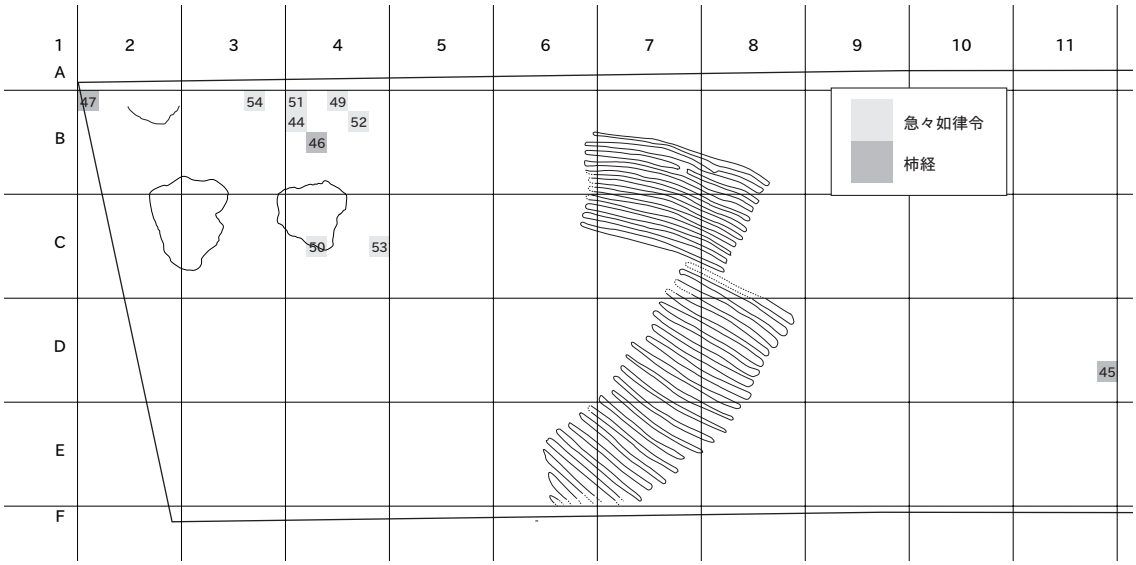
第９図　木簡の出土分布



第10図　南無阿弥陀佛等木簡出土分布



第11図　南無大日如来等木簡出土分布



第12図　呪符等木簡出土分布

A　多宝塔及び地蔵菩薩等木簡（図版20－1～11）

11点がまとまって出土した。1号木簡が一番下となり、他2～11号がその上にのる出土状況であった。また、約1m離れた同一グリット内では、14～19号の6点が一括出土している。

1号木簡の表には「梵字（バン）　南無阿弥陀佛　南無十王」、裏には「多宝塔」の絵の塔身上層に「梵字（バン）」、塔身下層に「是法住法位　世間相常位」を二行書で記し、さらにその下方に「南無地蔵大菩薩」と記してある。なお、多宝塔の下重方形の部分に記されているのは、『大正新脩大蔵経』によれば『妙法蓮華経』方便品第二である。2～11号木簡には「梵字（バン）南无阿弥陀佛」と記されているが、11号木簡にだけ裏面にも文字が記されている。一見すると「南阿」だけのように思われるが、「南」の右下に非常に小さく「无」が記されている。おそらく誤って「南阿」と記したため、「无」を追記したが、不都合なため裏返して再度書き直したものと思われる。

同一の材から作成したと思われる木簡が2セット確認される。一つは2号と3号で、もう一つは4号と9号である。前者は裏面どうしが密着したこと、後者は両木簡の年輪幅が一部一致したことで確認した。前者の場合、文字は接合しない面が利用されている格好となる。この他の木簡についても年輪幅などを観察したが、明瞭に一致するものは見出せなかった。11号木簡は、下端部5mmほどが調整の過程で残されて一段高まっている。6号木簡は右側面が1mmほど高くなり、下端まで約10cm分が残る。8号木簡は、右下端に外に張り出すわずかな突起が見られる。

B　南無阿弥陀佛（12～25）

上述したものを除き、推測した判読も含めて14点が出土した。ほぼ間違いなく判読できたのは12・20・21・25号木簡の4点である。出土の分布状況は第10図のようである。22号木簡の接合は一見すると分かりにくいが、裏面で接合面の一致が認められる。圭頭状の上端部は、上端部欠損の22号木簡を除き、左右からの切込みは認められない。下端部は14～17・20・22・25号木簡は下端部を平坦に作っている。

主な判読の根拠は、最後の文字が「佛」と見なせることである。また、40・41号木簡の「南無」と比較した場合、梵字バン以下の文字のくずし方が多くの木簡で類似していることが挙げられる。25号木簡だけは表裏に記され、この「弥陀佛」は『五體字類』の各字に近似体がみられ、それを根拠とした。

C　南無大日如来（36～43）

8点の出土分布は第11図の通りである。圭頭状の上端部は、切込みが2段入るもの（36・38・40号木簡）と、ないもの（37・39・42・43号木簡）に大別される。下端部の形状は、42・43号木簡のように先細りになりながらも平坦にするものが多い。しかし、36号木簡が刃物で先を尖らせるように製作されているので、基本的には差し立てて用いるのに適した形状を採用したと思われる。

D　頭部墨彩木簡（29・31～37・66）

9点の内、29号木簡は裏に「元應二年」（西暦1320年）の年紀記載があり、年代決定の根拠となった。なお、この木簡は右端の長く残存した部分が整理中に接合した。「南」部分は僅かではあるが、墨の浮き上がりが見られ、墨書部分が風化により残ったことが判明した。圭頭状の頭部への切込みは2段のものが

6点（29・32・33・35・36・66号木簡）、1段のものが1点（34号木簡）、ないものが2点（31・37号木簡）である。下端部は先細りになりながらも平坦にするもの（32・33・66号木簡）と、尖らせるもの（36・37号木簡）がある。37号木簡で尖らせたものが欠損している形状から、使用法としては立てられたことが追認される。

墨彩の長さは29号木簡が7cm、31号木簡が7.5cm、32号木簡が4.5cm、33号木簡が12cm、34号木簡が6cm、36号木簡が9cm、37号木簡が6.5cm、66号木簡が11.5cm、35号木簡は残存する全てを塗る。33号木簡だけは表裏とも墨彩である。墨彩の長さの木簡の長さに対する割合は、平均で約3割を示し、墨彩部分が長いことが特徴である。

E　柿経（45～47）

柿経と思われる47号木簡を含めて3点出土した。47号木簡は大きさや頭部の形状が46号木簡と近いため、柿経の可能性を考えた。

形状が完形で残っているものはなく、いずれも下端か下半分が欠損している。45号木簡の下端欠損は自然に折れたと思われるが、47号木簡は明瞭に刃物で切断されている。一方、45号木簡は頭部の形状が特徴的で、当初はこれを松浦・原田の編年と照合して13世紀後半から14世紀初めと報告した［田中2002］。45号木簡には『妙法蓮華経』經常不輕菩薩品第十九、46号木簡には『妙法蓮華経』從地踊出品第十四が記される。

F　種字バンを重ねる木簡（26～28）

出土分布の状況は第10図の通りである。28号木簡は3断片で出土したが、刃物などによって意図的に折られたものではない。

G　呪符（急々如律令など）（44・49～56）

「急々如律令」と記された7点を含め、9点の呪符が見られた。他の木簡類がおおむねSX02の周辺に集中するのに対して、呪符に関するものは主に調査区西側に集中する（第12図）。44号木簡は判読できなかったが裏にも墨痕が見られ、他の木簡の転用と思われる。符籙は最上段で鬼が7つ記されるが一段下がるごとに一つずつ減じて最後は1つになる。なお、裏面圭頭部には桜の樹皮のようなものが張り付いている。

49号木簡の上端部は転用前の形を残し、左側からの欠損をそのまま斜めに延す形で上端部は折れ曲がる。下端部から約1cmのところも転用前の穿孔が残る。52号木簡も同様で、「出所」と思われる文字が最後にある。53号木簡の裏面は赤外線を用いると「にし」と明確に判読できる。50号と51号木簡の上端部形状は対照的だが近似する。符籙もほぼ同じものだが、50号木簡には最上端に「山」が見られる。50号木簡の方は「律令」の下にも僅かに墨痕が確認され、文字が続いていた可能性もある。54号木簡は、他の「急々如律令」木簡と比較すると小型である。上半分に記されている符籙は不明である。これと「急々如律令」の間に記された墨痕は文字か記号か判読できず、「律令」の下の「ミ」のような墨痕も解読できなかった。55号木簡は穴の左右で二分され、右断片はさらに真ん中で二分されて合計3断片に割れている。右下端部は明らかに刃物によって切り落とされ、左下端部は平坦な原形を留める。裏面は墨痕が薄いながらも五芒星が見てとれる。対して表面は具体的には分からなかった。56号木簡も文字と思われ

るものは記されず、一番上に目が、さらに五芒星が確認されただけで、その他は判然としていない。

H　その他の木簡（30・48・57～65）

上述の分類に入らない木簡について文字を中心に記しておく。30号木簡は2文字分の墨痕が見られるが、下の文字が判然としないため判読できなかった。上の文字は「无」と「元」の可能性が考えられる。48号木簡は圭頭部に一文字が確認できただけである。文字というよりは、符籙または記号かと考えられる。57号木簡は試掘調査で最初に出土した木簡だが、本調査終了後でも、既に報告した以上の文字の判読はできなかった。58号木簡は墨痕がいくつか確認できるが、梵字バンと「南」が判読できるだけで詳細は分からない。59号木簡は左下端部だけ尖らせるように削られているが、右下端部にはそうした削りは見られない。梵字バンだけが判読された。

60号木簡の上端部は欠損しているため、何文字か欠けている可能性があるが、墨痕から推測すると「梵字キャ・カ・ラ・バ・ア」の五字種字の可能性が高い。裏面も梵字と思われるが確定できない。61号木簡は縦方向に3つに割れているが、文字数が5文字なのは確実である。60号木簡から類推すると、同様の五字種字と考えられる。62号木簡は縦方向にほぼ四等分に裂けている。形状から「急々如律令」と同じように呪符として使用されたと思われるが、一文字分の墨痕を確認できるだけで判読はできない。63号木簡は阿弥陀佛の塔婆と同類と考えられるが、墨痕が薄く同じ文字内容か不明である。

64号木簡と65号木簡はいずれも仮名書きの木簡である。64号木簡は横書きされた木簡で、片方の側面がやや丸みを残している。文字の一部、もしくは半分程度が残存したようだが判読まで到らなかった。65号木簡は縦に割れた木簡の片側が残ったようで、仮名の片側半分しか残っていない。よって、墨痕が明瞭にも関わらず文字の判読はできない。

I　墨痕のない木簡・木札（67～105）

文字のない木簡で特に注目されるのは、77号木簡の荷札状木簡が混在していることである。なお、87～90・105号木簡は墨痕もなく、両端が欠損しており木簡かどうかの判断は付かなかったが、厚さ・大きさなどの形状から木簡に分類した。

5　骨

A　人　　骨

藤田　尚

1）はじめに

平成14年10月に白根市浦廻遺跡出土人骨の鑑定を、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団より依頼された。時間的余裕が無かったため、小稿では人骨の簡単な記載のみを行い、詳細な記載については別に発表する機会を持ちたい。

2）人骨の所見

骨１号

性別：男性、年齢：壮年

寛骨の大坐骨切痕の角度は狭く、このことから本個体は男性と推定された（第13-1図）。椎骨は胸椎から腰椎まで部分的に残存するが、骨棘の形成・変形などの加齢変化はほとんど認められないことから、年齢は壮年期に属すると考えられる（第13-2図）。肩甲骨（第13-3図）や大腿骨・腓骨・尺骨の骨体部が残るが、長管骨骨端部はいずれも破壊されている。湿地より出土したため、骨の表面がめくれ上がり、詳しい形態観察および計測は不可能な骨が多い。

取り上げられた状況から、本個体の埋葬状況を推測すると、全体としては解剖学的位置関係を保っているとは言えず、身体が分割されて埋葬されたと考えられるが、一部、体幹骨や下肢骨については解剖学的位置関係を保っている部分もある。従って、上肢と下肢が分断された状態で埋葬された可能性が高い。

骨５号

性別：不明、年齢：６－７歳

性別は第２次性徴発現前の小児であることから不明である。第１大臼歯（永久歯）は上下顎とも萌出するが、第１切歯（永久歯）は上下顎とも未萌出である。歯の萌出から、６－７歳の小児と推定した。大腿骨・寛骨・肩甲骨・肋骨などが残存する。特に病変などは認めない（第13-4～6図、第14-1・2図）。

骨６号Ａ

性別：男性、年齢：壮年

非常に保存状態が良好な頭蓋骨である（第14-3～5図）。同個体の下顎骨は出土していない。頭蓋骨計測値を第２表とし、歯冠計測値を第３表とした。右上顎第３大臼歯はいわゆる矮小歯である（第14-6図）。

その他の人骨

浦廻遺跡からは上記の人骨の他にも、数個体分の人骨が出土している。これらの個体には明らかに同一個体のものと思われる左右の大腿骨（第15-1図。右大腿骨のみ撮影）とおそらくこれも大腿骨の個体と同一の可能性が高い左脛骨（第15-2図）の他、腓骨が出土している。また上腕骨は計４本出土しているが（第15-3～5図）、同一個体の組み合わせであるかどうかは不明である。ただしグリッド4B22及び4B24から出土した左右尺骨に関しては、その形態から同一個体のものである可能性が極めて高い（第15-6図）。頭蓋骨の一部（左側頭部）が出土している（第15-7図）。以上の骨は、性別は不明であるが、少なくとも成人

には達している骨であると断言できる。

グリッド3B5のⅧ層から出土した左上腕骨の骨体中央部に、鋭利な刃物で切りつけられたと思われる傷が認められた（第15-8図）。同個体は、比較的三角筋祖面が発達しており、成人以降の男性と推定される。傷は身体の正面前方から時計回りに約45度の角度で切りつけられたもので、生体反応（治癒機転）は認められず、受傷後時間を置かずに同個体は死亡したものと思われる。ただし、同傷痕が致命的なものであったかどうかは不明である。同様な刃物で傷付けられたと思われる痕跡は、骨6号Ｂの右脛骨にも認められる（第15-9図）。これも骨体内側中央付近を時計回りに約45度の角度で右上方から切りつけられたと考えられ、刃傷は脛骨後面にも一部及んでいる。

グリッド3B10のⅧ層から出土した右脛骨の内側面に切傷2か所が認められるが、これは前二者とは異なり、刀のような大型刃物での傷とは考え難く、現代で言えばカッターナイフのようなもの、当時であれば刀子などで傷付けられたものであろうか（第15-10図）。詳細に関しては現在のところ不明であり、今後の検討課題であると言える。

3）ま　と　め

浦廻遺跡の出土人骨は、その全てが解剖学的に正常な位置関係を保って出土しておらず、どうしてこのような出土状況になったのか興味のあるところである。例えば、骨1号において、椎骨は一部では連なって出土しているが、全体としては、ある部分で切断されたような出土の仕方をしている。それは下肢骨においても同様で、左大腿骨が寛骨と連結したような状態で出土している一方、右大腿骨は明らかに解剖学的な位置関係を保って出土していない。そのことは小児人骨である骨5号においても言える。出土した状況写真を見ると、頭蓋骨と下顎骨は明らかに分離しており、埋葬された時点ですでに頭蓋骨と下顎骨は切り離された状態であった可能性が高い。また同頭蓋骨のものと思われる肋骨・肩甲骨・寛骨なども、頭蓋骨からかなり離れて出土しているのはどうしてだろうか。現場が低湿地のため、埋葬後土砂の移動があり、そのために各骨が散り散りになってしまったのであろうか。いずれにしても、新潟県の中世鎌倉期の埋葬形態の一つとして、今後も継続的に本遺跡に注目していきたい。

	計測項目	計測値
1	頭蓋最大長	187
5	頭蓋規底長	100
8	頭蓋最大幅	141
I1	頭長幅指数	75.4
9	最小前頭幅	96
11	両耳幅	126
17	バジオン・ブレグマ高	133
26	正中前頭弧長	131
27	正中頭頂弧長	113
28	正中後頭弧長	98
30	正中頭頂弦長	104
31	正中後頭弦長	83
41	顔長	97
45	頬骨弓幅	137
46	中顔幅	109
48	上顔高	65
51	眼窩幅	44
52	眼窩高	33
54	鼻幅	31
55	鼻高	50
I48	鼻指数	62
61	上顎歯槽幅	67

指数以外の単位はmm

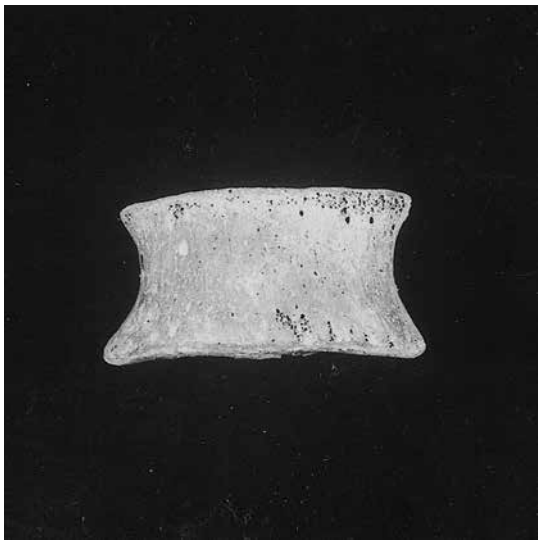
第２表　頭蓋骨計測値

	近遠心径		頬舌径	
	右	左	右	左
上顎				
I1	8.78	9.00	7.49	7.52
I2	7.38	6.97	6.89	6.74
C	7.59	7.72	8.31	8.49
P1	7.42	7.36	9.98	9.72
P2	6.70	7.00	9.39	9.42
M1	10.61	10.21	11.62	11.33
M2	9.51	9.39	11.40	11.02
M3	4.57	7.85	6.07	10.45

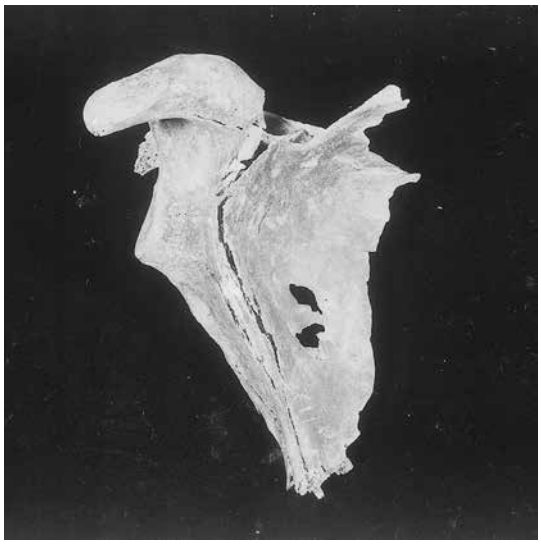
単位：mm

第３表　歯冠計測値

1　骨１号左寛骨内側面観

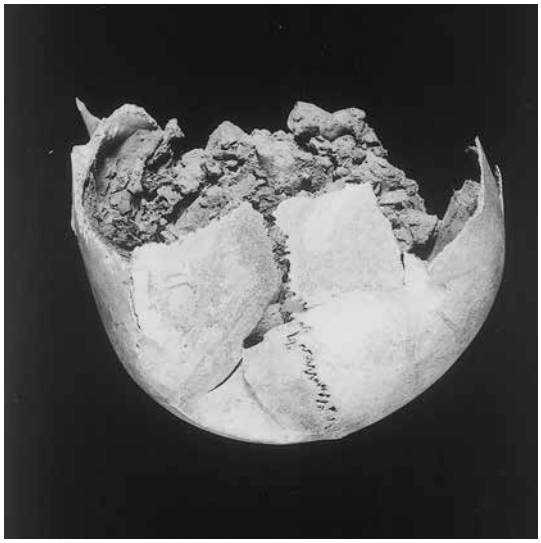


2　骨１号腰椎前面観



3　骨１号右肩甲骨後面観

4　骨５号頭骨正面観



5　骨５号頭骨上面観

6　骨５号下顎骨上面観

第13図　人骨の写真（1）

1　骨５号右寛骨（腸骨）内側面観

3　骨６号Ａ頭骨正面観

2　骨５号大腿骨前面観

4　骨６号Ａ頭骨側面観（左）

5　骨６号Ａ頭骨上面観

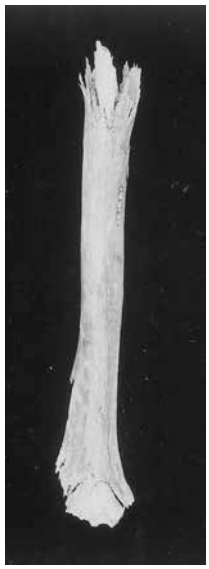
6　骨６号Ａ矮小化した右上顎第３大臼歯

第14図　人骨の写真（2）

1　大腿骨前面観（右）

2　脛骨前面観（左）

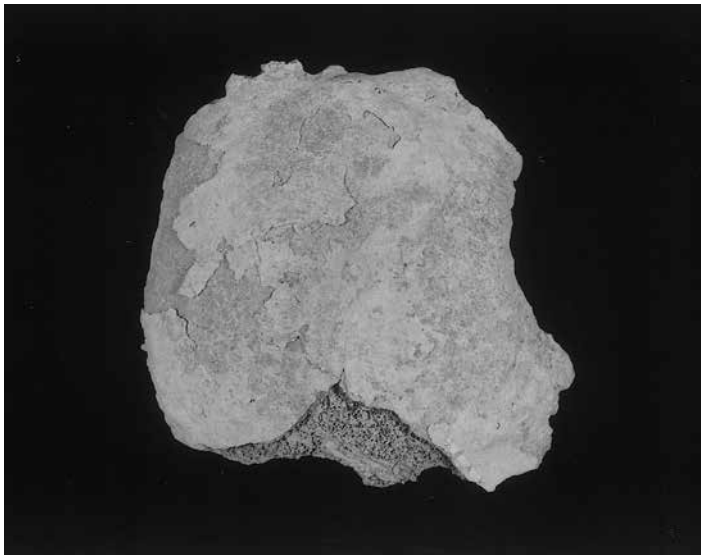
3　上腕骨後面観（右）



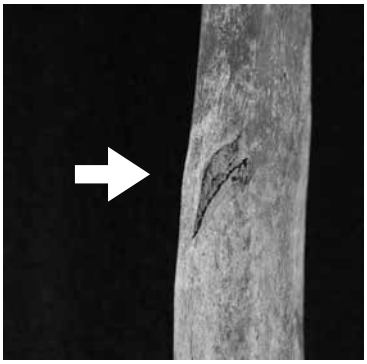
4　上腕骨前面観（右）

5　上腕骨後面観（右）

6　尺骨前面観（左右）

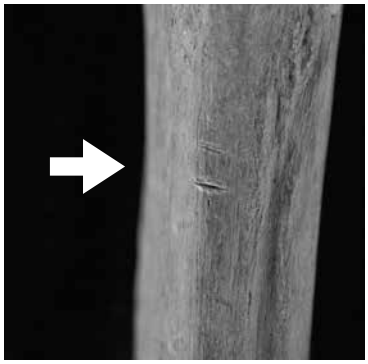


7　頭骨側面観（左）



8　左上腕骨刀傷部

9　骨６号Ｂ右脛骨刀傷部



10　右脛骨傷跡

第15図　人骨の写真（3）

B　獣　　骨

堀川　秀夫

浦廻遺跡からは、多くの獣骨が出土している。そのうち、まとまって検出された骨２～４・７号は、図版５で示している。出土状況図中の数字は、第４表の「No.」に相当し、各々の骨の名称を示している。

１）骨の所見

骨２号　（犬）

大腿骨・肋骨・脛骨は完存するが、下顎・上腕骨・脛骨などは欠けており、部分的にしか残存していない。全体的に保存状態が悪く、骨の表面がめくれあがったり、細かく割れていたりするため、鑑定不可能な骨が多い。また、骨の割れた部分からは、青色のビビアナイトが検出された。

骨３号　（犬）

頭蓋骨や肩甲骨など、部位ごとに多少離れているが、仙椎・腰椎・胸椎は解剖学的位置関係を保って出土している。また、図版５には記載されていないが、この周辺から肩甲骨・大腿骨・肋骨が出土しており、同一個体のものと考えられる。骨３号は、残存状態が大変よい。

骨４号　（犬）

左前足部分に当たる上腕骨・撓骨・尺骨は解剖学的な位置関係を保って検出された。図示されていないが、同グリッドから指骨も出土しており、同一個体のものと考えられる。

骨３号

頭蓋片骨など

第16図　獣骨出土状況

骨７号　（犬）

骨盤から胸椎にかけて、解剖学的位置関係を保って検出された。周辺から肋骨も出土しており、同一個体のものであろう。この骨も保存状態が良好である。

その他の獣骨

上記のまとまって検出された骨以外にも、分散して多数の骨が出土している。そのほとんどが犬であり、１点のみ鳥ではないかと考えた。主なものは、頭蓋片１点（第16図）、下顎が左右各２点ずつ、肩甲骨が左右１点ずつ、肋骨24点など、詳しくは第４表を参照されたい。

2）ま　と　め

出土した獣骨は１点を除き、全て犬の骨である。そのうち、左下顎が４点出土しており、犬の個体数は４匹以上である。まとまって検出された骨は、部位毎ではあるが解剖学的位置関係を保っているものが多く、元々筋肉のついた状態であったと考えられる。また、解体痕は認められず、食用になったものではない。

出土した骨は、保存状態のよいものから悪いものまであり、点数もかなり多い。このことから、それぞれ別々の時期、または異なった環境（陸上・水辺・水中など）で死亡・遺棄、もしくは流れ込んだものと考えられる。一般的に骨は、空気から遮断されるほど保存状態がよい。つまり、死亡後まもなく水中で土砂に埋められたものほど良好な状態で残っており、水辺・陸上などで長時間空気に触れるところほど残存状態が悪くなっていく。

剥離したり割れたりした骨には、ビビアナイトが付着しているものが多い。ビビアナイトは淡水のところででき、新鮮なものは無色透明であるが、酸化により急激に変色して暗青～暗緑色半透明になる。このことから、浦廻遺跡の環境は、鳥屋野潟のような湖沼や潟への河川流入口付近であったと推測できる。

骨２号（犬）　出土グリッド：5D6

No.	骨名	点数	備考
1	下顎片	1	左
2	上腕骨片	2	
3	脛骨片	2	
4	大腿骨	2	
5	肋骨	5	
6	頸椎	2	
	肩甲骨	1	左　骨２号の周辺で出土（5D6）
	不明	66	保存状態が悪いため、鑑定不可
	計	81	

骨３号（犬）　出土グリッド：4D3

No.	骨名	点数	備考
1	頭蓋骨	1	
2	肩甲骨	1	左
3	仙椎	1	
4	腰椎	7	
5	胸椎	4	
	肩甲骨	1	右　骨３号の周辺で出土（4D4）
	大腿骨	1	骨３号の周辺で出土（4D2）
	肋骨	1	骨３号の周辺で出土（4D3）
	計	17	

骨４号（犬）　出土グリッド：4D15

No.	骨名	点数	備考
1	上腕骨	1	左
2	撓骨	1	左
3	尺骨	1	左
4	下顎	1	左
	指骨	2	骨４号周辺で出土（4D15）
	腓骨	1	骨４号周辺で出土（4D19）
	計	7	

骨７号（犬）　出土グリッド：4D18

No.	骨名	点数	備考
1	骨盤	1	
2	仙椎	1	図面上は、骨盤の下で見えない
3	腰椎	7	
4	胸椎	7	
5	肋骨	2	
	肋骨	3	骨７号周辺で出土（4C16・18・23）
	計	21	

その他（犬）

No.	骨名	点数	備考
	肋骨	24	
	脛骨	1	
	腓骨	1	
	下顎	4	右2、左2
	胸椎	2	
	腰椎	3	
	頸椎	2	
	環椎	1	
	耳骨付近	1	
	肩甲骨	2	右1、左1
	上腕骨	1	
	大腿骨	1	
	指骨	1	
	頭蓋片	1	
	撓骨	1	
	尺骨	1	
	不明	8	２個はSX02　６・７層から１個ずつ出土
	計	55	

その他（鳥）

No.	骨名	点数	備考
	不明	1	
	計	1	

第４表　獣骨鑑定結果

第Ⅵ章　自然科学分析

1　堆積物中の珪藻化石群集

A　はじめに

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている［小杉1988、安藤1990］。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、浦廻遺跡の遺構内や遺物包含層などの堆積物について珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

B　試料の処理方法

試料は、畝状遺構Ａが２試料、遺物包含層が２試料、遺物包含層以外の層として３試料、大型の土坑内覆土が２試料の合計９試料である。

これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

（1）湿潤重量約1g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（2）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。（3）残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石が少ない試料は、プレパラート全面について精査した。

C　珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉［1988］及び安藤［1990］が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、小杉［1988］が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤［1990］が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（A）］：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

［内湾指標種群（B）］：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

［海水藻場指標種群（C1）］：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

［海水砂質干潟指標種群（D1）］：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。
［海水泥質干潟指標種群（E1）］：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。
［汽水藻場指標種群（C2）］：塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。
［汽水砂質干潟指標種群（D2）］：塩分濃度が5～26パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。
［汽水泥質干潟指標種群（E2）］：塩分濃度が2～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。
［上流性河川指標種群（J）］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらには*Achnanthes*属が多く含まれるが、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。
［中～下流性河川指標種群（K）］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地及び自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。
［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。
［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。
［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。
［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所及び湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落及び泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

D　珪藻化石の特徴とその堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水～汽水種が16分類群12属10種、淡水種が108分類群29属87種6亜種それぞれ検出された。これらの珪藻化石からは、海水～汽水種が2環境指標種群、淡水種5環境指標種群に分類された（第5表）。以下では、各地点から採取された堆積物中の珪藻化石の特徴について述べる。

［畝状遺構A（DⅠ帯）；No.1・2］

堆積物1g当たりの殻数は1.18×10^6及び5.79×10^5個、完形殻の出現率は約35%と61%である。

No.1では、沼沢湿地付着生指標種群*Cymbella aspera*や*Pinnularia viridis*が特徴的に多く、中～下

流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* や陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* などが随伴した。その他では、湖沼浮遊生指標種群や湖沼沼沢湿地指標種群も出現した。なお、外洋指標種群 *Coscinodiscus marginatus* も出現した。

一方、No.2 では、中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* が多く、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* などが随伴した。

こうしたことから、No.1 は河川の流入を伴う沼沢湿地環境が推定され、時としてやや水深のある場所やジメジメとした場所が形成されるなど、環境変化が大きいものと推定される。

一方、No.2 では、主に沼沢湿地を伴う河川が流入する環境が推定され、時としてジメジメとした場所があったものと推定される。

［遺物包含層（ＤⅡ）；No.3 ・ 4］

堆積物 1g 当たりの殻数は 1.45×10^7 及び 4.24×10^5 個、完形殻の出現率は約 68%と 64%である。

いずれの試料も、中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* や *Cymbella sinuata* が特徴的に多く

分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Actinocyclus ingens	?	1	-	-	1	4	-	-	-	-
A. spp.	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Actinoptychus senarius	?	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Biddulphia spp.	?	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Coscinodiscus marginatus	A	3	1	1	3	-	-	-	-	-
C. spp.	?	2	-	-	-	1	-	-	-	1
Denticulopsis spp.	?	-	1	-	-	2	1	-	-	-
Navicula marina	E1	-	1	-	-	1	-	-	-	-
Stephanopyxis spp.	?	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Thalassionema nitzschioides	A	1	-	-	1	11	-	-	-	1
Thalassiosira spp.	A	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Achnanthes brevipes	?	1	-	-	1	1	-	-	-	1
Navicula peregrina	?	-	-	-	-	1	-	-	1	-
Nitzschia punctata	E2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
N. sigma	E2	-	1	-	-	-	-	2	2	1
Rhopalodia musculus	?	-	2	-	1	1	3	2	-	1
Achnanthes lanceolaata	K	-	-	3	2	-	-	-	-	-
A. marginulata	W	-	-	16	-	-	-	-	-	-
A. minutissima	W	-	-	6	-	-	-	-	-	-
A. spp.	?	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Actinella brasiliensis	O	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Amphora ovalis	W	1	5	3	2	4	5	4	5	3
Anomoeoneis sphaerophora	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-
A. vitrea	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Bacillaria paradoxa	W	-	-	-	-	-	-	-	3	-
Caloneis bacillum	W	-	-	-	-	2	6	-	2	1
C. lauta	W	-	-	1	-	-	-	-	-	-
C. silicula	W	2	2	-	-	2	5	2	3	1
Cocconeis placentula	W	2	3	23	9	1	1	2	2	6
Cymbella aspera	O	6	-	-	-	1	-	-	-	-
C. cuspidata	W	-	-	-	-	-	4	-	-	-
C. gracilis	W	-	-	1	-	-	-	-	-	-
C. minuta	W	2	9	9	17	1	5	9	4	12
C. naviculiformis	O	1	2	-	1	1	-	-	1	1
C. sinuata	K	-	1	7	5	3	-	-	-	2
C. tumida	W	1	1	5	5	2	6	9	7	4
C. turgidula	K	7	16	25	43	20	10	24	8	40
C. spp.	?	2	1	1	1	2	1	1	-	-
Diatoma hiemale var. *quadratum*	K	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis	W	-	3	-	-	-	-	1	-	-
D. yatukaensis	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
D. spp.	?	1	-	1	2	1	-	-	-	-
Epithemia adnata	W	-	2	1	2	3	1	-	-	1
E. sorex	W	-	-	1	-	-	-	-	-	-
E. turgida	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-
E. spp.	?	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Eunotia biareofera	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-
E. formica	W	1	-	1	-	1	-	-	-	2
E. lunaris	W	-	1	-	-	2	-	1	18	1
E. mondon	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-
E. pectinalis var. *minor*	O	2	-	3	6	2	-	-	1	3
E. pectinalis var. *undulata*	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-
E. praerupta	W	2	-	-	-	1	1	-	-	-
E. prearupta var. *bidens*	O	1	-	-	-	1	2	-	-	-
E. spp.	?	6	2	-	1	2	1	-	1	5
Fragilaria brevistriata	N	-	-	-	1	-	-	-	-	-
F. construens	N	-	-	1	-	-	-	-	-	-
F. leptostauron	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-
F. spp.	?	-	-	-	-	1	-	-	-	3
Frustulia rhomboides var. *saxonica*	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-
F. vulgaris	W	-	2	3	2	1	1	2	2	2
Gomphonema acuminatum	O	-	-	1	-	2	-	4	4	2
G. augur	W	2	-	-	-	1	-	-	3	1
G. clevei	W	-	1	6	4	6	1	-	-	-
G. gracile	O	-	-	-	-	-	-	1	2	2
G. olivaceum	W	-	-	-	3	1	1	-	-	4
G. parvulum	W	-	1	10	7	5	-	5	2	3
G. sphaerophorum	W	1	-	-	-	-	-	-	1	-
G. spp.	?	1	1	11	5	4	2	1	-	6
Gyrosigma spp.	?	2	24	1	-	3	25	-	8	3
Hantzschia amphioxys	Q	4	8	3	2	4	-	1	-	1
Melosira ambigua	N	2	2	-	-	3	4	-	-	2
M. granulata	M	3	-	-	-	2	-	-	-	1
M. roeseana	Q	1	-	-	1	-	-	-	-	-
M. solida	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-

分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Melosira varians	K	-	2	3	2	3	6	12	3	4
M. spp.	?	-	-	-	1	-	-	-	1	-
Meridion circulae var. *constrictum*	K	-	-	-	-	-	1	-	-	1
Navicula americana	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-
N. bacillum	W	-	2	-	1	-	-	1	1	1
N. cuspidata	W	-	1	-	-	-	7	1	8	1
N. elginensis	O	-	1	1	-	1	1	-	-	2
N. mutica	Q	-	1	-	3	-	-	-	1	1
N. oppugnata	W	-	-	8	-	-	1	4	6	13
N. placenta	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-
N. pupula	W	-	3	-	-	-	-	-	2	-
N. radiosa	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-
N. viridula	W	1	5	-	3	3	-	-	-	-
N. spp.	?	3	7	15	8	5	3	4	3	6
Neidium affine	W	-	1	-	-	-	1	1	2	-
N. iridis	O	1	3	1	-	-	5	2	17	1
N. spp.	?	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Nitzschia amphibia	W	-	-	2	2	1	1	1	8	-
N. parvula	W	-	-	-	-	1	-	-	2	2
N. tryblionella	W	-	1	-	-	-	2	2	1	1
N. spp.	?	1	5	1	-	-	1	5	8	5
Pinnularia acrosphaeria	O	-	-	1	-	1	2	-	1	-
P. borealis	Q	-	-	-	-	1	1	1	-	-
P. braunii	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-
P. divergens	W	-	-	-	-	1	-	-	2	-
P. gibba	O	1	1	-	-	1	-	8	12	1
P. hemiptera	W	-	-	-	-	1	-	1	-	-
P. interrupta	W	2	-	-	1	1	-	1	2	1
P. microstauron	W	-	-	-	-	-	2	5	5	-
P. subcapitata	O	-	2	2	-	1	-	1	-	-
P. viridis	O	3	-	-	1	-	8	8	2	1
P. spp.	?	9	14	1	4	5	12	16	6	8
Rhopalodia gibba	W	-	3	-	1	1	23	1	7	2
R. gibberula	W	4	4	2	4	6	2	-	-	1
R. quisumbirgiana	W	-	1	-	2	-	-	-	2	-
Stauroneis phoenicenteron	O	2	2	1	3	5	12	2	4	1
Stephanodiscus astraea	W	1	2	-	-	1	-	-	-	-
Surirella angusta	W	-	-	-	-	-	-	4	2	1
S. ovata	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1
S. tenera	W	-	-	-	-	3	6	1	1	-
S. spp.	?	1	-	-	1	-	2	2	-	-
Synedra arcus	K	-	8	4	11	7	3	7	4	12
S. rostrata	W	1	3	2	5	-	-	7	2	1
S. rumpens	W	-	1	-	-	-	-	4	-	-
S. ulna	W	4	16	3	6	24	8	17	3	4
S. vaucheriae	K	-	-	-	-	-	-	-	-	2
S. spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Tabellaria fenestrata	O	1	-	-	-	-	-	1	-	-
T. flocculosa	W	-	-	1	2	-	-	1	-	3
Unknown	?	2	16	14	9	11	7	8	3	6
外洋	(A)	4	1	1	5	12	-	-	-	1
海水泥質干潟	(E1)	-	1	-	-	1	-	-	-	-
海水不定・不明種	(？)	3	1	-	1	10	3	-	-	1
汽水泥質干潟	(E2)	-	1	-	-	-	-	3	2	1
汽水不定・不明種	(？)	1	2	-	2	3	3	2	1	2
中～下流性河川	(K)	7	29	42	63	33	20	43	15	61
湖沼浮遊生	(M)	3	-	-	-	2	-	-	-	1
湖沼沼沢湿地	(N)	3	2	1	1	3	4	-	-	2
沼沢湿地付着生	(O)	20	11	10	13	17	30	27	44	14
陸域	(Q)	5	9	3	6	5	1	2	1	2
広布	(W)	28	75	104	80	77	91	88	112	73
淡水不定・不明種	(？)	28	70	46	32	37	55	37	30	43
珪藻殻数		101	202	207	203	200	207	202	205	201

第５表　堆積物中の珪藻化石産出表

出現し、沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia pectinalis* var.*minor* などが随伴する。なお、No.4 では陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* が出現した。

こうしたことから、主に沼沢湿地を伴う河川が流入する環境が推定され、時として No.4 ではジメジメとした場所があったものと推定される。

［遺物包含層以外の層（ＤⅢ）；No.5 ～ 7］

堆積物 1g 当たりの殻数は 2.17×10^5 ～ 2.59×10^6 個、完形殻の出現率は約 38%～ 77%である。

いずれの試料も、中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* や *Melosira varians*、沼沢湿地付着生指標種群 *Stauroneis phoenicenteron* などが特徴的に出現した。なお、試料 No.5 と No.6 では湖沼沼沢湿地指標種群が出現し、また、試料 No.5 では陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* が出現した。

こうしたことから、No.5 と No.7 では沼沢湿地を伴う河川が流入する環境、No.6 では河川などの流れ込みを伴い沼沢湿地が推定された。なお、No.5 と No.6 ではやや水深があり、No.5 では時としてジメジメとした場所があったものと推定される。

［大型の土坑 SX02 内覆土（ＤⅣ）；No.8 ・ 9］

堆積物 1g 当たりの殻数は 3.25×10^6 及び 2.32×10^7 個、完形殻の出現率は約 76%及び 64%である。

No.8 では、沼沢湿地付着生指標種群 *Neidium iridis* や *Pinnularia gibba* などが特徴的に出現し、中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* など出現した。

No.9 では、中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula* などが特徴的に多く出現し、沼沢湿地付着生指標種群あるいは陸域指標種群が随伴した。

こうしたことから、No.8 が河川の流入する沼沢湿地環境、No.9 が沼沢湿地を伴う河川環境がそれぞれ推定される。

E　おわりに

ここでは、畝状遺構、遺物包含層あるいはこれ以外の層、大型の土坑内覆土について珪藻化石群集を調べこれら堆積物の堆積環境を推定した（第 6 表）。

畝状遺構のⅨ層（No.2）、遺物包含層のⅧｙ層及びⅧｂ層（No.3 及び No.4）、遺物包含層以外の層としてのⅥ層及びⅦ層（No.5 と No.6）、大型の土坑内覆土 SX02 の 7 層（No.9）では、河川環境が優勢であったと推定された。なお、沼沢湿地環境やジメジメとした場所が随伴する場合などが見られた。

一方、畝状遺構のＸ層（No.1）、遺物包含層以外の層としてのⅦ層（No.6）、大型の土坑内覆土 SX02 の 6 層（No.8）では、沼沢湿地環境が優勢である。なお、Ｘ層（No.1）ではやや水深がある時期やジメジメとした場所がある時期などこの層位内での環境変化が大きいことが理解された。

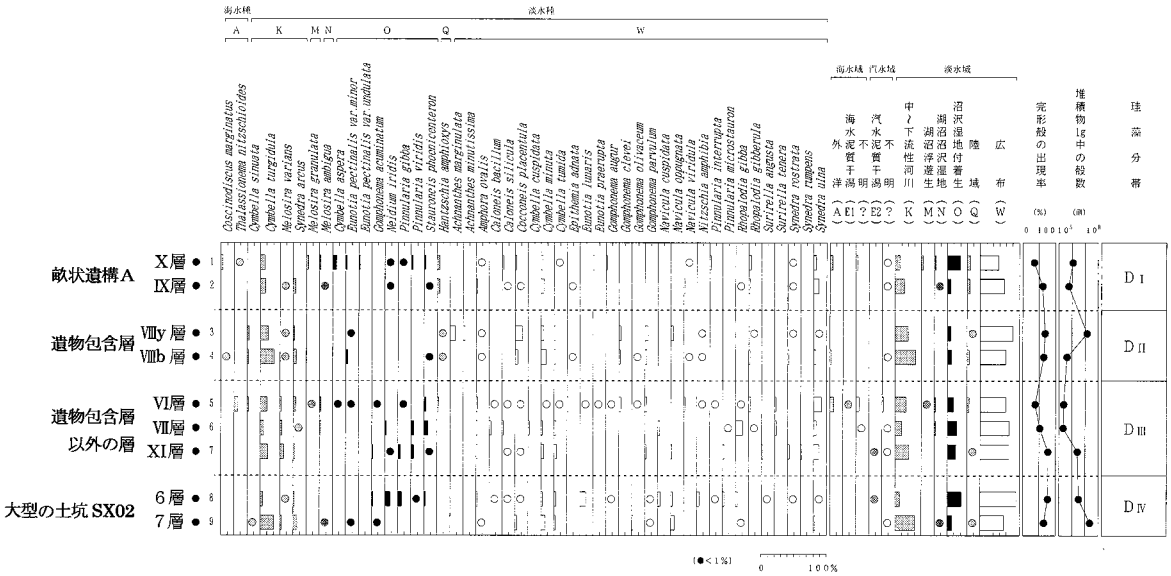
引用文献

安藤一男　1990　淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理，42，73-88.

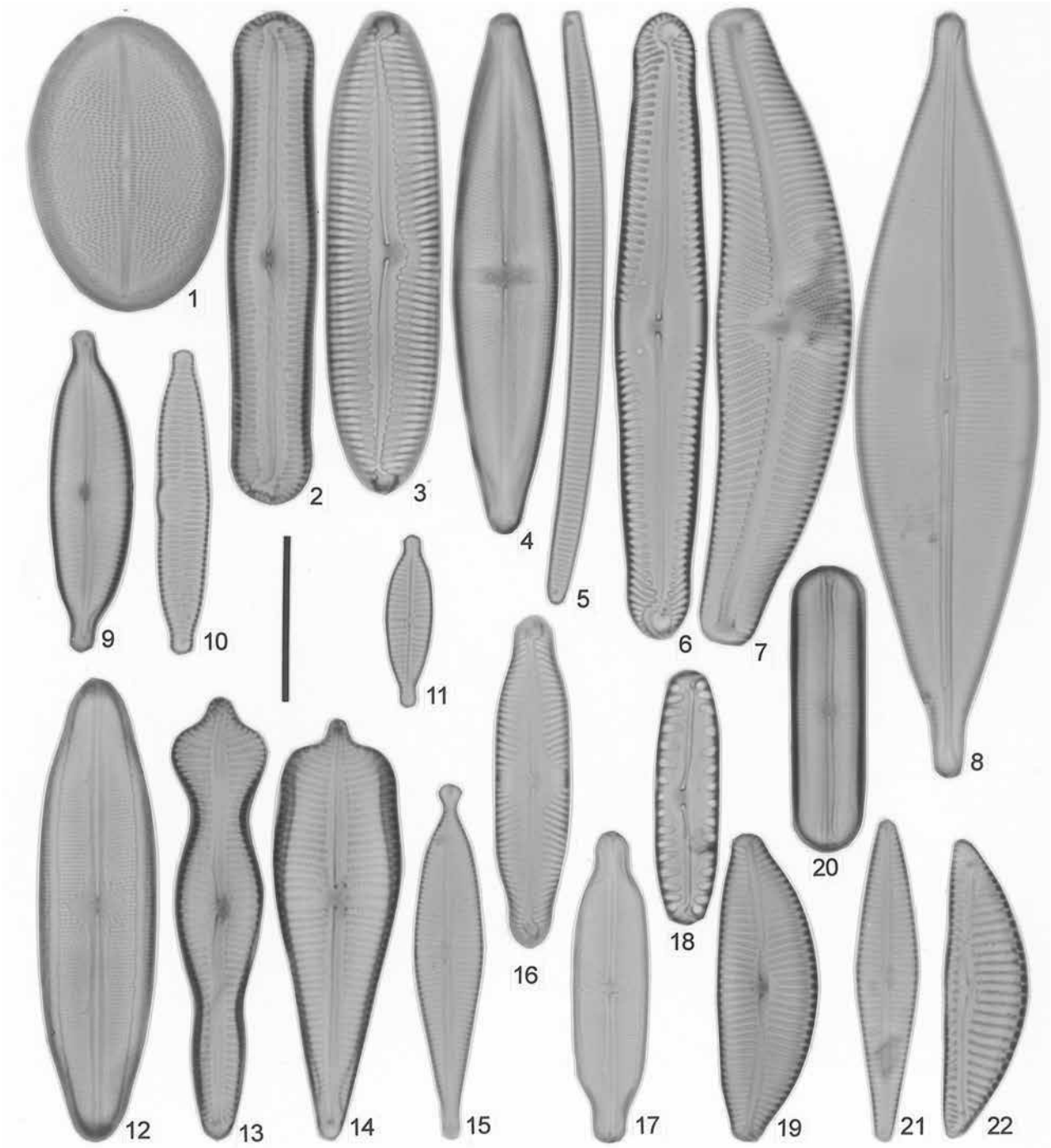
小杉正人　1988　珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

	資料No.	層位	グリッド	珪藻分帯	環境	付随環境１
畝状遺構Ａ	1	Ⅹ	6E15	ＤⅠ	河川の流入する沼沢地	やや水深がある
	2	Ⅸ	6E15		河川	沼沢湿地
遺物包含層	3	Ⅷy	4B15	ＤⅡ	河川	沼沢湿地
	4	Ⅷb	4B15			
遺物包含層以外の層	5	Ⅵ	7B7	ＤⅢ	沼沢湿地を伴う河川	やや水深がある
	6	Ⅶ	7B7		河川の流入する沼沢地	
	7	Ⅺ	13E11		沼沢湿地を伴う河川	
大型の土坑SX02内覆土	8	６層	3B21	ＤⅣ	河川の流入する沼沢地	
	9	７層	3B21		沼沢湿地を伴う河川	

第６表　各地点の堆積物の堆積環境



第１７図　堆積物中の主な珪藻化石分布図（2%以上の分類群を表示）



（スケール；20μm）

1. *Cocconeis placentula* No.8
2. *Pinnularia acrosphaeria* No.8
3. *Pinnularia viridis* No.7
4. *Stauroneis phoenicenteron* No.8
5. *Eunotia lunaris* No.8
6. *Pinnularia gibba* No.7
7. *Cymbella tumida* No.8
8. *Navicula cuspidata* No.8
9. *Cymbella naviculiformis* No.8
10. *Synedra arcus* No.7
11. *Gomphonema parvulum* No.8
12. *Neidium iridis* No.8
13. *Gomphonema acuminatum* No.8
14. *Gomphonema augur* No.8
15. *Gomphonema sphaerophorum* No.8
16. *Pinnularia microstauron* No.8
17. *Neidium affine* No.8
18. *Pinnularia borealis* No.5
19. *Cymbella turgidula* No.8
20. *Navicula bacillum* No.8
21. *Gomphonema gracile* No.8
22. *Cymbella minuta* No.8

第18図　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真

2　放射性炭素年代測定

A　はじめに

浦廻遺跡より検出された人骨（歯）、獣骨（歯）、木片、及び植物片の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

B　試料と方法

試料は、5E12Ⅷy層から出土した骨５号の人骨の歯１点、3B20Ⅷz層から出土した獣骨の歯１点、包含層Ⅷy層から出土した木片１点、包含層Ⅷz層から出土した植物片１点、畝状遺構の砂（Ⅹ層）から出土した植物片１点、畝状遺構Ａを埋める粘土（Ⅸ層）から出土した植物片１点、地震噴砂上部付近（Ⅴ層）から出土した植物片１点、遺物包含層以外の層（Ⅺ層）から出土した植物片１点、SX02最下層に当たる７層から出土した植物片１点の併せて９点である。なお、植物片については、目視にて複数取り出したものを一緒に処理した。

人骨及び獣骨の歯の試料は、超音波洗浄を施して不純物を除去し、脱灰処理をしてコラーゲンを抽出した。木片及び植物片の試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した。これら前処理された試料を石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

C　結　　果

第７表に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値（yrBP）の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、及び海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代

範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

D　考　　察

各試料は、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行なった。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$（‰）	^{14}C年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	１σ暦年代範囲
PLD-1737 (AMS)	骨５号人骨（歯） 5E12 Ⅷy層	-18.8	720±30	cal AD 1285	cal AD 1275 - 1295 (100%)
PLD-1738 (AMS)	獣骨（歯） 3B20 Ⅷz層	-18.7	680±30	cal AD 1295	cal AD 1285 - 1305 (62.6%) cal AD 1370 - 1385 (37.4%)
PLD-1739 (AMS)	木片 遺物包含層 4B15 Ⅷy層	-27.8	655±30	cal AD 1300 cal AD 1375	cal AD 1295 - 1310 (32.4%) cal AD 1355 - 1385 (67.6%)
PLD-1740 (AMS)	植物片 遺物包含層 4B15 Ⅷz層	-26.1	660±30	cal AD 1300 cal AD 1375	cal AD 1290 - 1310 (35.5%) cal AD 1355 - 1385 (64.5%)
PLD-1741 (AMS)	植物片 畝状遺構A 6E15 Ⅹ層	-26.7	715±30	cal AD 1285	cal AD 1275 - 1300 (100%)
PLD-1742 (AMS)	植物片 畝状遺構A 6E15 Ⅸ層	-26.9	1800±30	cal AD 240	cal AD 135 - 155 (18.7%) cal AD 175 - 195 (19.8%) cal AD 210 - 255 (49.8%) cal AD 305 - 315 (11.7%)
PLD-1743 (AMS)	植物片 地震噴砂上部付近 7B7 Ⅴ層	-27.0	595±30	cal AD 1330 cal AD 1345 cal AD 1395	cal AD 1310 - 1355 (74.7%) cal AD 1385 - 1400 (25.3%)
PLD-1744 (AMS)	植物片 遺物包含層以外の層 13E11 Ⅺ 層	-26.9	705±30	cal AD 1290	cal AD 1280 - 1300 (95.7%)
PLD-1745 (AMS)	植物片 大型の土坑 SX02 ７層（最下層）	-25.6	740±30	cal AD 1280	cal AD 1265 - 1290 (100%)

第７表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

引用文献

中村俊夫　2000　放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J.　1993　Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M.　1998　INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

3　花粉化石群集

A　試　　料

花粉化石群集の検討は、No.1～No.4の合計４試料について行った。各試料についての簡単な記載は、次の通りである。No.1（畝状遺構A、6E15Ⅹ層）は青灰色砂、No.2（畝状遺構B、7C15Ⅹ層）は青灰色砂、No.3（畝状遺構Aを埋める粘土、6E15Ⅸ層）は青灰色粘土で褐鉄鉱が認められる。No.4（畝状遺構Bを埋める粘土、7C15Ⅸ層）は青灰色粘土。

B　方　　法

花粉化石の抽出は、試料約２～6gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート１～２枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉及びシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

C　花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉27、草本花粉12、形態分類で示したシダ植物胞子２である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

No.1：十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。樹木花粉ではマツ属（不明）、ニレ属－ケヤキ属が、草本花粉ではカヤツリグサ科が僅かに産出した。

No.2：十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、マツ属（不明）、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属が産出した。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科が産出し、イネ科、カヤツリグサ科はやや目立った。

No.3：樹木花粉の占める割合は約54％である。その中で、ハンノキ属（約25％）が最も高率であり、次いでカバノキ属（約13％）、ブナ属（約11％）、スギ属（約９％）、コナラ亜属（約８％）の順に出現する。他に、ツガ属、トウヒ属、マツ属（不明）、ヤナギ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などが３～４％程度で出現する。草本花粉では、イネ科（約10％）、カヤツリグサ科（約７％）がやや目立ち、クワ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが１～２％程度で出現する。シダ植物胞子は約20％と目立つ。

No.4：樹木花粉の占める割合は約75％である。その中で、ブナ属（約28％）、ハンノキ属（約26％）が高率であり、スギ属（約８％）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（約５％）も比較的目立つ。他に、ツガ属、トウヒ属、マツ属（不明）、サワグルミ属－クルミ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、トチ

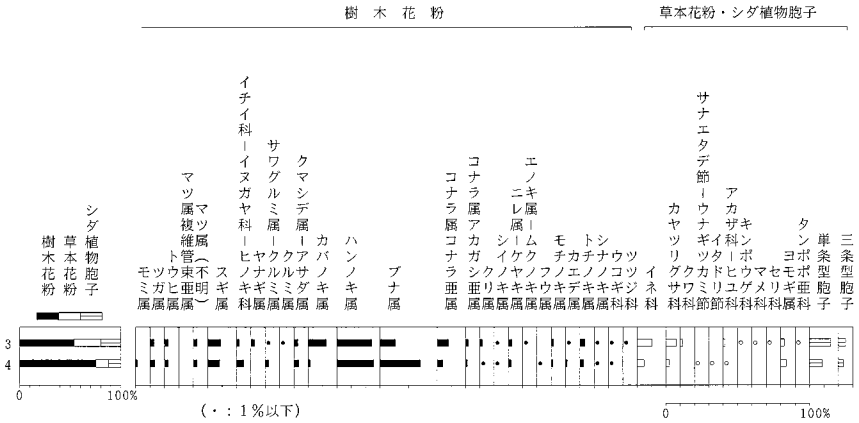
ノキ属などが３～４％程度で出現する。草本花粉では、イネ科（約５％）、ヨモギ属（約４％）、カヤツリグサ科（約２％）が若干目立つほか、サナエタデ節－ウナギツカミ節、イタドリ節、アカザ科－ヒユ科が１％以下の低率で出現する程度である。シダ植物胞子は約12％とやや目立つ。なお、第三紀末～第四紀初めの頃に絶滅した分類群であるフウ属が産出したが、二次的に堆積した誘導化石と考えられる。他にも保存状態の悪いものなどが誘導化石である可能性があり、No.4の花粉組成は若干歪んでいる可能性もある。

D　考　　察

ここでは、花粉化石分布図として示すことのできたNo.3、No.4の花粉組成から、周辺植生について考察する。No.3では、ハンノキ属、カバノキ属、ブナ属、コナラ亜属が比較的高率であり、これらを主体とした落葉広葉樹林が優勢であったと予想される。また、針葉樹では、スギ属が比較的多くみられ、ツガ属、トウヒ属なども混じっていたであろう。他に、アカガシ亜属、シイノキ属といった常緑もみられたが、稀であったと思われる。草本類については、イネ科、カヤツリグサ科がやや目立つが、属まで絞り込むことは困難である。アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科の出現や、シダ植物胞子の高率から、幾分乾き気味の環境が予想され、イネ科はススキ、シバなどの草地優占種である可能性が考えられる。

次ぎに、No.4では、ハンノキ属、ブナ属を主体とした落葉広葉樹林が優勢であったと予想される。また、針葉樹ではスギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が比較的多くみられ、ツガ属、トウヒ属なども混じっていたであろう。草本類については、サナエタデ節－ウナギツカミ節が生育するようなじめじめとした場所も一部みられたであろうが、イネ科、カヤツリグサ科、イタドリ節、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が生育するような乾き気味の場所（畑地、路傍など）が広がっていたのではないかと思われる。以上のように、No.3とNo.4では、落葉広葉樹林が優勢で針葉樹も混じるという点で大勢としては類似するが、カバノキ属、ブナ属、コナラ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の出現率に大きな違いがみられる。これは、No.3とNo.4がさほど離れていない地点の同時期の堆積物であるとすれば、これら風媒花は、周辺山地からの飛来花粉と考えられることから、堆積域での集積の差異が反映されたのではないだろうか。

なお、No.1、No.2については、十分な花粉化石が産出しなかったが、堆積物は砂が卓越しており、花粉化石が流出してしまったと考えられる。



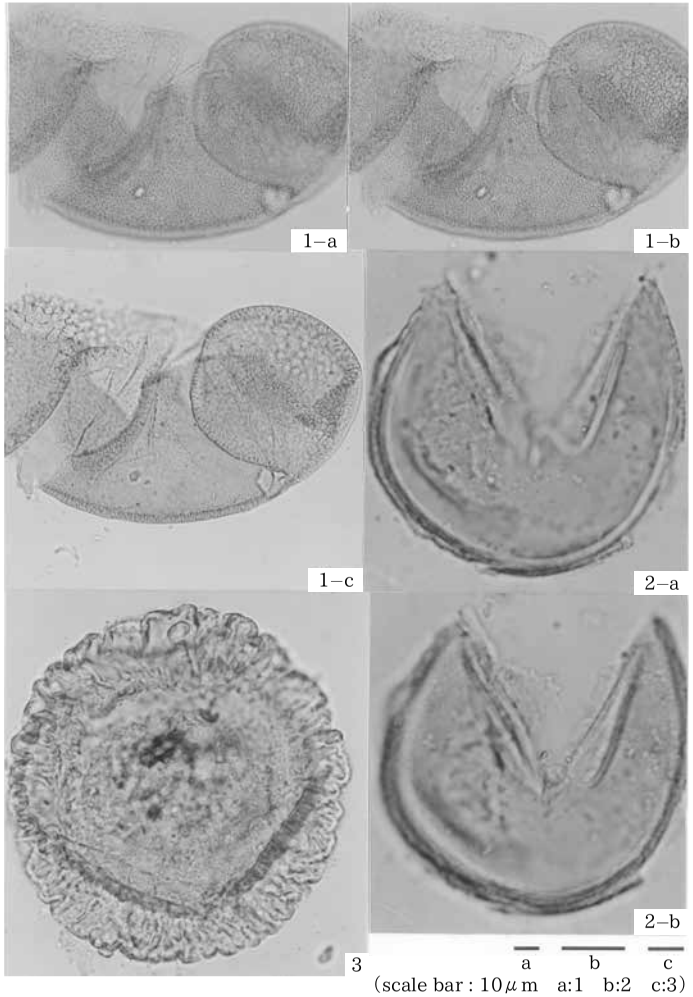
（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第19図　花粉化石分布図

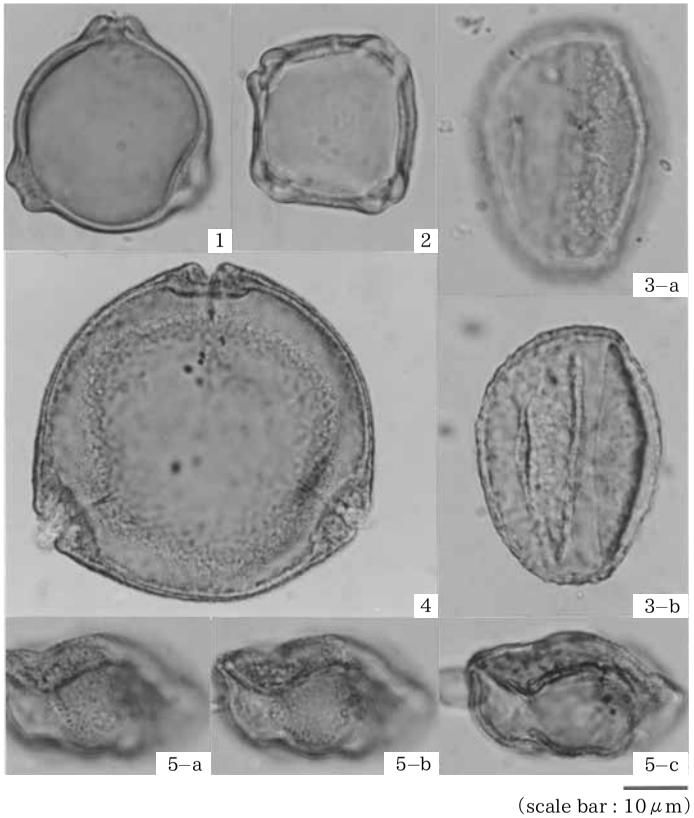
和名	学名	1	2	3	4
樹木					
モミ属	*Abies*	-	-	-	2
ツガ属	*Tsuga*	-	-	3	5
トウヒ属	*Picea*	-	-	3	4
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	1	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	2	3	4
スギ属	*Cryptomeria*	-	-	10	13
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	T. - C.	-	-	2	8
ヤナギ属	*Salix*	-	-	3	-
サワグルミ属―クルミ属	*Pterocarya - Juglans*	-	-	1	4
クルミ属	*Juglans*	-	-	1	-
クマシデ属―アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	3	5
カバノキ属	*Betula*	-	-	14	2
ハンノキ属	*Alnus*	-	3	27	40
ブナ属	*Fagus*	-	-	12	44
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	4	9	6
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	-	2	2
クリ属	*Castanea*	-	-	2	1
シイノキ属	*Castanopsis*	-	-	1	1
ニレ属―ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	1	3	3
エノキ属―ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	1	-
フウ属	*Liquidamber*	-	-	-	1
モチノキ属	*Ilex*	-	-	2	2
カエデ属	*Acer*	-	-	1	2
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	4	4
シナノキ属	*Tilia*	-	-	1	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	1
ツツジ科	Ericaceae	-	-	1	-
草本					
イネ科	Gramineae	-	10	21	10
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	8	15	5
クワ科	Moraceae	-	-	4	-
サナエタデ節―ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1
アカザ科―ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	3	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	2	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	2	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	-	5	8
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	1	-
シダ植物					
単条型胞子	Monolete spore	-	3	30	18
三条型胞子	Trilete spore	-	1	10	7
樹木花粉	Arboreal pollen	2	11	110	155
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	19	54	26
シダ植物胞子	Spores	0	4	40	25
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	3	34	204	206
不明花粉	Unknown pollen	0	5	28	23

T. -C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第８表　花粉化石一覧表



1. トウヒ属、試料④、PAL. MN　1807
2. スギ属、試料③、PAL. MN　1805
3. ツガ属、試料④、PAL. MN　1806



1. カバノキ属、試料③、PAL. MN　1802
2. ハンノキ属、試料③、PAL. MN　1803
3. コナラ属コナラ亜属、試料③、PAL. MN　1804
4. ブナ属、試料④、PAL. MN　1801
5. フウ属、試料④、PAL. MN　1800

第20図　産出した花粉化石

4　木製品の樹種

A　はじめに

浦廻遺跡は、中ノ口川右岸の沖積地に位置する。今回の発掘調査では、建物跡などの遺構は確認されていないが、大型の土坑や人間の足跡などが検出されている。また、中世の木簡や木製品、人骨などが多数出土している。本報告では、出土した木簡や木製品の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

B　試　　料

試料は、木簡104点と木製品131点である。木製品では125に４点、48は差歯下駄で、台と歯の２部品が認められた。これらの試料では、それぞれ複数の試料について樹種同定を行う。したがって、合計点数は木簡が104点、木製品が135点の合計239点である。

各試料から5mm角程度のブロックを採取して試料としたが、完形品や木簡の一部ではブロックの採取が困難であったため、各製品から直接切片を採取した。また、21は一部炭化しており、炭化部分から試料を採取した。１試料で複数点について樹種同定を実施する試料については、No.にＡ～Ｋの枝番号を付した。なお、今回の同定試料の時代は中世と考えられている。

C　方　　法

ブロック試料は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。作製した切片及び製品から直接採取した切片を試料別にガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察し、木材組織の特徴から種類を同定する。

21については、炭化していたため常温で乾燥させた後、実体顕微鏡で観察し、木材組織の特徴から種類を同定する。

D　結　　果

134は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存状態が悪く、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹５種類（トウヒ属・モミ属・スギ・ヒノキ・サワラ）と広葉樹８種類（ブナ属・クリ・ケヤキ・モクレン属・カツラ・サクラ属・トチノキ・ハリギリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・トウヒ属（Picea）　　マツ科

試料は保存状態が悪い。軸方向組織は仮道管と樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。放射組織は仮道管、柔組織、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。柔細胞にはじゅず状末端壁が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、１分野に３～６個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・モミ属（Abies）　　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で

１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonic （L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・サワラ（Chamaecyparis pisifera（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ブナ属（Fagus）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ケヤキ（Zelkova serrata（Thunb.）Makino）　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクレン属（Magnolia）　　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独及び２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～40細胞高。

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.）　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で、まれに２～３個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。

・サクラ属（Prunus）　　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～30細胞高。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に

向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１～15細胞高で階層状に配列する。

・ハリギリ（Kalopanax pictus（Thunb.）Nakai）　　ウコギ科ハリギリ属

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、１～５細胞幅、１～30細胞高。

E　考　　察

今回同定試料とした木材は、木簡と木製品とに大別される。木製品には、下駄、草履芯、漆器、曲物、杓子など、日常使用する多くの種類の製品が含まれている。各木材の器種別種類構成を第９表に示す。用途不明の試料や部材などについては、その他として一括した。

木簡は、肉眼での試料観察結果から、板目板と柾目板とがある。これらの樹種は、全て針葉樹材であり、スギがその大部分を占めており、他にはサワラが８点認められたのみであった。今回の結果をみた限りでは、木取りの違いによる木材利用の違いは認められない。この結果から、木簡にはスギを主とした針葉樹材が選択されていたことが推定される。スギやサワラは、木理が通直であり、割裂性も高いため、板目板や柾目板の製作が容易である。また、これらの種類では、木材は仮道管を主要素とし、マツ科針葉樹の樹脂道や広葉樹環孔材の大型の道管のように肉眼でも見える管状の組織を持たない。そのため、木目は比較的均質であり、文字も書きやすいことが推定される。これらの点がスギやサワラが利用された背景に考えられる。これまで日本国内で行われた調査では、スギやヒノキなどが多く見られ［島地・伊東1988］、今回の結果とも一致する。スギは、後述するように木製品でも多く確認されており、本遺跡周辺で入手が容易であったことが推定される。このことはスギ材が多く利用されている背景として考えられる。板目板の木取りの木簡で年輪の状況を観察すると、多くの試料で板の面と年輪がほぼ平行になっている様子が見られる。そのため、板目板の木簡は、大径木の比較的外側に近い年輪を利用して製作されていることが推定される。

木製品でもスギの占める割合が高く、スギが様々な用途に利

器種＼樹種	トウヒ属	モミ属	スギ	ヒノキ	サワラ	ブナ属	クリ	ケヤキ	モクレン属	カツラ	サクラ属	トチノキ	ハリギリ	広葉樹	合計
木簡			96		8										104
漆器　皿											1				1
漆器椀（総黒色）						1	2	3		1			1		8
漆器椀（内赤色）								1							1
漆器椀（漆絵）						1		2					1		4
漆器　片口鉢												2			2
漆器　脚付膳												2			2
漆器　不明												1			1
曲物側板			5												5
曲物底板			2												2
柄杓					1										1
蓋			4												4
折敷			11												11
俎板			1												1
箱側板			2												2
下駄　台部			1						2						3
下駄　歯部			2												2
草履芯			6												6
扇			1												1
杓子			2												2
毬杖玉	1														1
とんぼ			1												1
行火			1												1
火鑽臼（下駄歯部転用）			1												1
鞘			1												1
陽物形			1												1
刀形			2												2
箸			7	1	2										10
杭			2												2
その他		2	50	2	1									1	56
合　計	1	2	199	3	12	2	2	6	2	1	1	5	2	1	239

第９表　器種別樹種構成

用されていたことが推定される。一方、漆器類や椀、盤では、全て広葉樹材が利用され、スギなどの針葉樹材は１点も認められなかった。このことから、漆器類や椀、盤では、広葉樹材が選択的に利用されていたことが推定される。漆器椀では、観察した範囲では全て横木取りで作られており、樹種はブナ属、クリ、ケヤキ、サクラ属、トチノキ、ハリギリが認められた。この中では、ケヤキやトチノキの利用が目立つ。これらの樹種は、近現代の民俗事例［農商務省山林局1912、橋本1979］でも漆器木地などによく用いられる種類である。今回の結果は、これらの近現代の民俗事例とも一致する。新潟県内では、蔵ノ坪遺跡、岩田遺跡、曽根遺跡から出土した古代の漆器椀や皿の樹種同定で今回と同様の結果が報告されている［川村1983、越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社1992、パリノ・サーヴェイ株式会社2002］。このことから、同様の木材利用が少なくとも古代～中世にかけて行われていたことが推定される。

下駄は、連歯下駄と差歯下駄がある。連歯下駄では、いずれも台表が板目となる木取りで、スギとモクレン属が各１点認められた。一方、差歯下駄では、台表が板目となる木取りで樹種はモクレン属、歯は軸方向が接地面に対して垂直になる木取りで樹種はスギであった。このことから、下駄では連歯・差歯共にスギやモクレン属が利用されていたことが推定される。中世の下駄については、広島県草戸千軒町遺跡で多くの調査例があり、針葉樹を主とした木材利用が確認されており、連歯下駄と差歯下駄で木材利用の差異はとくに認められない［パリノ・サーヴェイ株式会社1997・2001］。今回の２種類は、いずれも草戸千軒町遺跡で確認されている種類である。草戸千軒町遺跡では、差歯下駄も多数出土しており、そのうちの17点で台と歯の樹種が明らかにされている。その結果では、台がモクレン属の場合には歯も全てモクレン属であり、今回のような組合せは確認されていない。中世の下駄については、草戸千軒町遺跡の他には、まとまった点数の調査を行った例が少ないため、木材利用の地域性などについては不明な点が多い。

曲物は、底板とされる４点と部材がスギ、曲物柄杓がサワラであった。いずれも全て柾目板であった。これらの木取りや樹種は、近現代の曲物の製作技法［農商務省山林局1912、成田1996］とも一致する。割裂性が高く、薄い板が得やすいこと、耐水性が高いことなどが曲物に利用された背景に考えられる。スギとサワラの違いは、使用目的の違いなどを反映している可能性があるが、現時点では資料が少ないため、詳細は不明である。

本地域では、中世の木製品の木材利用に関する調査例が少ないため、現時点では木材利用の実態については不明な点が多い。今後、さらに多くの調査事例を蓄積し、器種による木材利用の差異などを検討したい。

引用文献

橋本鉄男　1979　ものと人間の文化史31　ろくろ．444p.，法政大学出版局.

川村恵洋　1983　曽根遺跡出土木材の識別．新潟大学農学部演習林報告，16，p.75-82.

越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社　1992　越路町文化財報告書第19輯　岩田遺跡出土遺物　自然科学分析報告書．33p.

成田壽一郎　1996　曲物・箍物．205p.，理工学社.

農商務省山林局編　1912　木材ノ工藝的利用．1308p.，大日本山林會.

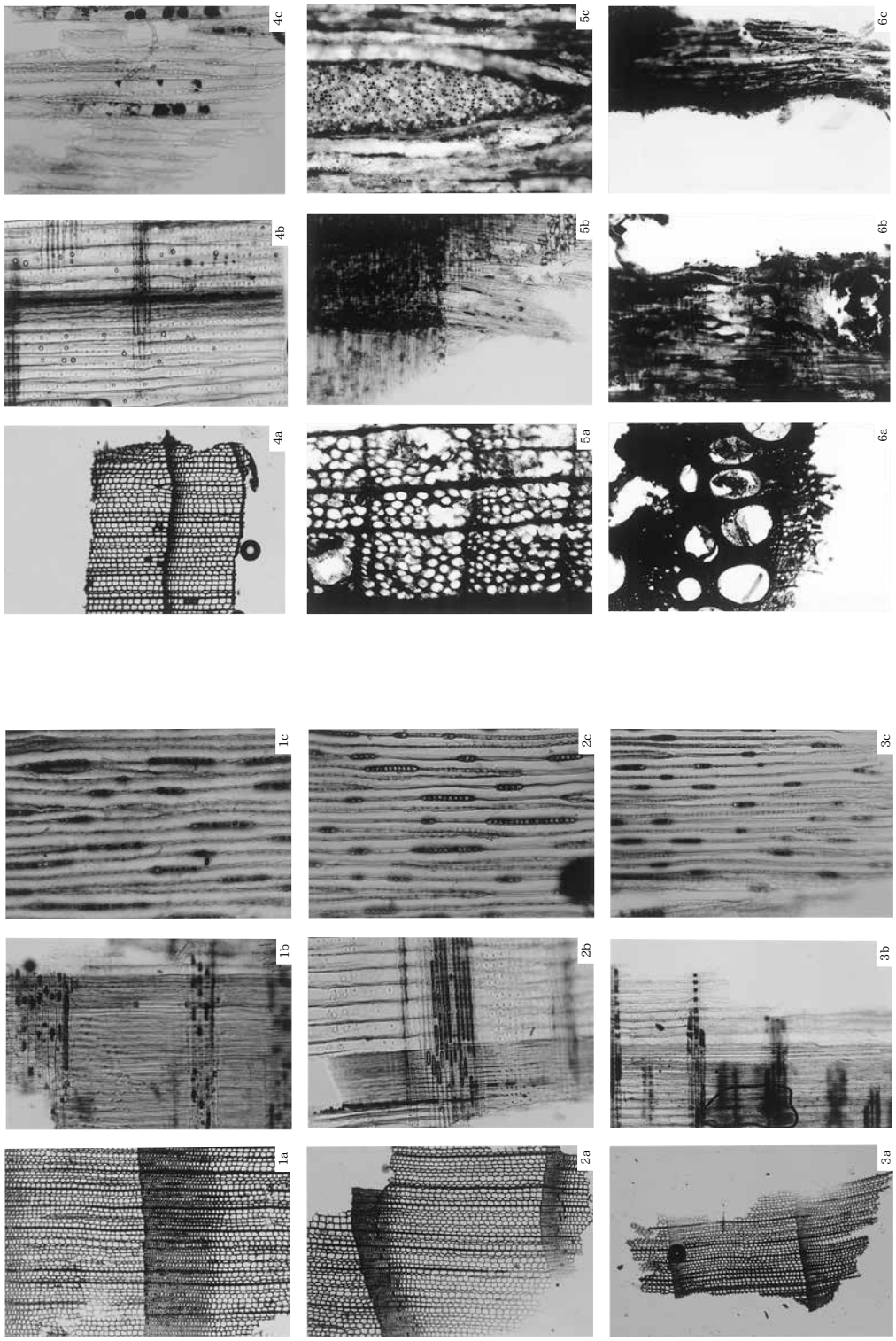
パリノ・サーヴェイ株式会社　1997　草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種.「草戸千軒町遺跡調査研究報告１　草戸千軒町遺跡出土の下駄」，p.70-86，広島県立歴史博物館.

パリノ・サーヴェイ株式会社　2001　草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種.「草戸千軒町遺跡調査研究報告５　草

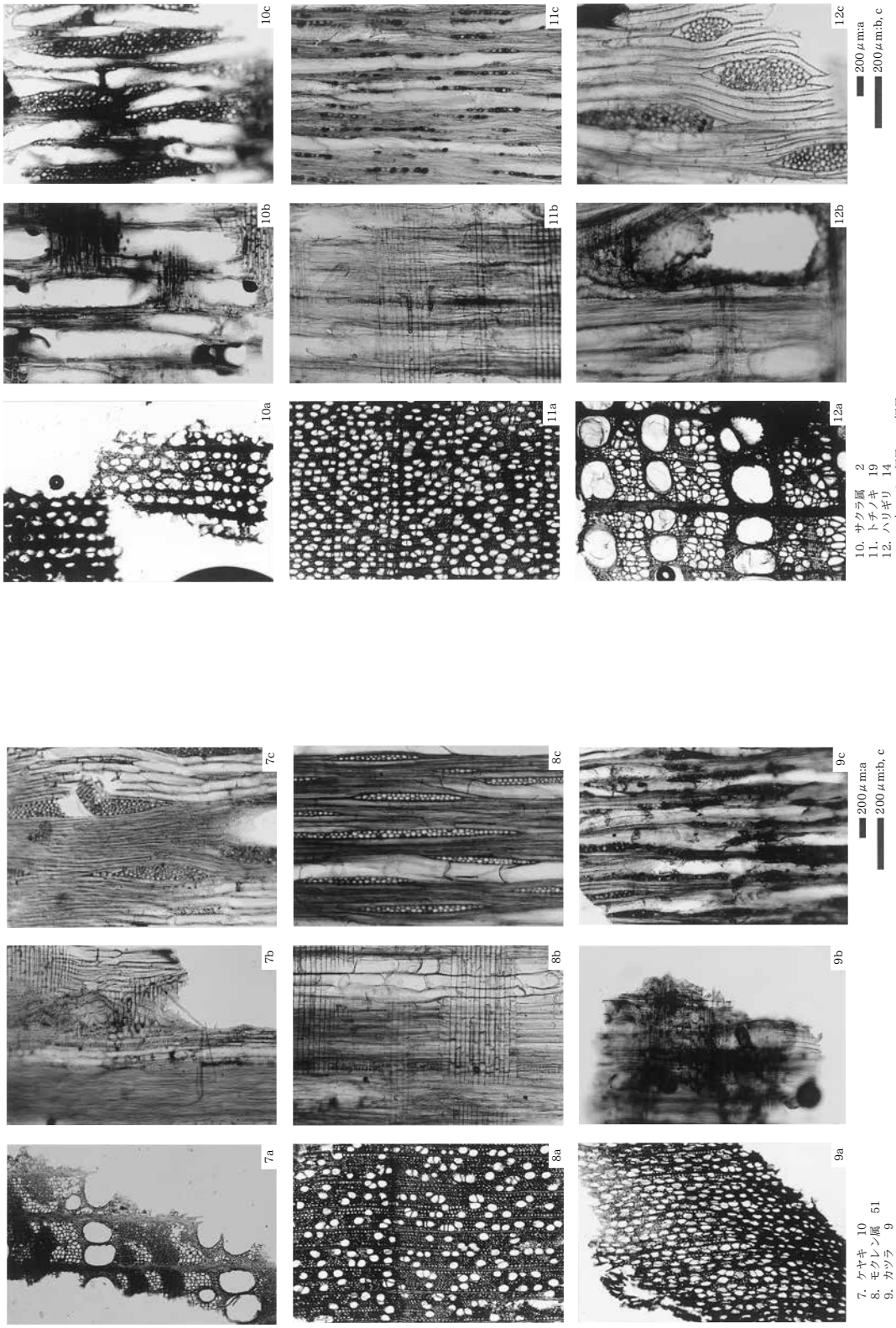
戸千軒町遺跡出土の下駄2」，p.15-34，広島県立歴史博物館.

パリノ・サーヴェイ株式会社　2002　蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種.「新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集一般国道7号　中条バイパス関係発掘調査報告書　蔵ノ坪遺跡」，p.45-59，新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団.

島地　謙・伊東隆夫編　1988　日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.



第21図　検出樹種の顕微鏡写真（1）



第22図　検出樹種の顕微鏡写真（2）

第Ⅶ章　ま　と　め

1　自然科学分析結果からみた遺跡の環境

珪藻化石分析の結果から、当遺跡は河川、または沼沢湿地のような環境と判断された。発掘調査の土層観察では、砂・シルト・粘土が互層となっており、流れの淀んだところに溜まるような植物遺体や、自生していたと思われる葦等の茎が残っていたことなどからも水辺環境が推測され、分析結果と合致する。また、地理的環境でも述べたように、遺跡周辺はかつて潟湖や後背湿地が数多く見られ、水はけの悪い低湿地帯であったことにも矛盾しない。

^{14}C年代はⅨ層を除き13世紀後半から14世紀を示し、出土した遺物の年代ともほぼ一致している。また、下層ほど古い年代値を示し、地層累重の原理にもかなっている。しかし、測定された年代は足跡群を検出したⅪ層で13世紀後半、より上層に当たるⅤ層でも14世紀を示し、Ⅷ層遺物包含層とほぼ同年代を示している。このことから、当遺跡は100年強の短期間に埋積されたものと考えられる。つまり、河川の氾濫・堆積・流路変更・再湿地化が何度も繰り返されたと推測できる。

花粉化石分析から、Ⅸ層当時は、周辺に乾き気味の畑地や路傍などの場所があったことが推定されている。おそらく、遺跡周辺に河川の氾濫に伴う自然堤防があり、乾き気味の微高地が存在したのであろう。

以上をまとめると、当遺跡は13世紀後半から14世紀に存在し、河川または沼沢湿地等、水辺の環境にあたる低湿地に存在したと考えられる。そして、低湿地が河川の氾濫による土砂の堆積で一時的に陸化したとしても、度重なる河川の氾濫・流路変更により、湖沼化することが再三繰り返され、比較的短期間に埋積されたものと思われる。また、周辺には自然堤防等乾き気味の環境の微高地もあったと考えられ、人々の生活の場が遺跡周辺にあったものと推測できる。

2　遺　　構

A　大型の土坑

遺跡の南側で確認された３基の土坑である。Ⅷ層遺物包含層中から検出され、この遺跡としては層位学的に最も新しい遺構と考えられる。しかし、SX02最下層の植物片による^{14}C年代が740±30yrBP（cal AD1280）を示し、Ⅷ層包含層とほぼ同時期の遺構と考えられる。SX02からは人骨が出土したが、SX01・04からは検出できなかった。出土した人骨は頭蓋骨と脛骨の２点のみで、頭蓋骨周辺からは下顎が出土せず、不自然な検出状況であった。また、後で詳しく述べるが脛骨関節部分は欠損し、犬にかまれた痕跡が認められる。したがって、これら２点の骨は土坑内に埋葬されたとは考えがたい。さらに、遺構の土層断面は砂・シルト・粘土が水平に互層しラミナをなしていることや、珪藻化石分析でもSX02覆土６・７層が沼沢湿地または河川環境と分析されていることから、これらの遺構は流水環境下における自然埋没と考えられる。以上のことから、大型の土坑を土坑墓と捉えることは難しい。

発掘現場見学の折りに、地元の民俗に詳しい渡辺亨氏から「ザイボリ」の跡ではないかと御指摘いただいた。「ザイボリ」とは、潟・沼の縁辺でザイ（氷）を割って底にいる魚を驚かせて捕る漁法である。冬

になると潟に穴を掘っておき、ザイが厚くなり魚が穴の深部に集まったところを一網打尽にする。主にザイの厚くなる１～２月頃行うが、夏の渇水期にも同様の方法で魚を捕ることがある。穴は竹鋤簾で掘るため不定形になり、深さ1m以上は掘っていた。潟や低湿地の残っていた昭和初期まで行われていた漁法で、土坑の埋積の仕方や民俗学的な観点から、この遺構が「ザイボリ」跡の可能性も考えられる。

B　畝状遺構

砂地の畝跡は全国的にも珍しく、鳥取県長瀬高浜遺跡Ⅷ［牧本ほか1999］、鳥取県錦町第一遺跡［平木1996］で報告例がある。長瀬高浜遺跡は砂丘地に立地し、畝は13世紀以降の畠跡である。耕作土はいわゆる「クロスナ」層で、プラント・オパール分析、花粉化石分析等の自然科学分析の結果、稲作（陸稲）が行われていた。錦町第一遺跡も12～13世紀の砂丘地に営まれた畠跡で、クロスナを耕作土とし陸稲が栽培されていた。

当遺跡の畝状遺構の耕作土であるＸ層は、当初青灰色砂であったが、検出後空気に触れて白っぽい色に変化した。粒子は砂丘砂に比べて粗く、河川の氾濫によって運搬・堆積されたものと推定される。^{14}C年代は715±30yrBP（cal AD1285）を示し、花粉化石分析では砂地で花粉化石が流出したため「十分な花粉化石が産出しなかった」と報告（第Ⅵ章）された。よって、畝状遺構が畠跡である明確な証拠を確認できなかった。しかし、自然現象によって連続する畝が形成されたとは考えがたい。また、形状が群馬県で火山灰下から多数検出されている畠跡にも類似している。さらに、UNE-Bで畝替の形跡が確認されたことから、畠跡と考えることが妥当であろう。

しかし、疑問点もある。それは、UNE-Aに介在する暗オリーブ褐色粘質土（図版７・８畝状遺構土層注記７）の存在である。これは、畝（凸部）中央部に途切れがちであるが薄く縞状に連続している。土は粘質性が高く、細かい植物遺体が混じっており、水性堆積土層と考えられる。本来は全て連続していたが、畠が作られたことで分断され、畝（凸部）にだけ残ったものと推測できる。そう考えると、畝構築前に溝（凹部）にも連続していた粘質土が構築時に畝（凸部）に載るはずだが、その形跡を確認できなかった。さらに、畝状遺構が畠であるなら、耕作物の根で縞状粘質土がかなり攪乱されるはずである。ところが実際は、途切れ途切れであっても連続している。畝立てはしたが、作物を育てる間もなく水没したのであろうか。珪藻化石分析では、この当時の環境変化が大きかったことを示しており、水没・埋積を暗示しているかのようである。以上、畝状遺構を畠跡と短絡的に捉えるには問題点も残るが、これは今後の課題としたい。

今回検出された畝状遺構は、これまであまり報告例のない砂地の畠跡と考えられることから、当時の土地利用・景観の復元に重要な遺構であろう。

3　漆　　器

浦廻遺跡で出土した木製品の中で、漆器が20個体程ある。器種は一般的な椀・皿のほか、片口鉢・脚付膳がある。個体数は椀が14点、皿が１点、片口鉢と脚付膳が２点で、器種不明が１点ある。以下、四柳［1995・1997など］の漆器研究などを参考に、若干の検討を行う。

形　　態

椀の形態は、５・６が無高台（碁笥底）である他は低い輪高台である。体部は内湾するもの（3・13～

16)、直線的に傾斜するもの（4～8・10～12）の2形態見られる。底部は3が若干厚いほかは薄いものが多い。9は口縁形態が輸入陶磁器の青磁盤に類似する。皿は総高台の小皿である。片口鉢は、輪高台と丸底状の無高台なるものの2種存在する。脚付膳は、外縁に沿ってある孔に脚が装着されるもので、鎌倉市千葉地遺跡［手塚ほか1982］で報告されているものに類似する。

上塗色の分類

塗膜分析は未同定で、表面上で見た結果である。椀は総黒色が8点（3～10）、内面赤色が2点（11・12）、総黒色で内外面に赤色漆で紋様を描いているものが4点（13～16）である。紋様は秋草紋・梅紋・三巴紋で手描きである。皿は総黒色である。片口鉢は2点とも総黒色で内外面に赤色漆で紋様が描かれている。紋様は花紋を描いていると思われる。脚付膳は内面赤色（19）と総黒色（20）のもの2種である。

時　　期

県内の漆器編年は、品田高志［1991・1997］により示された編年案が基本的な枠組みとして受け入れられている。その後、斎藤幸恵［1995］、鶴巻康志［1997］、田村浩司［1999］らが県内の状況と変遷についてまとめられているが、品田の編年案を踏襲しているものである。最近、春日真実［2000・2001］は新資料を用い従来の編年案を再検討し、新たに編年案を提示している。現在のところ春日が示した編年案が妥当であるといえる。以上の論考から浦廻遺跡の漆器を見ると、椀は底部の低い輪高台と無高台（碁笥底）があり、上塗りは総黒色系漆が主体で少量内面赤色漆が見られる。漆絵が施されるものは定量存在する。こうした特色は、柏崎市北田遺跡［品田1990］、出雲崎町番場遺跡［坂井1987］、白根市馬場屋敷下層遺跡［川上・遠藤1983］と同様で、そこには13世紀後半から14世紀前半の年代に位置付けられている。浦廻遺跡で出土した「元應二年」（1320年）銘のある卒塔婆（29）の存在からもこの間の時期に比定できる。

漆器の樹種

第9表に示したように、漆器に使用されている樹種はケヤキが6点で最も多く、次いでトチ5点、クリ・ブナ・ハリギリが各2点、カツラ、サクラが各1点である。器種別で見れば、椀はケヤキが主体で、片口鉢、膳がトチという特色がある。ケヤキは堅く薄い木地に加工ができ、比較的標高の低いところで採集可能であるため好んで使われた樹種である［須藤1997・中井2001］。

背　　景

最後に、浦廻遺跡出土漆器の使用実態について述べる。漆器の出土分布は、卒塔婆・箸などの葬送・供養儀礼に関係する遺物と重なる。人骨出土地点からは割合近い範囲に分布する。このことから、日常使用による破損からの廃棄とは考えられず、『餓鬼草紙』（12世紀末）の墓地の様子を描いた図（第23図）で死者の前に椀・皿が並べられている状況があり、この構図を当てはめたい。折敷も多く出土しているので、葬送・供養儀礼の際、折敷上に椀・皿が配膳されていたのではと考える。

4　木　　簡

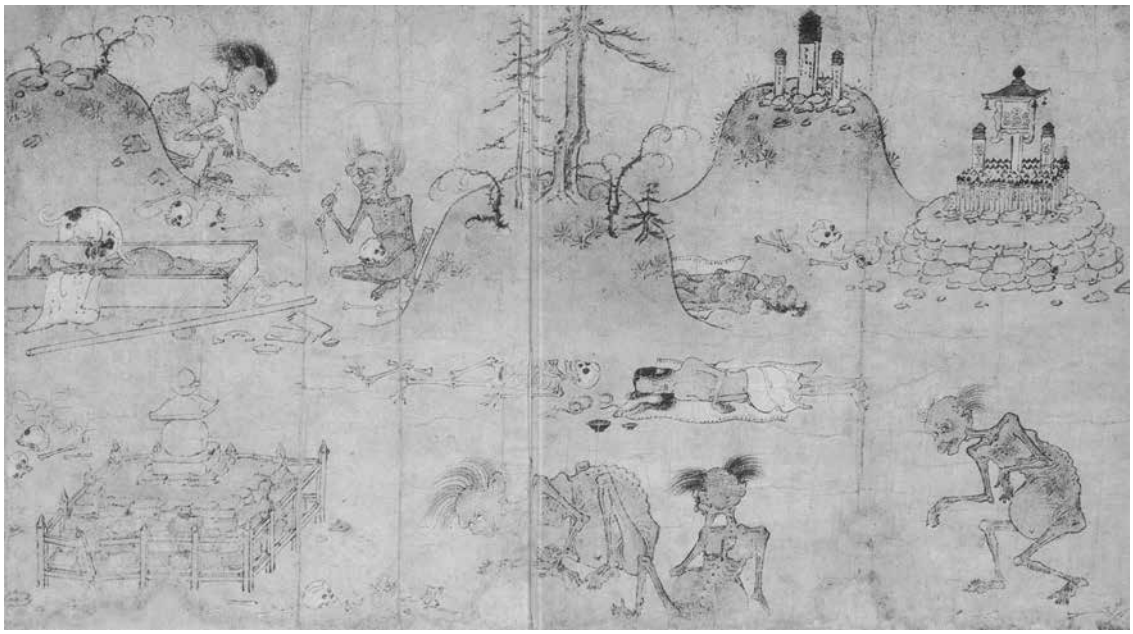
浦廻遺跡の木簡や出土遺物を概観すると、石造物に関する出土品が見られず、代わって木製品が多く出土していることが明らかである。従来の中世墓制研究の中心的対象であった石塔や板碑といった石造物が武士を中心とする墓制と指摘されている中で、本遺跡の塔婆群が木製であるというのは、石造物を造立出来ないクラスの人々がこの木簡の使用に関与したと見なされる。『餓鬼草紙』の墳墓図を模倣したような

頭部墨彩の笹塔婆はその代表的例示である。また、この墳墓図の仏龕笹塔婆と比較して非常に簡略化されていることでもそれが判明する。同一市内の馬場屋敷遺跡では上層ではあるが、石積の塚が調査され、伝承も含めると周辺にはいくつか館跡がみられるのと比較すると、本遺跡の周りにこうしたものが見られないことも民衆、おそらく村民に用いられたことを示しているのであろう。

44号木簡は水野正好［1986］によれば、『修験深秘行法符咒集』や『深秘集』にこのタイプの符籙があり、「疱瘡呪」の符とされており、本木簡も病魔退散に使用されたと思われる。塔婆類の他にこうした呪符が混在している状況も含めると、文字から判明する本遺跡の性格は村の祭祀場、もしくは祭祀具の廃棄場となる。病魔退散といったいわば、通例の祭祀の他に葬礼なども行われ、広義の村の聖なる空間として認識されていた。このことは共伴遺物に陽物形など祭祀具が見られることや墨痕がないながらも荷札状木簡が見られることでもそうした性格が分かろう。

村落内における聖なる空間の位置について民俗学では一般的に、村落構成員が居住する定住地としての領域の外に配置することが広く周知化されている。それが中世でも同様の状況にあることは、奥山荘に関連する板碑などの現存分布を見れば自明である。よって、本遺跡も居住する村から離れた地点に当ることは、現在の大字境に近いことでも明らかである。また、その大字が近世村だけではなく、中世の村落もほぼ同位置に当たると指摘されているので［飯田1989］、旧戸頭村と旧諏訪ノ木村の村境にも近くなる。ただし、このいずれに属する村民によるものかは不明であり、今後の課題としておく。

比類ない木簡に注目すれば、本木簡群は中世村落民衆の祭祀、特に葬礼を明らかにする上で重要な意味がある。従来の中世民衆の葬制に関する研究が京都・鎌倉といった都市民を中心とする中で、資料のない中世村落における葬礼祭祀を実態的に明らかにする。この他にも多くの意味を明らかにできるが、今後の課題とし後考で明確にしたい。



第23図　餓鬼草紙　第四段　疾行餓鬼
（中央公論新社刊『コンパクト版　日本の絵巻 巻7　「餓鬼草紙」』より）

5　骨

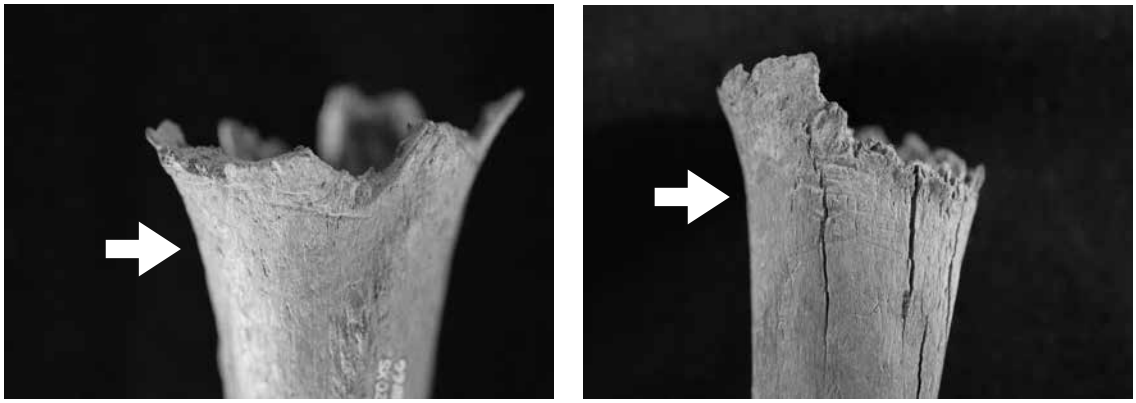
出土した骨は人骨と獣骨であり、獣骨は１点のみが鳥で残り全てが犬である。人骨は、頭蓋骨・肩甲骨・椎骨・大腿骨などの各部位や歯など、特徴を容易に認められるものから骨片まで含め72点あり、出土した上腕骨の点数から最小個体数は５である。犬骨は人骨同様に骨片まで含め181点あり、左下顎の点数から最小個体数は４である。

人骨は遺構内から出土したもの２点に対して、残り全ては包含層からであり、圧倒的に遺構外からの出土が多数を占めている。犬骨は遺構内からの出土はなく、全て包含層からの出土である。骨の出土分布を見ると、大型の土坑周辺の遺跡南側に集中している（第８図）。

大型の土坑SX02から出土した骨６号は、人骨の頭蓋骨と右脛骨の２点である（図版３・32）。頭蓋骨は頭頂部が下になった逆さの状態で出土し、その周辺から下顎は検出されていない。右脛骨は、中央部に人為的な切り傷が認められる。また、関節両端部は欠損している。欠損した部分をよく観察すると、そこだけ凸凹が激しく、骨の長軸方向に対して直交する筋のような傷跡が確認できる（第24図）。このような特徴は、縄文時代の貝塚から出土するイノシシ・シカの骨にも共通し、犬がかじったものとされており［松井1994］、この傷跡も犬の噛み痕であろうと思われる。

遺構以外から出土した人骨の出土状況をみると、骨１・５号は比較的まとまって検出された（図版４・32）が、それ以外は１本ずつバラバラと散在的に出土しているものが多い。第Ⅴ章人骨の分析から、骨１・５号は解剖学的に正常な位置関係を保って出土していない。また、骨１号には上述同様の犬の噛み痕が認められるものがある（第24図）。

こういった状況から判断すると、当遺跡は『餓鬼草紙』などの絵巻物に見られる遺棄葬の情景がイメージされる。そこには、塚や頭部墨彩の木簡、死体や白骨化した骨が描かれている。さらに、死体を食べている犬や、ドクロをまさぐっている餓鬼なども描かれいる。塚に葬られたのは上層階級の人々で、一般民衆は木棺に入れられたり、筵の上にのせられたり、筵さえもなくそのまま放置されたりしていた。そして、やがて犬に食われ、鳥についばまれ、風雨にさらされて白骨化し、四散していったと考えられる。



骨６号Ｂ　　骨１号

第24図　犬の噛み痕のある人骨

同様に民衆の葬送・供養の情景を想定できる中世の遺跡は数少なく、京都や鎌倉といった都市民の葬送例を除くと、草戸千軒町遺跡Ⅴ［福島ほか1996］で報告例がある。草戸千軒町遺跡では、土坑墓や集石墓も数多く見られるが、墓遺構以外の溝や池からも多数の骨が出土している。それらは、溝や池などに放り込まれたような状態で出土しているものが多く、当遺跡の低湿地という立地条件に出土しているのと類似している。そして、人為的な刺し傷による穿孔や切り傷による後裂が認められる骨や、犬に噛み切られた歯形のついた骨が出土していることも共通している。

時期は異なるが、奈良県稗田遺跡［中井1976］では、川底から奈良末期の遺物と共に人骨２体分が検出されている。このうち１体は曲物と共に、コモにくるまれた状態で出土した。他にもコモ状のものが見られ、このような死体処理が多く行われていたと考えられている。当遺跡では、出土人骨周辺にコモ・ムシロ等の明らかな編み目の痕跡は認められなかった。しかし、アシやヨシ等の茎が横たわった状態で多数検出された。コモ・ムシロの代わりに周辺の草を刈り取り、遺体の下に敷いたり上に掛けてたりしていた可能性も考えられる。

以上をまとめると、これらの骨は埋葬されたというより、遺棄されたと捉える方が自然であろう。遺棄された屍は、犬に食い荒らされて正常な位置関係がずれたり、風雨にさらされて白骨化したりして、散り散りバラバラになったものと思われる。

出土している木簡類と関連し、当遺跡は鎌倉時代後期（13世紀後半から14世紀前半）、水辺における葬送・供養に関連した遺跡と考えられる。村落における葬礼祭祀の報告例は、上層階級の人々のものと比べて少ないことから貴重な遺跡であり、今後の研究に多くの情報をもたらすことが期待される。

要　　約

1　浦廻遺跡は、越後平野中央部、新潟県白根市大字戸頭字浦廻に所在し、信濃川と中ノ口川の間の低湿地に立地する。現標高は1.5ｍで、現況は水田である。

2　発掘調査は、国道８号白根バイパスの建設に伴い、平成14年５月20日から10月４日に実施した。調査面積は6,800m^{2}である。

3　調査の結果、中世の遺構・遺物が検出された。遺構は、大型の土坑が３基、畝状遺構が２区画、足跡群が検出された。遺物は、土器・木製品・骨などで2,335点出土した。その内、木製品が2,081点で大多数を占める。

4　遺跡周辺の環境は、珪藻化石分析などから河川、または沼沢湿地のような低湿地帯に立地すると推測された。

5　砂地に立地する畝状遺構は、花粉化石分析では十分な結果が得られなかったが、畝替えの形跡が確認されることなどから畠跡と考えた。

6　木製品は、漆器・曲物・下駄・扇・行火・鞘・祭祀具・木簡などがあるが、箸が出土遺物の44.5％と大半を占める。

7　漆器は20個体出土した。総黒色漆のものが主体だが、秋草や巴紋の漆絵があるものも存在する。器種は椀・皿のほか、脚付膳なども出土した。椀の形態から13世紀後半から14世紀前半と思われる。

8　木簡は108点あり、その種類は「南無阿弥陀佛」や「南無大日如来」と記された卒塔婆、「急々如律令」などの呪符、「妙法蓮華経」の経文が記された柿経などで葬送・供養儀礼に関連するものである。卒塔婆には、11本束や６本束に一括出土したものがあり、卒塔婆の使用形態を明らかにできる資料がある。また、頭部を墨彩する特徴的な卒塔婆もある。その中の１点には「元應二年」（1320年）と鎌倉時代末期の年号が記されたものがあり、遺跡の年代比定を可能にしている。

9　骨は、人骨と獣骨がある。人骨片は72点あり、最小５体分認められた。その中で、壮年男性と６～７歳性別不明の人骨は残存良好な頭蓋骨が出土している。人骨片には人為的な切り傷や犬の噛み痕と思われる傷を残すものがある。獣骨は182点あり、その内１点は鳥骨と考えられ、これ以外は犬骨である。犬骨は最小４体分認められた。

10　遺跡は当時の集落から離れた低湿地にあり、出土遺物から鎌倉時代後期における葬送・供養に関連する遺跡であると考えた。

引 用 文 献

阿部洋輔　1987　「序章　第一節　越佐中世の舞台」『新潟県史』通史編２　中世　新潟県

飯田素州　1989　「第二編　中世」『白根市史』　巻七　通史　白根市教育委員会

大平明夫　1992　「完新世における新潟平野北東部の地形発達史」『地理学評論』　65－867～888

岡本郁栄　1986　「序章」『新潟県史』　通史編１　原始・古代　新潟県

春日真実　2000　「第Ⅶ章3A古代・中世における挽物・曲物の変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第97集　大武遺跡Ⅰ（中世編）』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2001　「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年的位置」『新潟考古学談話会会報』第23号　新潟考古学談話会

川上貞雄・遠藤孝司　1983　『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』　白根市教育委員会
木村浩一　1991　『史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅱ』　浪岡町教育委員会
小林勝義　1989　「第十章　第一節　白根郷の寺院」『白根市史』巻七　通史　白根市
小松茂美編　1994　「餓鬼草子　第四段　疾行餓鬼」『コンパクト版　日本の絵巻　餓鬼草子　地獄草子　病草子　九相詩絵巻』　中央公論新社
斎藤幸恵　1995　「越後の木器－漆器を中心に－」『中世北陸の木製食器』　北陸中世土器研究会
坂井秀弥　1987　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第48集 番場遺跡』　新潟県教育委員会
佐藤明人　1990　『群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第102集 有馬遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代編）』　群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
品田高志　1990　「北田遺跡」『吉井遺跡群Ⅱ』　柏崎市教育委員会
品田高志　1991　「越後における古代・中世の漆器」『新潟考古学談話会会報』第７号　新潟考古学 談話会
品田高志　1997　「北陸における古代・中世の木製食器」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』　北陸古代土器研究会
須藤　護　1997　「木地屋研究－木地椀の製作工程を中心にして－」『中世食文化の基礎的研究　国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』　国立歴史民俗博物館
田中一穂　2002　「白根地内（浦廻遺跡）一次調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
田村浩司　1999　「第５章３－３　漆器」　『新潟県の考古学』　新潟県考古学会
田村　裕　1987　「序章　第二節　古代の中の中世」『新潟県史』通史編２　中世　新潟県
鶴巻康志　1997　「越後における古代～近世の漆器」『北陸の漆器考古学』　中世土器研究会
手塚直樹ほか 1982　『千葉地遺跡』　千葉地遺跡発掘調査団
中井一夫　1976　『奈良県遺跡調査概報　稗田遺跡発掘調査概報』　奈良県立橿原考古学研究所
中井さやか　2001　「5　漆器」『図説江戸考古学研究事典』　江戸遺跡研究会編　柏書房
新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ－」『第四紀研究』13　57～63
平木裕子　1996　『（財）米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書　第17集　錦町第１遺跡』　（財）米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
福島政文ほか 1996　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
牧本哲雄ほか 1999　『鳥取県教育文化財団調査報告書　第61集　長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第６遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター
松井　章　1994　「別編１　草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物依存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
水澤幸一　2001　『下町・坊城遺跡Ⅴ』　中条町教育委員会
水野正好　1986　「鬼神と人とその動き－招福除災のまじないに－」『文化財学報』第４集　奈良大学文学部文化財学科
四柳嘉章　1995　「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世研究会編　真陽社
四柳嘉章　1997　「概説　北陸の漆器考古学－中世とその前後－」『北陸の漆器考古学』　中世土器研究会

土器

No.	器種	出土地点	層位	計測値（cm）			焼成	胎土	手法	備考
				口径	底径	高さ				
1	土師器皿	4C13	Ⅷy		60		良好	長石・石英多い	手づくね	

漆器

No.	器種	出土地点	層位	上塗り		計測値（cm）				木取り	樹種	備考
				内面	外面	高台径	底径	口径	高さ			
2	皿	5C18	Ⅷ	黒色	黒色		7.8	9.4		横木	サワラ属	底部ケズリ成形
3	椀	4C11	Ⅷ	黒色	黒色	7.9	8.1	15.3	4.4	横木	クリ	
4	椀	4C13	Ⅷc	黒色	黒色	7.7	7.9	13.9	4.2	横木	ケヤキ	
5	椀	4C20	Ⅷy	黒色	黒色		7.8			横木	ハリギリ	
6	椀	3C18	Ⅷ	黒色	黒色		7.5			横木	ブナ属	
7	椀	5C17	Ⅷ	黒色	黒色	6.9	7.1			横木	クリ	
8	椀	10B6	Ⅷ	黒色	黒色	6.4	6.6			横木	ケヤキ	
9	椀	6B6	Ⅷ	黒色	黒色	11.2	11.6	19.1	4.5	横木	カツラ	輸入陶磁器盤の模倣？
10	椀	4C15	Ⅷ	黒色	黒色	7.4	7.5	13.6	5.4	横木	ケヤキ	底面「人」の刻書
11	椀	4B12	Ⅷz	黒色	赤色	7.2	7.3			横木		
12	椀	5C15	Ⅷ	黒色	赤色	7.2	7.2			横木	ケヤキ	
13	椀	3D16	Ⅷ	黒色（漆絵）	黒色（漆絵）	7.2	7.5			横木	ブナ属	赤色漆手描き秋草紋、底面「工二」刻書
14	椀	5C3	Ⅷ	黒色（漆絵）	黒色（漆絵）	6.5	6.7			横木	ハリギリ	赤色漆手描き梅紋
15	椀	4E20	Ⅷ	黒色（漆絵）	黒色（漆絵）	6.4	6.8	14.7	5.4	横木	ケヤキ	赤色漆手描きで巴紋
16	椀	4C24	Ⅷ	黒色	黒色（漆絵）		6.8	12.6		横木	ケヤキ	赤色漆内面草花紋手描き
17	片口鉢	4C15	Ⅷ	黒色（漆絵）	黒色（漆絵）	13.4	14.0	20.6	9.4	横木	トチノキ	赤色漆手描で花紋
18	片口鉢	4C3	Ⅷy	黒色（漆絵）	黒色		11.2	14.0	10.0	横木	トチノキ	外面赤色漆手描きで花紋
19	脚付膳	6C17	Ⅷ	黒色	赤色		36.0			板目	トチノキ	側縁穿孔２ヶ所、木釘痕12ヶ所
20	脚付膳	3D22	Ⅷ	地	黒色		30.8			板目	トチノキ	穿孔１ヶ所
21	不明	4D12	Ⅷ	黒色						板目	トチノキ	内面炭化

木製品

No.	器種	グリッド	層位	法量（cm）			木取り	樹種	備考
				長さ	幅	厚さ			
22	曲物側板	4A24	Ⅷ	9.7	16.4	0.6	板目	スギ	ケビキ
23	曲物側板	4D13	Ⅷ	7.2	16.3	0.8	柾目	スギ	ケビキ
24	曲物側板	3E22	Ⅷ	14.6	4.2	0.7	板目	スギ	ケビキ
25	曲物側板	3D20	Ⅷ	10.2	17.9	0.8	柾目	スギ	ケビキ
26	曲物側板	6B17	Ⅷ	3.5	17.1	0.6	柾目	スギ	ケビキ
27	曲物底板	4B3	Ⅷ	23.3		1.2	柾目	スギ	側面に木釘２ヶ所
28	曲物底板	4B3	Ⅷ	18.0		1.0	柾目	スギ	皮綴じ３ヶ所、木釘２ヶ所
29	柄杓	4C13	Ⅷy	10.4		9.5	柾目	サワラ	１列内４段綴じ、土師器皿が蓋として伴う。
30	蓋	5C13	Ⅷ	24.6	11.4	0.5	柾目	スギ	中央に孔、両面黒色に変色（コゲ？）、木釘２ヶ所
31	蓋	4C14	Ⅷy	23.3	12.3	1.1	柾目	スギ	中央に孔、木釘５ヶ所、ホゾ溝あり、両面黒色に変色（コゲ）
32	蓋	4E14	Ⅷ	21.0		0.8	柾目	スギ	中央に孔、両面黒色付着物（コゲ？）
33	蓋	4B7	Ⅷy	29.8	8.4	0.6	柾目	スギ	孔２ヶ所、小孔２ヶ所
34	折敷	5C15	Ⅷ	16.4	5.0	0.5	柾目	スギ	桟綴皮孔２ヶ所
35	折敷	12E15	Ⅷ	28.3	2.8	0.6	柾目	スギ	
36	折敷	4B2	Ⅷ	22.6	13.7	0.7	柾目	スギ	桟綴皮孔３ヶ所
37	折敷	4D18	Ⅷ	28.4	8.7	0.8	柾目	スギ	桟綴皮孔１ヶ所
38	折敷	4C10	Ⅷ	28.4	14.8	0.7	柾目	スギ	桟綴皮孔３ヶ所
39	折敷	4C15	Ⅷ	28.0	11.6	0.6	柾目	スギ	桟綴皮孔２ヶ所
40	折敷	7C21	Ⅷ	27.8	5.0	0.4	柾目	スギ	桟綴皮孔２ヶ所
41	折敷	10C18	Ⅷ	26.8	3.2	0.5	柾目	スギ	黒色付着物、孔２ヶ所
42	折敷	4C13	Ⅷy	15.3	13.5	0.7	柾目	スギ	俎板？傷痕多い
43	折敷	7E7	Ⅷ	14.3	13.4	0.4	柾目	スギ	桟綴皮孔２ヶ所
44	折敷	6D11	Ⅷ	24.8	15.6	0.7	柾目	スギ	桟綴皮孔３ヶ所
45	俎板	4C15	Ⅷy	21.1	16.0	1.5	柾目	スギ	刃物痕多い。脚付俎板？
46	箱側板	3B18	Ⅷ	16.4	13.6	1.0	柾目	スギ	正面木釘９ヶ所、上部４ヶ所、側面２ヶ所、内面コゲ
47	箱側板	4C24	Ⅷ	18.7	8.9	0.8	柾目	スギ	木釘６ヶ所、内面コゲ
48	下駄	6E19	Ⅷ	19.9	8.3	8.1	板目	台：モクレン属 歯：スギ	露卯下駄。前ホゾ１ヶ所、後ホゾ１ヶ所
49	下駄	6C6	Ⅷ	13.5	6.0	2.3	板目	スギ	連歯下駄
50	下駄	6B6	Ⅷ	9.9	5.5	1.7	柾目	スギ	差歯下駄の歯
51	下駄	6B1	Ⅷ	24.3	10.3	3.7	板目	モクレン属	露卯下駄。前ホゾ３ヶ所、後ホゾ２ヶ所
52	草履芯	4C12	Ⅷy	25.0	5.2	0.4	板目	スギ	２点１対片足分
				24.9	5.1	0.4	板目	スギ	
53	草履芯	4C18	Ⅷy	23.9	5.6	0.3	板目	スギ	２点１対片足分
				23.9	5.6	0.4	板目	スギ	
54	草履芯	4C13	Ⅷy	24.5	5.2	0.3	板目	スギ	２点１対片足分
				24.5	5.2	0.3	板目	スギ	
55	草履芯	6B11	Ⅷ	24.5	4.4	0.4	板目	スギ	
56	草履芯	4C15	Ⅷ	23.9	5.0	0.6	板目	スギ	
57	草履芯	5D1	Ⅷ	24.2	5.1	0.4	板目	スギ	孔あり
58	扇	4C14	Ⅷy	32.9	1.7			スギ	骨８枚、軸棒残存
59	杓子	4C24	Ⅷy	28.3	9.4	0.5	柾目	スギ	
60	杓子	5E12	Ⅷ	26.2	4.2	0.4	柾目	スギ	
61	毬杖の玉	SX02・3B16	6	7.0		4.2	芯持丸太	トウヒ属	
62	とんぼ	5D5	Ⅷa	12.7	2.7	0.4	柾目	スギ	中央２ヶ所木釘
63	行火	5E12	Ⅷ	20.4	18.3	17.3		スギ	内面がこげている。

No.	器種	グリッド	層位	法量（cm）			木取り	樹種	備考
				長さ	幅	厚さ			
64	火鑽臼	4B10	Ⅷ	10.2	13.4	2.0	柾目	スギ	差歯下駄の歯を転用
65	鞘	4C15	Ⅷ	23.1	2.9	0.6	柾目	スギ	
66	鞘	4D15	Ⅷ	21.5	2.7	0.8	柾目		側面３対の刻目、「×」の傷
67	陽物形	3C25	Ⅷy	13.2	2.0	1.6	板目	スギ	立体的な丁寧な作り
68	刀形	4B10	Ⅷz	27.2	2.2	0.5	板目	スギ	
69	刀形	4B6	Ⅷy	26.0	2.2	0.7	柾目	スギ	
70	箸	8C18	Ⅷ	18.2	0.6	0.4		サワラ	
71	箸	4B10	Ⅷ	21.8	0.7	0.6		スギ	
72	箸	2D24	Ⅷ	19.9	0.8	0.5	柾目	スギ	
73	箸	4D2	Ⅷ	24.9	0.6	0.5		サワラ	
74	箸	4B15	Ⅷ	20.4	0.7	0.4		スギ	
75	箸	6C2	Ⅷ	24.1	1.2	0.8	板目	ヒノキ	片端尖り
76	箸	8E19	Ⅷ	48.0	1.2	0.9	板目	スギ	片端尖り
77	箸	4B7	Ⅷy	70.1	1.1	0.8		スギ	両端尖り
78	箸	4C20	Ⅷz	87.3	2.2	1.0		スギ	
79	箸	5C25	Ⅷ	79.1	1.4	0.9		スギ	
80	杭	2C23	Ⅷ	62.5	3.2	2.2	柾目	スギ	
81	杭	11D1	Ⅷ	35.0	1.9	1.4	板目	スギ	
82	斎串？	4C23	Ⅷ	29.1	5.4	0.7	板目	スギ	小孔１ヶ所
83	部材	6C24	Ⅷ	14.6	1.4	0.2	板目	スギ	木釘２ヶ所
84	部材	6C4	Ⅷ	14.5	3.0	0.1	柾目	スギ	小孔２ヶ所
85	部材	6C12	Ⅷ	16.2	1.3	0.2	板目	スギ	木釘１ヶ所
86	指物部材	3D13	Ⅷ	14.6	1.6	0.5	板目	スギ	木釘３ヶ所
87	把手？	5C1	Ⅷ	13.0	3.0	0.5	柾目	スギ	黒色系漆片面塗布、木釘２ヶ所
88	指物部材	3B12	Ⅷ	10.3	3.1	0.4	柾目	スギ	１孔あり
89	指物部材	5C25	Ⅷ	18.5	3.8	0.6	柾目	スギ	木釘２ヶ所
90	部材	4E7	Ⅷ	21.0	8.3	0.8	柾目	スギ	木釘２個１対で２ヶ所
91	柄	5C23	Ⅷ	14.3	3.5	3.1		スギ	
92	柄	地点不明	Ⅷ	29.0	3.9	2.7	板目	スギ	
93	把手？	11D15	Ⅷ	14.5	3.4	1.8	板目	スギ	孔あり
94	不明	5B2	Ⅷ	9.3	11.8	1.6	柾目	スギ	鋸歯状加工
95	不明	6C17	Ⅷ	5.4	2.8	0.8	板目	スギ	中央に孔、黒色系漆付着部分あり
96	部材	10E1	Ⅷ	26.1	1.3	1.1		スギ	黒色系漆
97	柄（柄杓）？	5C23	Ⅷ	26.6	1.6	1.5		スギ	
98	柄？	6B20	Ⅷ	31.4	1.7	1.5		スギ	頭部をやや突起させる加工
99	柄？	4C19	Ⅷy	28.1	1.3	0.8	柾目	スギ	
100	柄	6E3	Ⅷ	64.3	1.4	0.8	柾目	スギ	木釘２ヶ所
101	不明	5C23	Ⅷ	18.7	1.3	1.1		スギ	片面、両側面抉り。浮子？
102	不明	5C17	Ⅷ	23.9	1.7	1.8		スギ	錘？
103	不明	5C16	Ⅷ	24.7	2.7	1.7	板目	スギ	上部鋸歯状加工、下部切れ込み
104	不明	4B12	Ⅷy	31.7	1.4	0.8	板目	スギ	側面に刻み
105	部材	4B8	Ⅷ	123.0	3.0	3.5		スギ	天秤棒？
106	指物部材	8C24	Ⅷ	35.6	4.2	0.9	板目	スギ	小孔７ヵ所、かぎ状になる加工
107	不明	4B15	Ⅷ	17.7	1.3	0.2	板目	スギ	ヘラ？
108	栓か楔	6C12	Ⅷ	10.5	2.5	1.7	板目	ヒノキ	
109	不明	6C22	Ⅷ	17.9	2.5	2.5	柾目	サワラ	把手？木釘２ヶ所
110	把手？	2D3	Ⅷ	38.9	3.3	1.4	柾目	スギ	木釘１ヶ所
111	把手？	6B25	Ⅷ	27.8	3.1	0.8	板目	スギ	切れ込みあり
112	把手？	5C12	Ⅷ	30.5	4.4	1.7	柾目	スギ	上端抉り
113	不明（把手）	UNE-B・7C17	X	38.3	2.6	1.1	板目	スギ	
114	部材	10D4	Ⅷ	24.3	7.4	1.5	柾目	スギ	溝に孔、木釘２ヶ所
115	部材	4B18	Ⅷ	31.8	5.6	3.1	柾目	スギ	鉄釘１ヶ所刺さっている。
116	部材	2C23	Ⅷ	37.5	3.7	1.9	柾目	スギ	
117	部材	5E11	Ⅷ	58.2	2.3	1.7	柾目	スギ	ホゾ穴２ヶ所、木釘２ヶ所
118	部材	7B19	Ⅷ	21.6	1.7	1.8	柾目	スギ	上端相欠継、下端埋納もしくは三枚納差
119	部材	13D2	Ⅷ	19.1	3.3	0.8	柾目	スギ	小孔５ヶ所
120	部材	4C20	Ⅷz	20.6	2.8	1.0	柾目	スギ	木釘５ヶ所、先端仕口
121	不明	5C22	Ⅷ	19.3	1.8	0.6	柾目	スギ	木釘１ヶ所
122	楕円形板	10D4	Ⅷ	25.6	8.0	0.9	柾目	スギ	
123	不明	7D25	Ⅷ	20.2	2.4	0.9	柾目	スギ	木釘１ヶ所、側面抉りあり
124	板材	6C22	Ⅷ	28.1	7.6	0.9	柾目	スギ	小孔３ヶ所
125	板材	2D3	Ⅷ	103.5	15.2	2.0	板目	スギ	焦げあり
				84.6	13.1	1.3	板目	スギ	焦げあり
				81.8	18.3	1.6	板目	スギ	
				81.5	17.2	1.7	板目	スギ	
126	楔？	5B22	Ⅷb	15.2	4.3	4.7	柾目	スギ	中ほど抉りあり
127	部材	12D21	Ⅷ	56.2	5.1	2.0	板目	ヒノキ	表面炭化
128	不明	4C13	Ⅷy	35.9	2.4	0.7	板目	スギ	
129	部材	4B6	Ⅷ	41.0	4.2	1.2	板目	モミ属	
130	柄？	5B15	Ⅷ	38.0	2.4	1.8	板目	スギ	
131	不明	4C17	Ⅷy					スギ	黒色漆が塗布
132	不明	4B18	Ⅷb	27.5	2.0	2.0	芯持丸太	モミ属	尖部に刻みあり
133	不明	3F5	Ⅷ	8.2	1.0	0.4	柾目	スギ	
134	火櫃？	9C17	Ⅷ	32.9	31.2	9.4	芯持丸太	広葉樹	

木簡

木簡観察表の凡例

1. 表裏は特に指示の無い場合は表とする
2. 長さ、幅の（　　）は欠損があるものである
3. 上端部形状は圭頭 ／＼ 、平坦 ┌┐ 、欠けているものは欠損とした
4. 切り込みの数は対で1とした。0 ／＼ 、1 ／＼ 、2 ／＼ とした
5. 下端部の形状はⅠ ＼／ 、Ⅱ ＼／ 、Ⅲ └┘ 、欠けているものは欠損とした
6. 調整は表裏それぞれについて削りの痕が認められるものは○、ないものを×とした。
7. 墨痕は、文字が肉眼で読めるものを◎、肉眼では難しいが赤外線カメラで文字の読めるものを○、赤外線カメラでも墨痕を残すのみのものを×とした
   ほぼ◎は◎と○の中間、ほぼ○は○と×の中間とする
8. 頭部墨彩のものは、釈文欄に▲を付した

文字木簡

No.	表裏	法量（mm）			グリッド	層位	木取り	樹種	種類	上端部形状	切り込み	下端部形状	調整		墨痕	釈文	備考
		長さ	幅	厚さ									表	裏			
1	表	233	18	2	3B25	Ⅷy	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	○	「梵字（バン）　南無阿弥陀佛　南無十王」	1～11まで11点一括出土。表面の一部は墨が薄い
	裏														◎	「多宝塔〈梵字（バン）｜「是法住法位/世間相常位」〉南無地蔵大菩薩」	
2		179	21	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×？	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
3		179	17	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
4		187	17	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×？	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
5		189	17	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	不明	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
6		176	15	4			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	不明	不明	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
7		172	16	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	不明	不明	◎	「梵字（バン）南無阿弥陀佛」	上端部調整痕残る
8		173	15	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×	やや○	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
9		169	13	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
10		178	13	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×？	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	
11	表	179	15	3			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「梵字（バン）南无阿弥陀佛」	書き損じたため、「无」を小さく追記して表に書き直したと思われる
	裏														◎	「梵字（バン）南无阿	
12		261	30	3	11D20	Ⅷ	柾目		笹塔婆	圭頭	0	Ⅰ	○	○	◎	「南無阿弥陀仏」	確認12Tr出土。試掘報告の２号木簡
13		240	24	5	3B20	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅱ	○	×	やや◎	「梵字（バン）南無阿□□〔弥陀カ〕佛」	
14		300	13	3	3B25	Ⅷy	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	14～19まで６点一括出土。６点とも同一の文字内容か。下ほど厚くなり、下端は4mm
15		297	12	4			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	×	○	○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	表は調整痕を残していない
16		298	12	5			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	やや○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	下端から３～４㎝に調整の刃物痕跡残る
17		300	13	4			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×	○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	
18		(254)	14	3			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	やや○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	
19		(259)	18	2			柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	○	「梵字（バン）南〔無阿弥陀カ〕佛」	
20		189	15	2	4C14	Ⅷy	柾目	サワラ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「梵字（バン）南無阿弥陀佛　」	上端中央まで割れ。割れ方は自然か
21		(204)	14	3	3B20	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	○	「梵字（バン）　南無阿弥陀佛」	
22		(242)	13	3	4B23	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	欠損	欠損	Ⅲ	○	○	◎	×梵字（バン）　弥陀佛	上端欠損
23		(127)	13	2	8C8	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	やや○	「南［　　］　×	
24		(153)	34	3	4B3	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	やや◎	「南無阿□〔弥カ〕　×	右側の一部も欠損か？
25	表	153	14	4	7C14	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	×	○	「南無阿弥陀佛」	裏面の左側は材が一段高く残る
	裏														○	「南無阿弥陀佛」	
26		270	15	4	5C12	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	1	Ⅲ	○	×	◎	「梵字（バン）　梵字（バン）」	
27		(289)	12	5	4C1	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	×	○	○	「梵字（バン）梵字（バン）」	
28		301	13	2	4C10	Ⅷy	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「梵字（バン）梵字（バン）　十二」	下端部自然折れ。左側が厚く、右側が薄くなる

No.	表裏	法量（mm）			グリッド	層位	木取り	樹種	種類	上端部形状	切り込み	下端部形状	調整		墨痕	釈文	備考
		長さ	幅	厚さ									表	裏			
29	表	(126)	23	3	4D13	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	2	欠損	○	○	◎	「＞▲南無×	頭部墨彩。「南」は文字が浮きだっている
	裏														◎	「元應二年□□〔十月カ〕	
30		(198)	30	2	6C11	Ⅷ	柾目	スギ	不明	欠損	0	Ⅱ	○	○	やや○	×　□□」	
31		308	27	3	4B21	Ⅷy	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅱ	○	○	◎	「▲　　」	頭部墨彩
32		346	41	5	4C24	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	2	Ⅱ	○	○	○	「＞▲　　」	頭部墨彩。上端一部欠損
33		365	42	4	4B1	Ⅷ	柾目	サワラ	笹塔婆	圭頭	2	Ⅱ	○	○	◎	「＞▲　　」	頭部墨彩。表裏とも黒く塗る
34		(174)	27	3	2D19	Ⅷ	板目	スギ	笹塔婆	圭頭	1	欠損	○	○	やや◎	「＞▲　　×	頭部墨彩。下端は自然折れ
35		(124)	38	4	4C19	Ⅷy	柾目	サワラ	笹塔婆	圭頭	2	欠損	○	○	◎	「＞▲　　×	頭部墨彩。中央で割れ、欠け。下端自然欠損。
36		307	41	3	4B15	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	2	Ⅰ	○	×	○	「＞▲南無大日如来　」	頭部墨彩。左側が厚く、右側が薄い
37		(290)	31	4	4C15	Ⅷ	板目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	×	○	◎	「▲南無大日如来」	頭部墨彩。「南無大日如来」の一部は文字が他より浮き立っている
38		(254)	35	1	4C8	Ⅷ	柾目		笹塔婆	圭頭	2	欠損	○	×	◎	「梵字（バン）南無大日如来」	確認 60Tr 出土。試掘報告の４号木簡
39		(98)	23	3	4B7	Ⅷb	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	欠損	○	○	◎	「南無大日　×	
40		(318)	31	3	6C22	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	2	欠損	○	○	◎	「＞梵字（バン）　南無大日如来　　×	下端自然の折れ
41		(218)	33	4	4C19	Ⅷy	柾目	サワラ	笹塔婆	欠損	欠損	その他	○	○	◎	×南無大日如来　　×	上端自然欠損か？下端に刃物痕跡あり、尖らせている。右側一部欠損
42		262	33	6	SX01・4C2	9	板目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅱ	○	×	◎	「梵字（バン）南無大日如来」	
43		280	25	4	3C10	Ⅷy	板目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅱ	○	○	◎	「梵字（バン）南無大日如来」	
44	表	184	24	3	4B6	Ⅷy	柾目	スギ	呪符	圭頭	0	Ⅱ	○	○	◎	「（符籙カ）　急々如律令」	裏面の文字は横位に記されている可能性もある
	裏														○	「　□□　□　」	
45	表	(152)	13	1	11D20	Ⅷ	柾目		柿経	圭頭	3	欠損	○	○	◎	「軽於汝等汝等皆黨作佛故四衆之中」	確認 12Tr 出土。試掘報告の３号木簡
	裏														◎	「瞋恚心不淨惡口罵詈言是無智比丘」	
46		(92)	13	2	4B12	Ⅷy	柾目	スギ	柿経	圭頭	0	欠損	○	○	○	「又諸［　　］受化□〔易カ〕×	墨は浮き上がる
47		92	11	2	2B1	Ⅷ	柾目	スギ	柿経？	圭頭	0	欠損	○	○	×	「　［　　］住者有也　×	柿経か。下端に行くほど厚くなる。下端は刃物による切断痕跡あり
48		(104)	41	3	4B10	Ⅷ	柾目	スギ	不明	圭頭	0	欠損	○	○	×	「□　　×	墨痕はあるが薄くて判読できず。文字ではなく符籙・記号と思われる
49		290	36	7	4B3	Ⅷ	柾目	スギ	呪符	平坦	0	Ⅱ	○	○	◎	「（符籙）　急々如律令　□□〔門住カ〕」	板材製作時のものと思われる調整痕あり
50		255	27	3	4C12	Ⅷc	柾目	スギ	呪符	平坦	0	Ⅱ	○	○	◎	「（符籙）急々如律令　□」	板材か部材を転用。厚さが一定でなく、下端に行くほど厚くなる
51		256	28	4	4B1	Ⅷ	柾目	スギ	呪符	平坦	0	Ⅱ	○	○	やや◎	「（符籙）　急々如律令」	上端から約 7cm のところで斜めに自然に屈折。下端の左右両方面取り
52		240	25	4	4B9	Ⅷ	柾目	スギ	呪符	平坦	0	Ⅰ	○	×	◎	「梵字（バン）　（符籙）　急々如律令　出所」	上端から７㎝のところで軽く屈折
53	表	257	29	4	4C15	Ⅷ	柾目	スギ	呪符	圭頭	0	Ⅰ	○	○	◎	「梵字（ア）　急々如律令」	
	裏														◎	「　　にし」	
54		158	26	4	3B4	Ⅷy	柾目	サワラ	呪符	圭頭	0	Ⅰ	○	×	◎	「（符籙）　急々如律令□」	
55	表	97	47	4	2B20	Ⅷc	柾目	スギ	呪符	平坦	0	Ⅲ	○	○	やや◎	「○（符籙）」	符籙のみ・文字なし。下端は完形。墨書後開孔と思われる。縦割は板目に沿って自然に３つに割れ、右も上端より７㎝くらいの所から斜めに刃物で切り取られている
	裏														○	「○　☆（五芒星）」	
56		(181)	30	6	3C22	Ⅷ	板目～柾目	スギ	呪符	平坦	0	欠損	○	○	○		文字はないが、まじないの人相（人面）や☆印が記される。上端部右端は面取りを行っている
57		282	27	2	8C4	Ⅷ	柾目		笹塔婆	圭頭	0	Ⅱ	不明	×	やや○	「梵字（バン）南無□□□□」	確認 9Tr 出土。試掘報告の１号木簡
58		311	29	3	6C11	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆？	圭頭	0	Ⅰ	○	○	×	「梵字（バン）　南［　　］」	
59		284	26	3	5E8	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	その他	○	○	○	「梵字（バン）　□□〔南無カ〕」	上端は上から 7.5cm のところで折れ曲がり。右端は垂直に削り、左端は両側から刃で尖らしてある
60	表	(262)	25	5	5C16	Ⅷ	板目	スギ	笹塔婆？	欠損	欠損	欠損	○	○	やや○	×□□□□□　」	木簡中央の割れは人為的ではない。下端は斜めに成形。表裏とも五字真言カ
	裏														やや○	×□□□□」	
61		313	29	3	10D17	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	◎	「□□□□」	文字記されているが不明（五字真言カ）。右側面は欠損
62		307	35	4	2D3	Ⅷ	柾目	スギ	呪符？	圭頭	2	Ⅰ	○	○	×	「＞　　□　　」	墨痕は確認できるが、薄く判読できず。上端から 9cm で屈折。縦の裂けは人為的ではない
63		274	10	1	4B2	Ⅷ	柾目	スギ	笹塔婆	圭頭	0	Ⅲ	○	○	×	「［　　］」	墨痕は確認できるが薄く判読できず。上端 3cm が非常に薄い。下端完形

No.	表裏	法量（mm）			グリッド	層位	木取り	樹種	種類	上端部形状	切り込み	下端部形状	調整		墨痕	釈文	備考
		長さ	幅	厚さ									表	裏			
64	表	（22）	（178）	5	4D3	Ⅷ	柾目	スギ	不明	欠損	0	その他	○	○	やや◎	「　　□□　×	底板等を転用。横長のため上端部、下端部の判断は難しい。表面は調整痕跡、欠損あり。右側の折れ不明、左側完形
	裏														やや◎	「□□□□□□〔め万カ〕×	
65	表	（112）	（8）	1	4B10	Ⅷ	柾目	スギ	不明	欠損	欠損	Ⅲ	○	○	◎	「□□□□□□□□□　」	仮名が縦書きで記されている。両面とも文字が半分しか残ってなく判読は難しい
	裏														◎	「□□□□□□」	
66		363	44	3	3B20	Ⅷy	柾目	スギ	柿経	圭頭	2	Ⅱ	○	○	やや○	「＞▲　　」	頭部黒彩、下端12㎝中央縦割れ

墨痕のない木簡

No.	法量（mm）			グリッド	層位	木取り	樹種	上端部形状	切り込み	下端部形状	調整		
	長さ	幅	厚さ								表	裏	
67	333	31	4	6C21	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	2	Ⅰ	○	○	表側半分一部面取り。下から8cmに調整の刃物痕跡
68	306	28	3	4B16	Ⅷ	板目	スギ	圭頭	2	Ⅰ	○	○	下端から5cm程度が波状に湾曲
69	298	27	3	4C12	Ⅷy	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅰ	○	×	上端から8cmで折れ曲がり。下端完形
70	322	21	3	5D11	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅰ	○	×	表に調整痕跡残す。右側面中央付近一部欠損
71	309	25	4	4C22	Ⅷ	板目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	
72	355	29	4	4B11	Ⅷy	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	下端折れ自然。木簡全体が波状に湾曲
73	（108）	29	3	2D20	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	2	欠損	○	×	切り込みの間の両側面は欠損
74	（97）	13	2	2C23	Ⅷ	柾目	サワラ	圭頭	0	欠損	○	○	
75	（101）	21	2	5D15	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	欠損	○	○	
76	（157）	23	5	3C13	Ⅷc	板目	スギ	圭頭	0	欠損	×	×	上端部付近で屈折
77	173	38	5	4B3	Ⅷ	板目	スギ	平坦	1	その他	○	○	下端は丸みを帯びた方形。荷札状
78	（147）	24	3	8D3	Ⅷ	板目	スギ	欠損	欠損	Ⅲ	×	○	
79	320	23	3	5B16	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	
80	286	50	5	4B10	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	×	転用後、両側下半分を削り、成形
81	306	38	2	2B9	Ⅷb	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	
82	（278）	30	4	SX02・3B22	6	板目	スギ	圭頭	0	Ⅰ	○	○	上端から10cmで屈折。下端は自然による折れか？
83	（284）	（18）	2	4B7	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	欠損	○	○	下端は自然による欠損。
84	（264）	20	4	5E21	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	欠損	○	○	右側下半分面取り
85	220	25	3	3F5	Ⅷ	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	
86	（110）	35	3	4B3	Ⅷ	柾目	スギ	平坦	0	欠損	○	×	左下端部は削りによる成形を残す。他下端部の欠損は自然
87	（149）	16	3	4C22	Ⅷc	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅲ	○	○	上端刃物切断か？木簡かどうかは不明
88	148	22	1	6E3	Ⅷ	柾目	サワラ	平坦	0	Ⅲ	○	○	完形。木簡かどうかは不明
89	（127）	16	2	10E13	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	欠損	○	○	両端部欠損は自然によるものか？木簡かどうか不明
90	（172）	（15）	3	6E8	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	欠損	○	○	木簡かどうかは不明
91	（183）	24	4	5B19	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	欠損	○	○	左右面取り
92	（66）	18	3	4B25	Ⅷc	板目	スギ	欠損	欠損	欠損	○	×	上端部は自然による欠損。下端は刃物による切断
93	272	27	4	3C8	Ⅷy	柾目	スギ	円頭	0	Ⅱ	○	×	
94	178	23	5	4B2	Ⅷy	柾目	スギ	圭頭	0	Ⅱ	○	○	
95	286	60	5	2D10	Ⅷ	柾目	スギ	平坦	0	Ⅰ	○	○	完形
96	（299）	53	5	8C3	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅰ	○	○	
97	（273）	40	6	5C14	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅱ	○	×	上端部刃物による痕跡あり
98	333	（24）	4	9C16	Ⅷ	柾目	スギ	平坦	0	Ⅲ	○	×	
99	（333）	（23）	4	3A24	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	0	欠損	○	○	
100	（315）	37	3	5C21	Ⅷ	柾目	スギ	円頭	0	欠損	○	×	裏には調整痕残る
101	（163）	32	2	4B3	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅱ	○	×	下端から7cmで屈折
102	（114）	24	3	6C12	Ⅷ	柾目	サワラ	欠損	欠損	欠損	○	○	
103	（248）	35	3	4B4	Ⅷy	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅱ	○	×	上端部の欠損は全て刃物による痕跡あり
104	（100）	12	2	4B24	Ⅷ	柾目	スギ	平坦	0	欠損	○	○	
105	（141）	（27）	3	3B12	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	欠損	×	○	上端部水平で完形。下端部自然欠損？木簡かどうかは不明
106	（246）	11	5	9E21	Ⅷ	柾目	スギ	欠損	欠損	Ⅱ	○	○	図版の掲載はない
107	（283）	25	8	9E9	Ⅷ	板目	スギ	欠損	0	Ⅱ	×	×	図版の掲載はない
108	（99）	11	4	4C22	Ⅷ	板目	スギ	欠損	欠損	欠損	―	―	図版の掲載はない

図　　版

凡　例

1　遺構断面図でⅠ、Ⅱのローマ数字は基本土層の層位に対応し、1、2のアラビア数字は各遺構の覆土層位を示す。

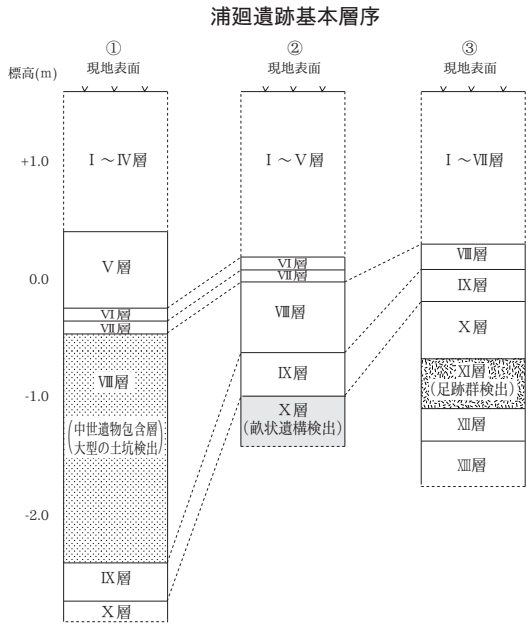
2　木製品の木目は、木取部位表示を目的としているため、年輪幅は、実際を示していない。

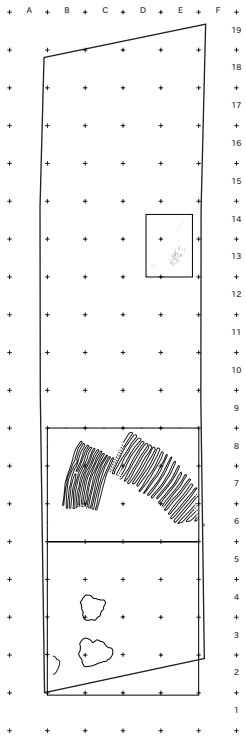
3　漆器については、面的に赤色漆が施されているものは　のスクリーントーンで示した。

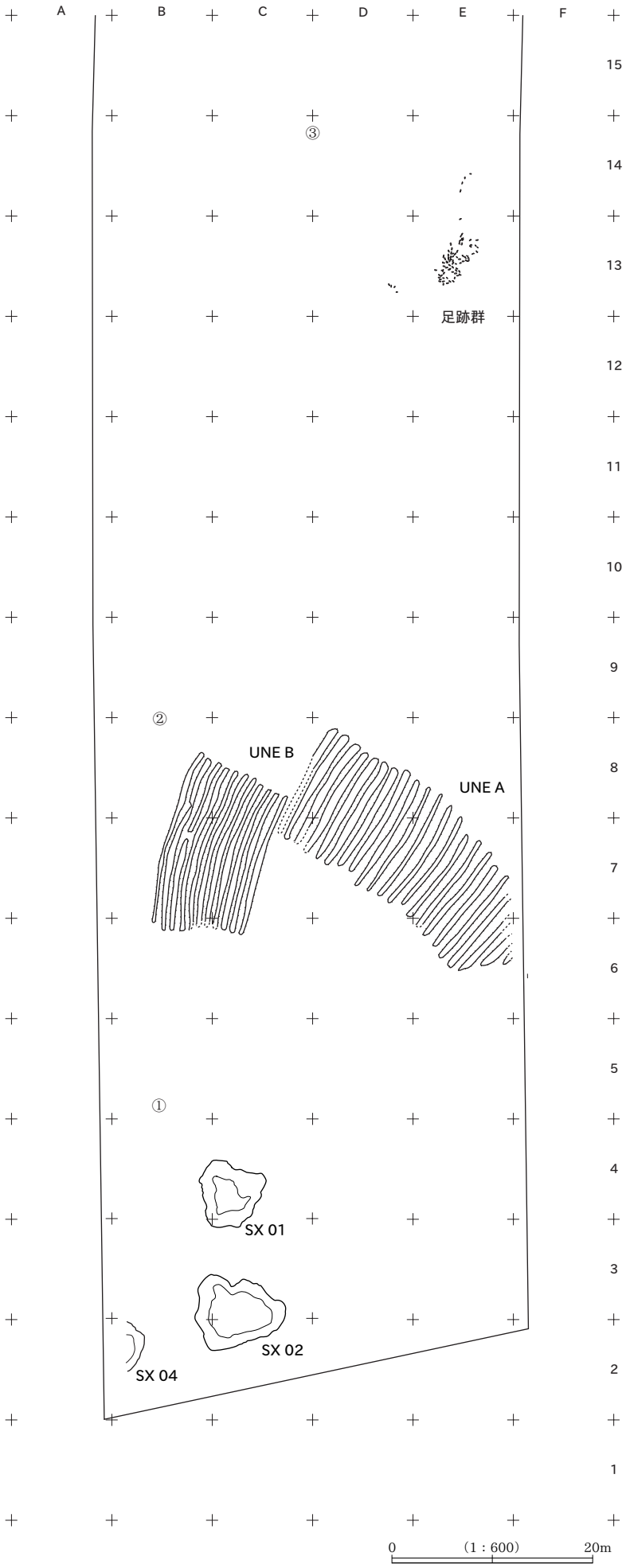
4　木製品は、表面にスス・コゲがあるものは　のスクリーントーンで示した。また、漆が付着している部分は塗りつぶした。

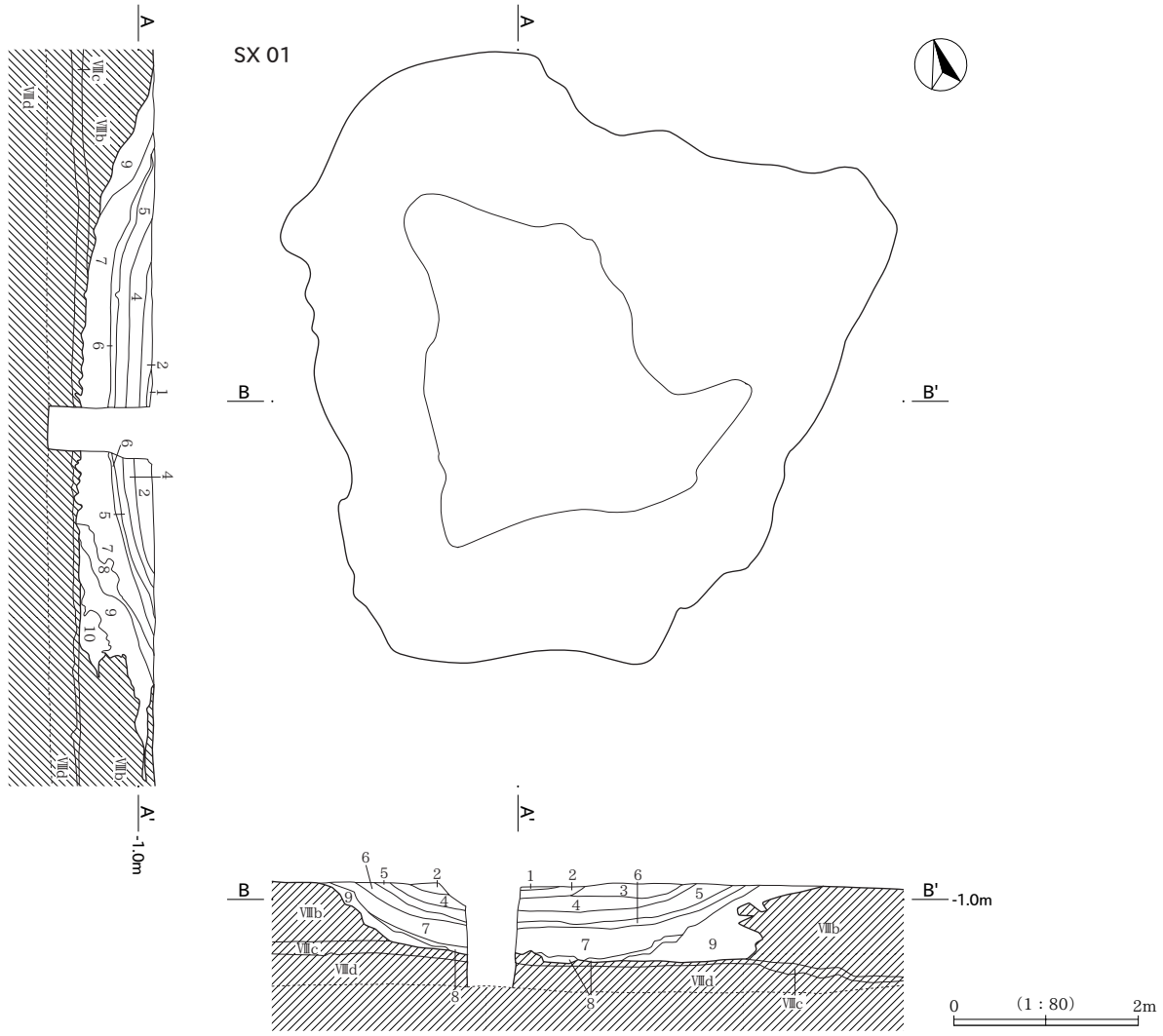
5 木簡で頭部が墨彩されている部分は、　のスクリーントーンで示した。

6 遺物写真図版の縮尺は、実測図図版と同一である。


浦廻遺跡基本層序
①
現地表面
②
現地表面
③
現地表面
標高(m)
+1.0
0.0
-1.0
-2.0
Ⅰ～Ⅳ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層
Ⅷ層
(中世遺物包含層
大型の土坑検出)
Ⅸ層
Ⅹ層
Ⅰ～Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層
Ⅷ層
Ⅸ層
Ⅹ層
(畝状遺構検出)
Ⅰ～Ⅶ層
Ⅷ層
Ⅸ層
Ⅹ層
Ⅺ層
(足跡群検出)
Ⅻ層
ⅩⅢ層

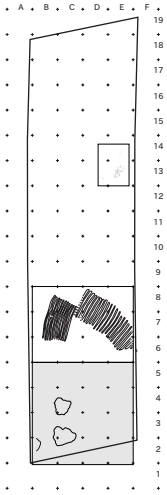


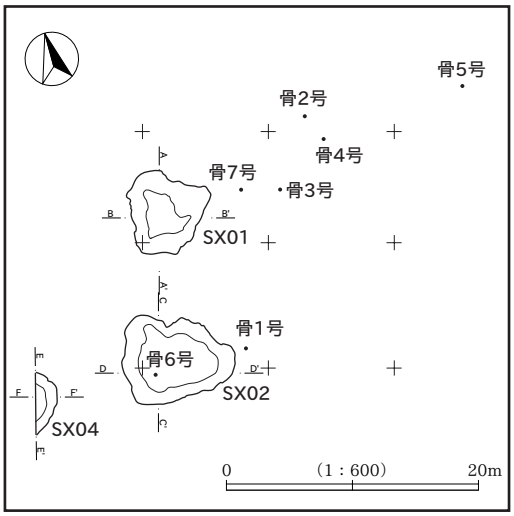

A
B
C
D
E
F
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
③
足跡群
②
UNE B
UNE A
①
SX 01
SX 02
SX 04
0
(1：600)
20m

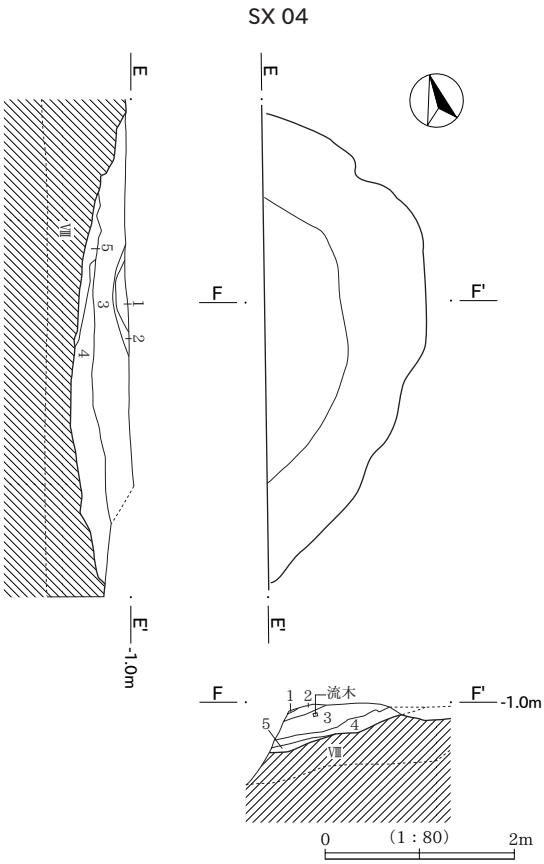


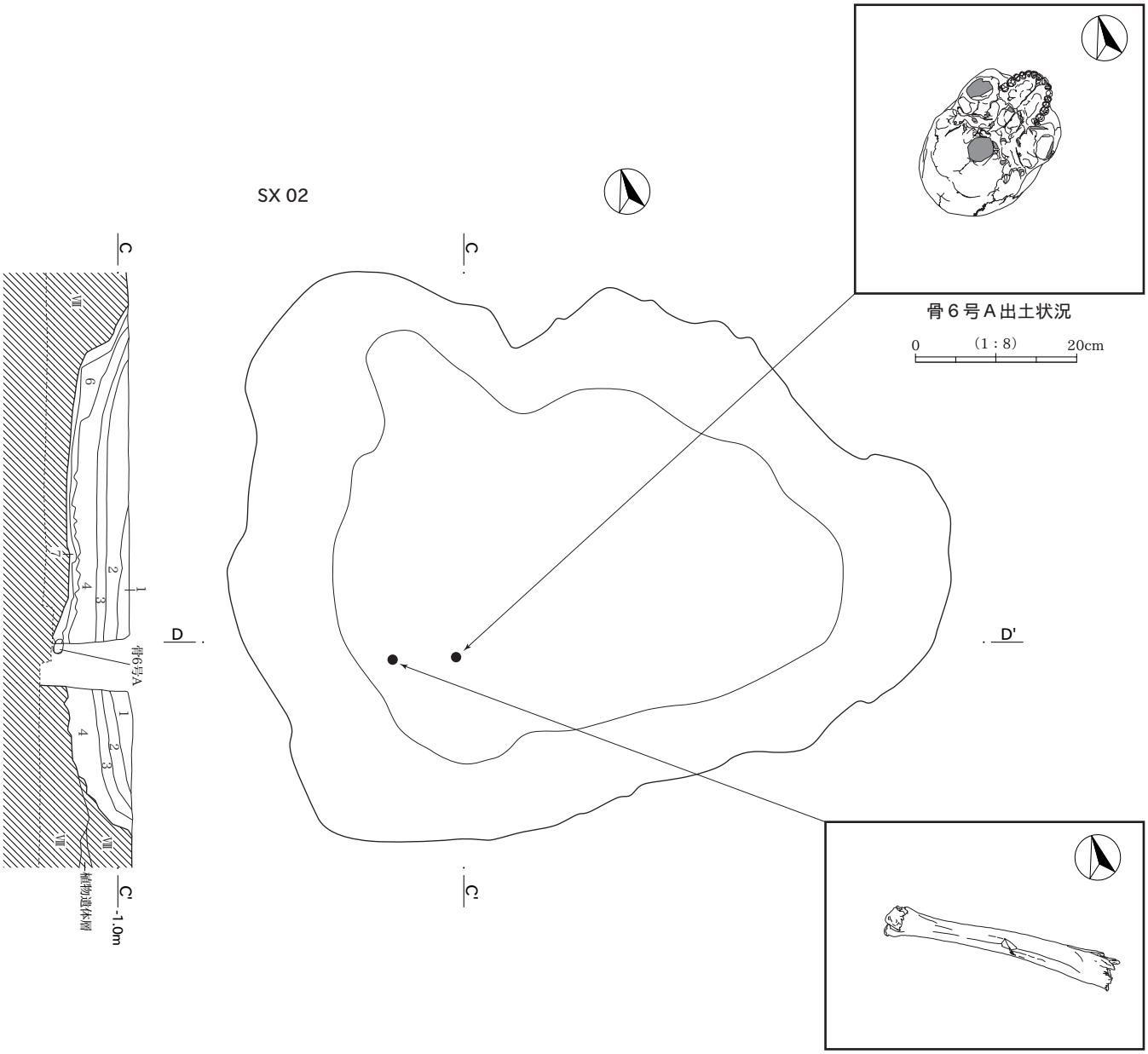
SX01
1　オリーブ褐色細粒砂
2　オリーブ褐色細粒砂と細かな植物遺体がラミナをなす
3　オリーブ褐色～黄褐色砂と細かな植物遺体が斜交層理をなす
4　オリーブ褐色～黄褐色砂と細かな植物遺体がラミナをなす
5　灰色細粒砂とオリーブ褐色～黄褐色細粒砂がラミナをなす
6　灰色シルト
7　灰色～オリーブ黒色粘土が波打ちマーブル模様を呈している。箸を出土
8　オリーブ黒色粘質に黄褐色砂が不規則に含まれる
9　オリーブ褐色～黄褐色砂がラミナをなし、オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
　茎や枝等の植物遺体を多く含む。木簡（42）を出土
10 褐色～オリーブ褐色粗粒砂。茎状の植物遺体を多く含む

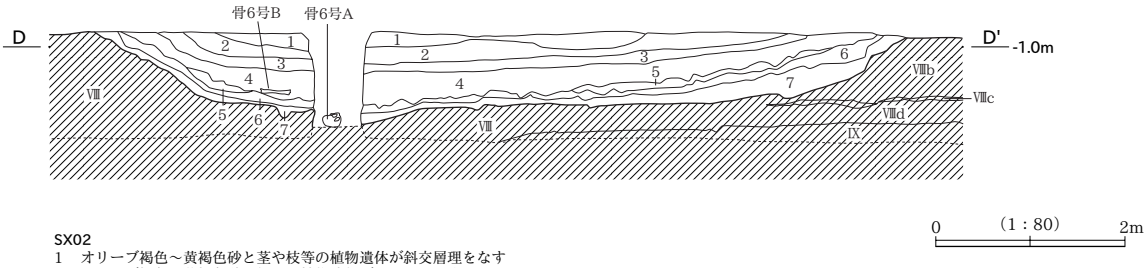
SX04
1　オリーブ褐色砂と褐色植物遺体が斜交層理をなす
2　オリーブ褐色砂と灰色砂、細かい植物遺体がラミナをなす
3　灰色細粒砂
4　にぶい黄褐色粗粒砂にオリーブ黒色粘質土がブロック状に含まれる
5　にぶい黄褐色砂に灰色砂がレンズ状に入っている



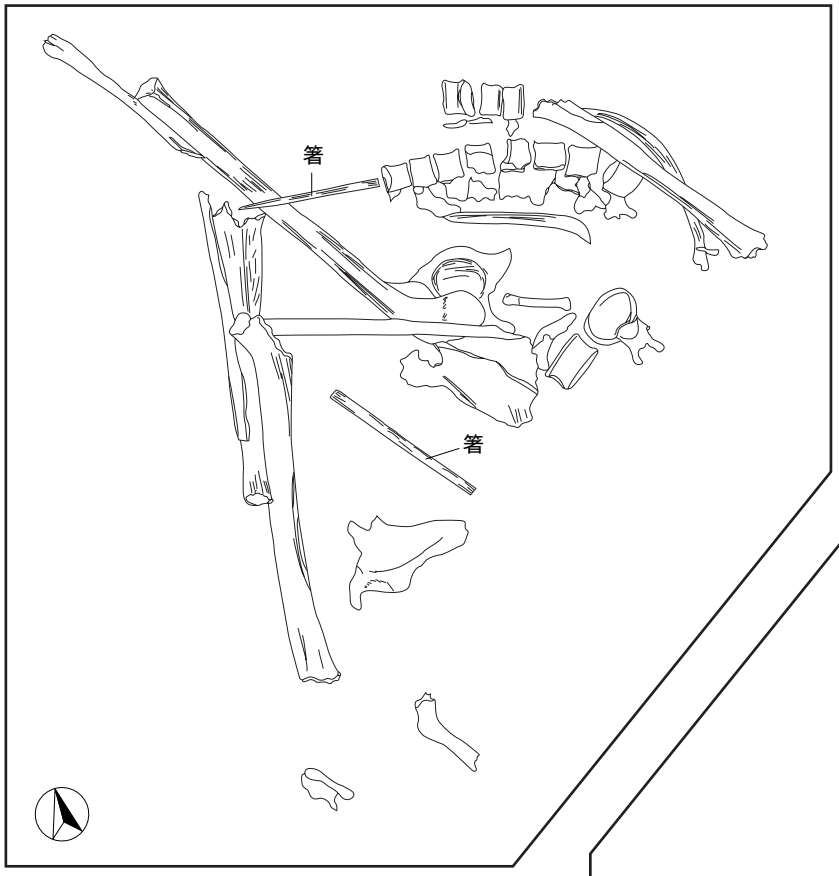






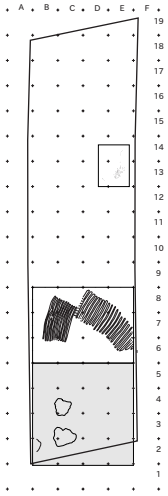


SX02
1　オリーブ褐色～黄褐色砂と茎や枝等の植物遺体が斜交層理をなす
2　オリーブ褐色～黄褐色砂と細かな植物遺体がラミナをなす
3　オリーブ黒色シルトと細粒砂の互層
4　灰色～オリーブ黒色粘土が波打ちマーブル模様を呈している。木製品を出土
5　灰色～黒色粘土が波打ったように互いに絡まり合っている。茎や枝等の植物遺体を多く含む
6　オリーブ黒色砂とシルトを中心に黄褐色砂が不規則に乱れて混入している。木製品（61）・木簡（82）・人骨（骨6号B）を出土
7　灰色～黄褐色砂がラミナなをなす。人頭骨（骨6号A）を出土



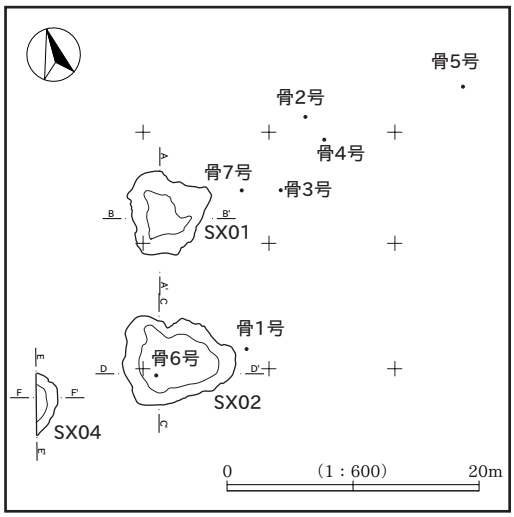
▲骨１号出土状況

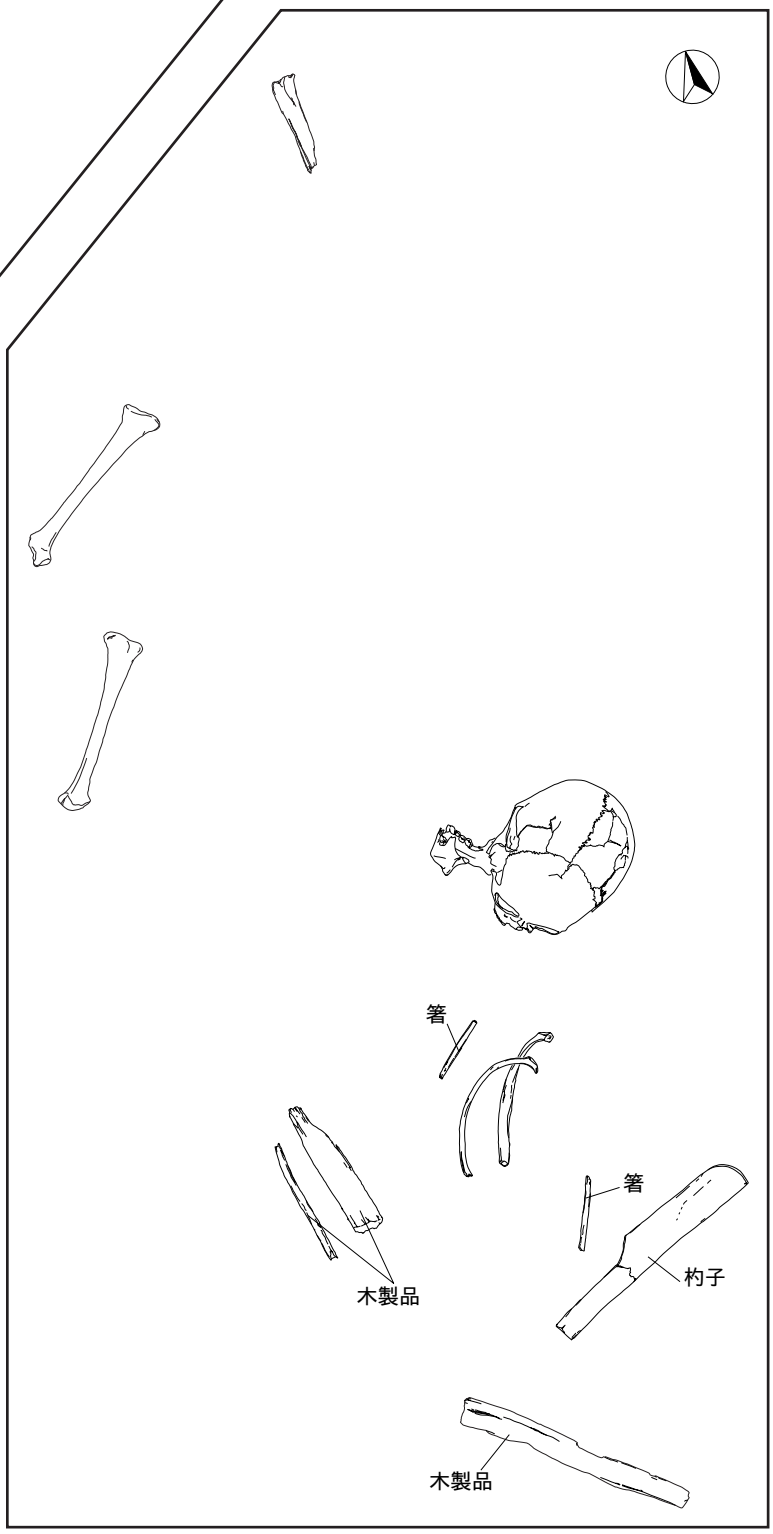
0　（1：8）　20cm

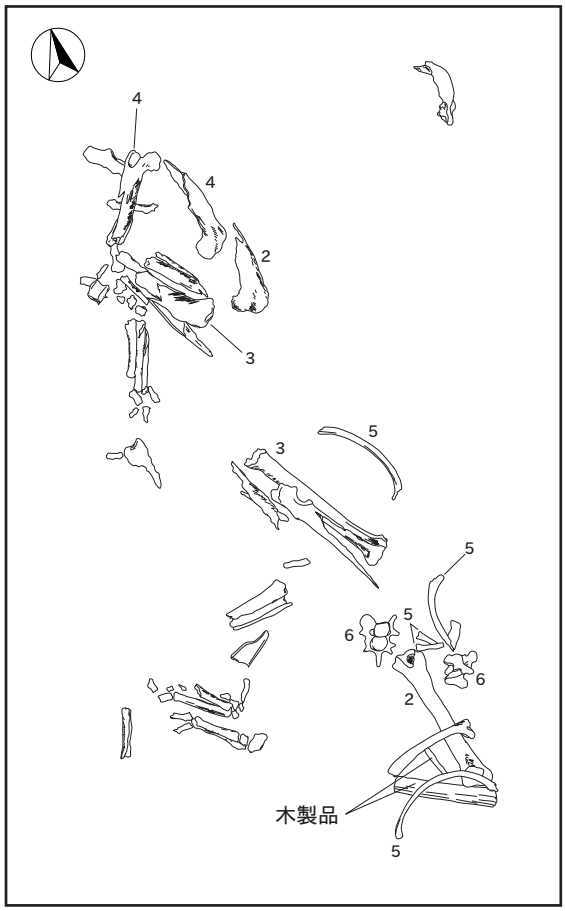


骨５号出土状況 ▶

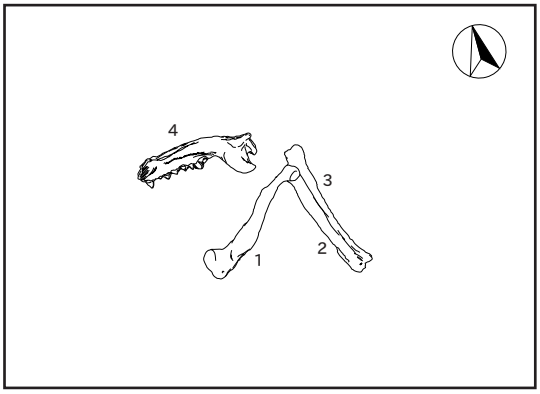
0　（1：8）　20cm



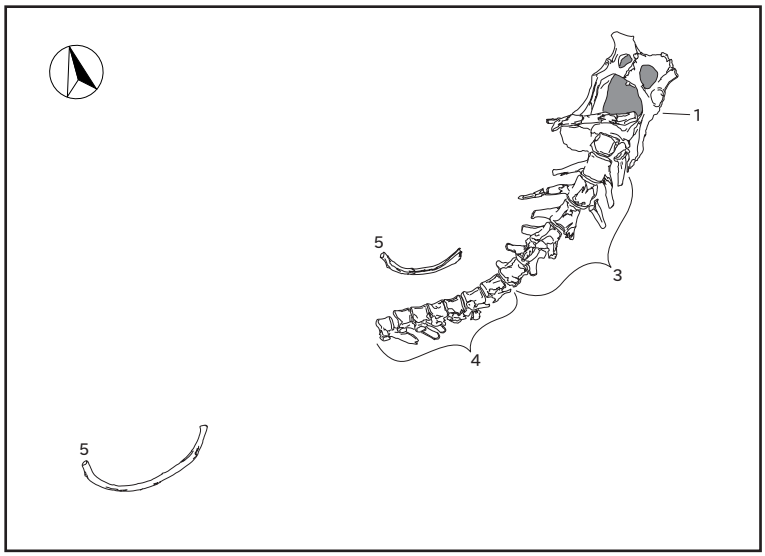




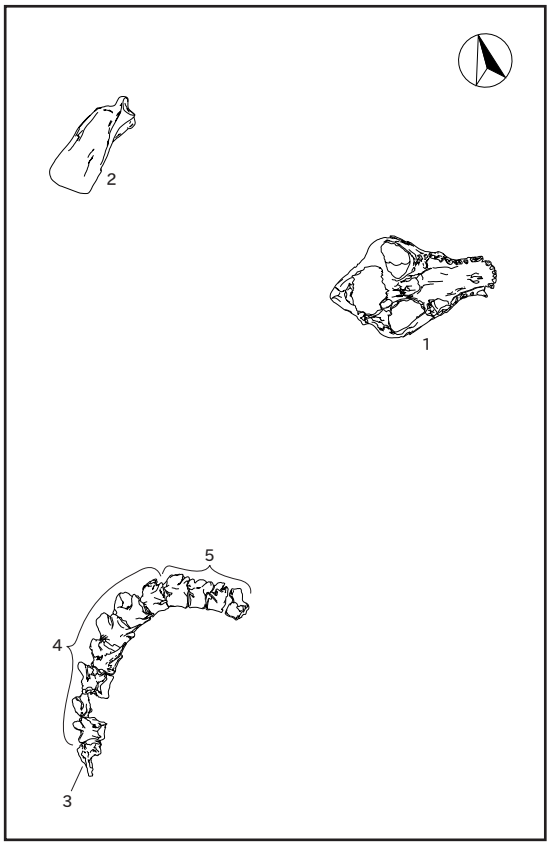
骨２号出土状況



骨４号出土状況



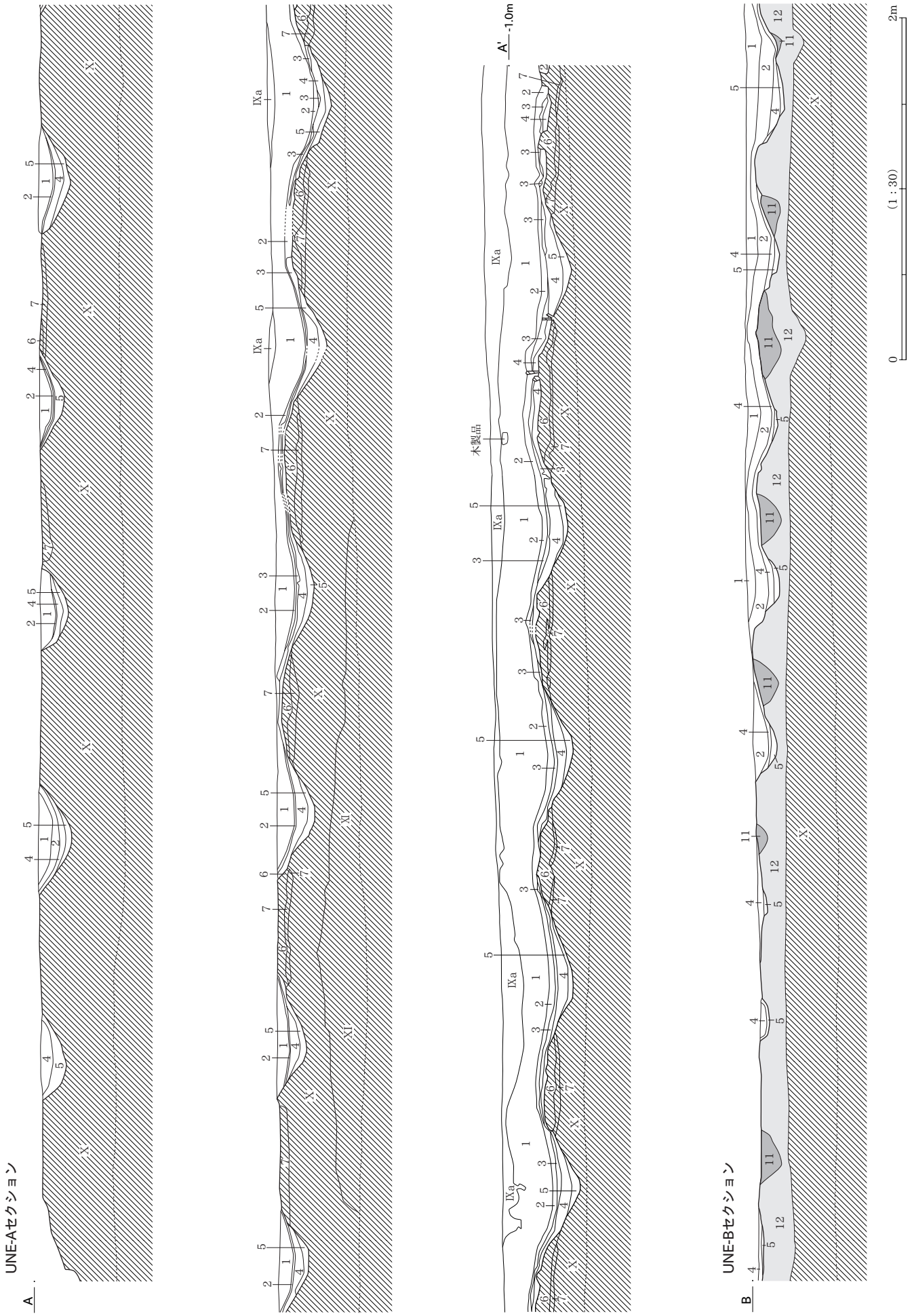
骨７号出土状況

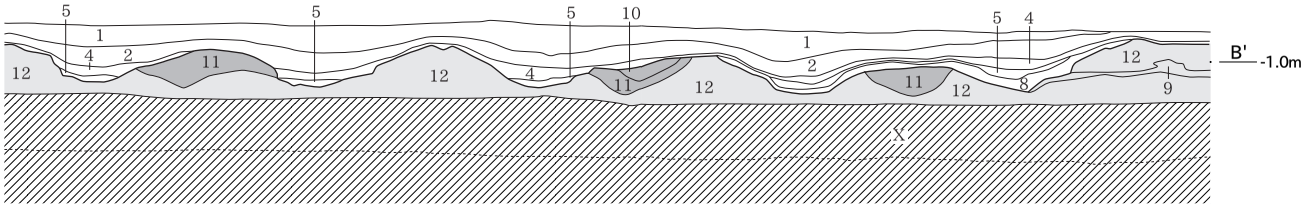


骨３号出土状況

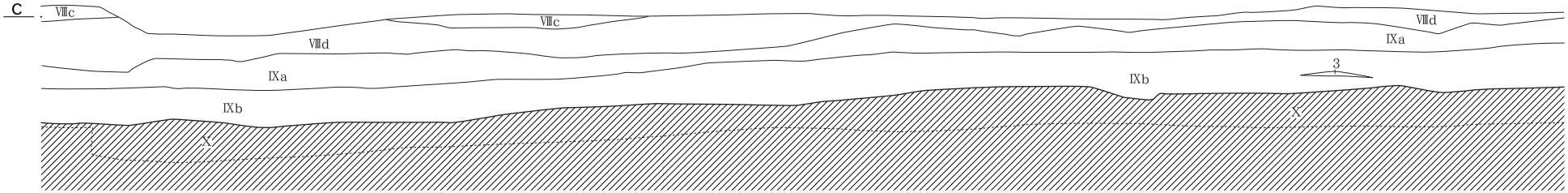
0　(1：8)　20cm

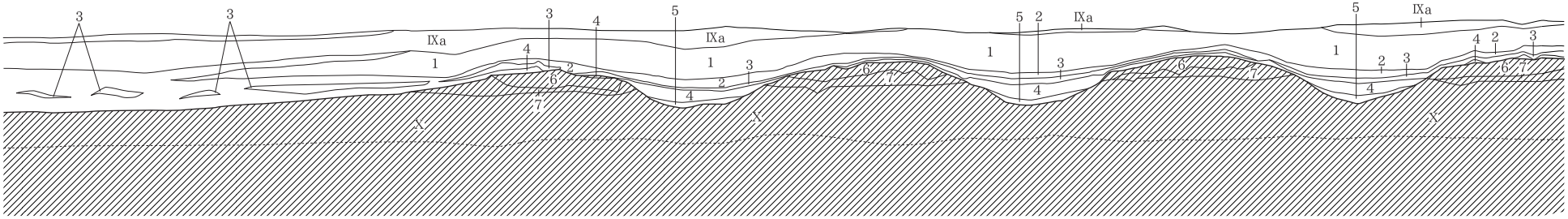
6
7
8
B
C
D
E
UNE-B
UNE-A
A
B
C
0
(1 : 200)
10m

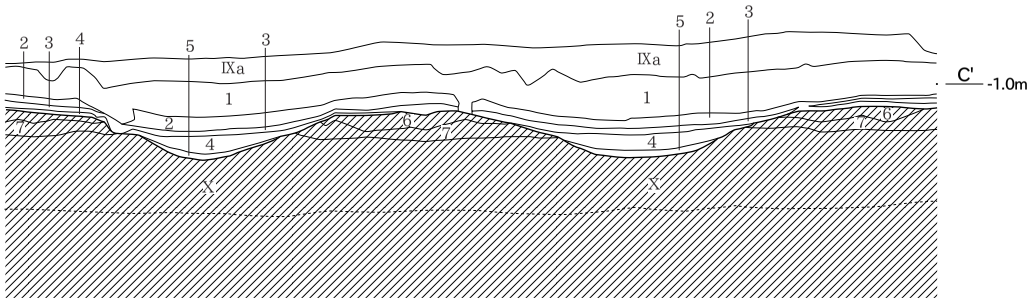

UNE-Aセクション
A
A'
-1.0m
IXa
木製品
UNE-Bセクション
B
0
(1 : 30)
2m



UNE-Cセクション





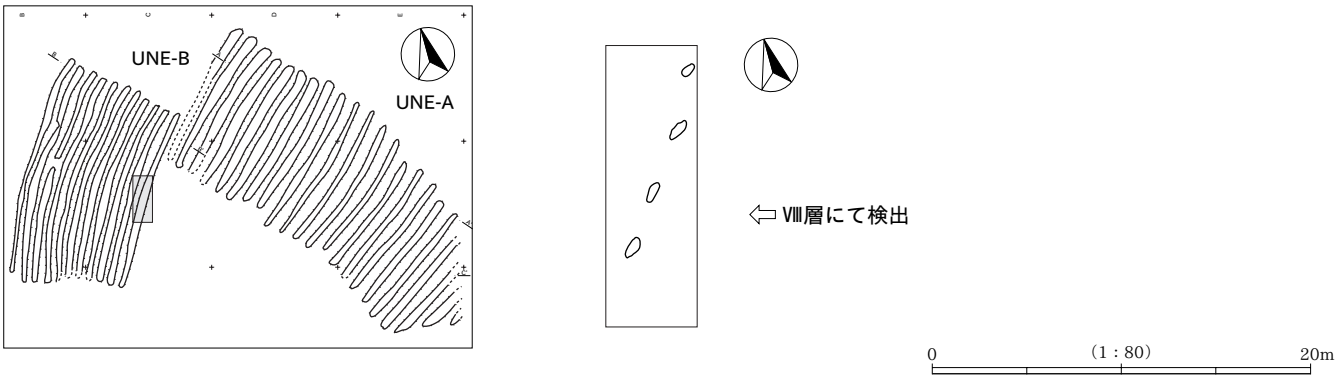


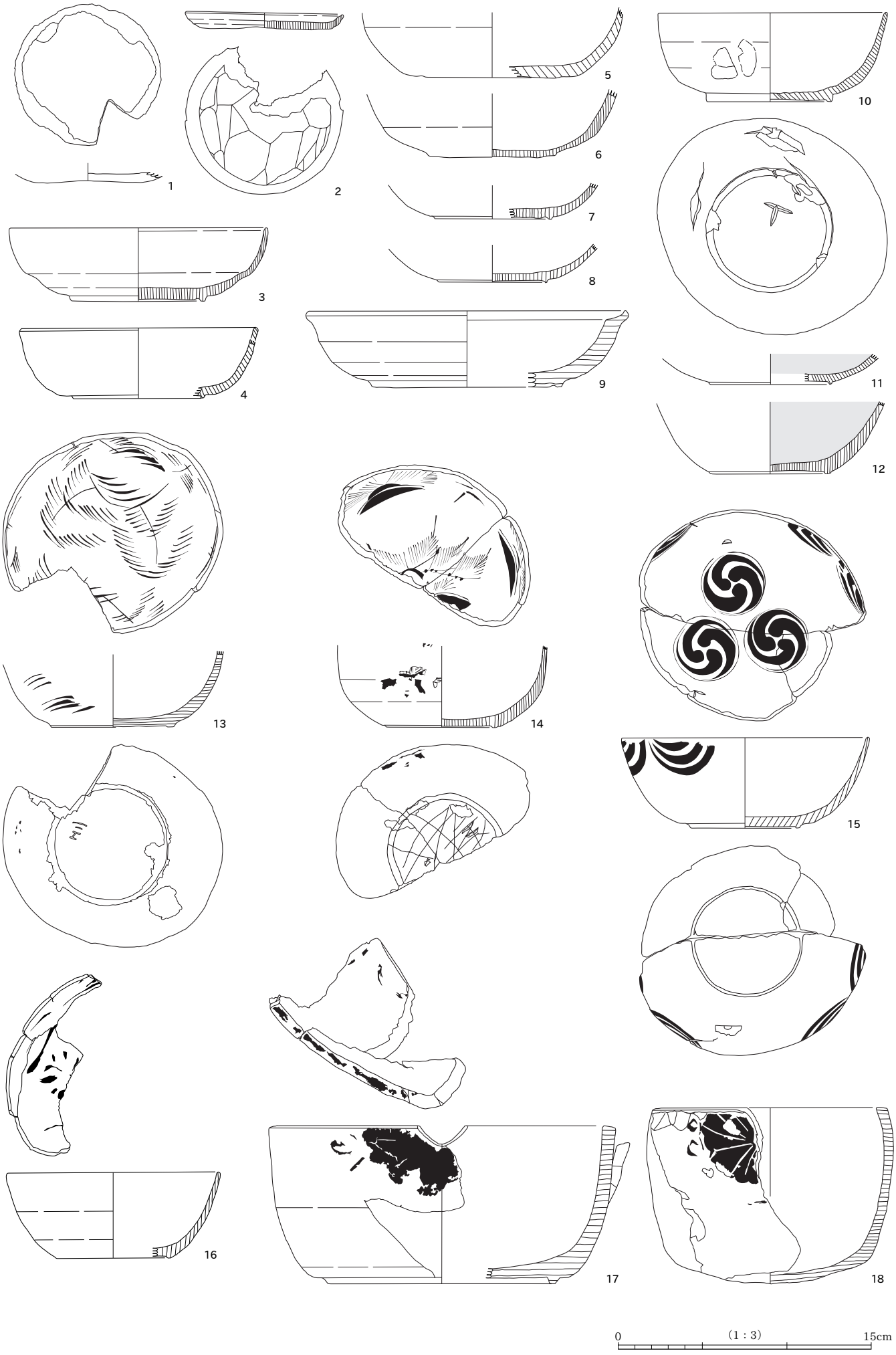
畝状遺構

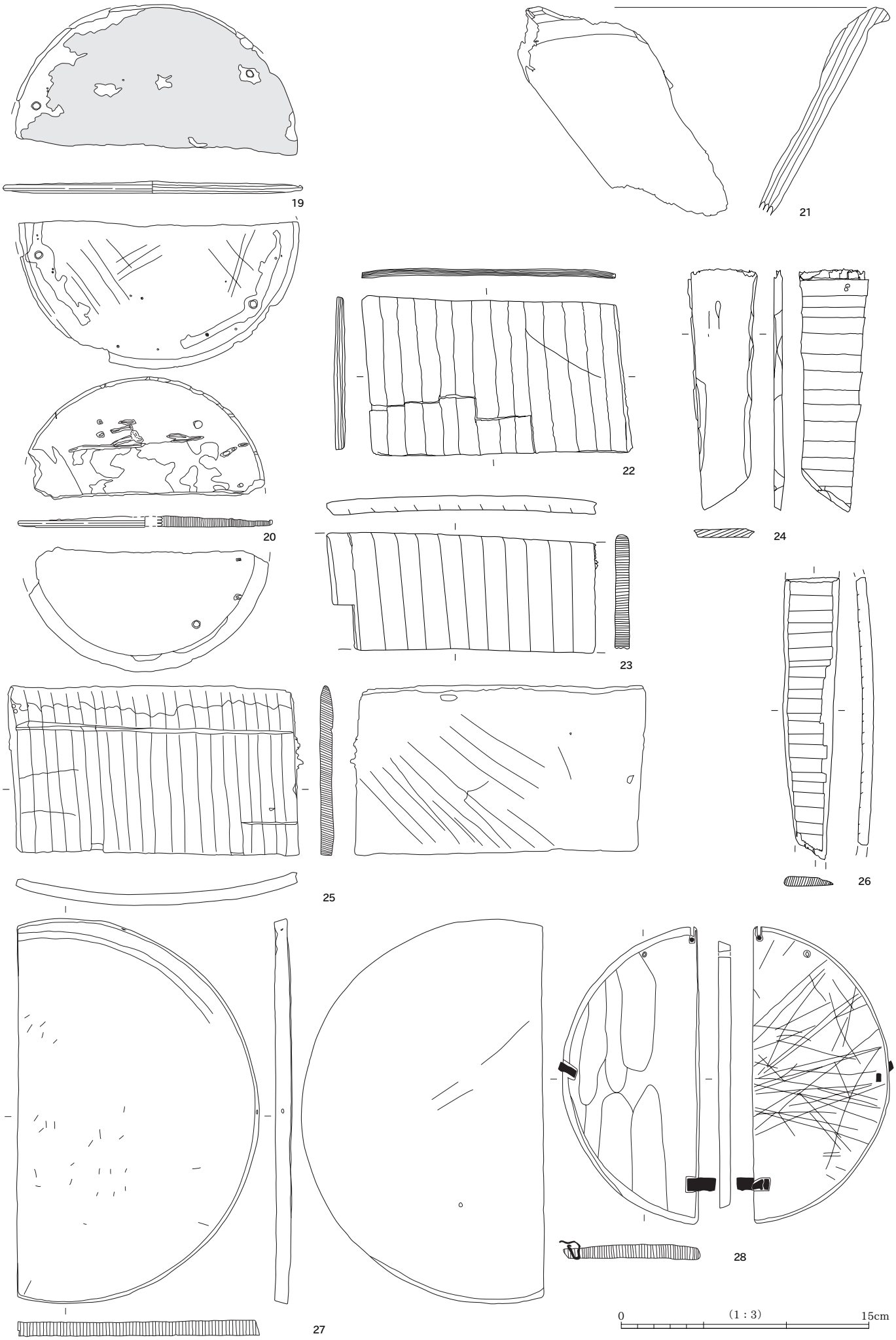
1　黄褐色～オリーブ褐色細粒砂と灰オリーブ色シルトと細かな植物遺体がラミナをなす
2　灰色シルトと細かな植物遺体がラミナをなす
3　黄褐色細粒砂に細かな植物遺体がラミナをなす
4　オリーブ黒色粘質土。畝状遺構凹部にあり、層がとぎれている
5　オリーブ黒色粘質土。４よりやや明るい。畝状遺構凹部の最下層にあたり、凹部にのみ存在する
6　黄褐色砂。川砂のように淘汰がよい。畝状遺構の凸部にあたる
7　暗オリーブ褐色粘質土に黒褐色植物遺体が混じる。薄くとぎれがちである
8　黄褐色細粒砂
9　灰オリーブ細粒砂。植物遺体を多く含む
10　褐色～灰オリーブ色細粒砂が乱れて混入している
11　褐色～灰オリーブ色細粒砂に細粒植物遺体と黄色砂をラミナ状に含む
12　褐色～灰オリーブ色細粒砂と細粒植物遺体が乱れて混入している

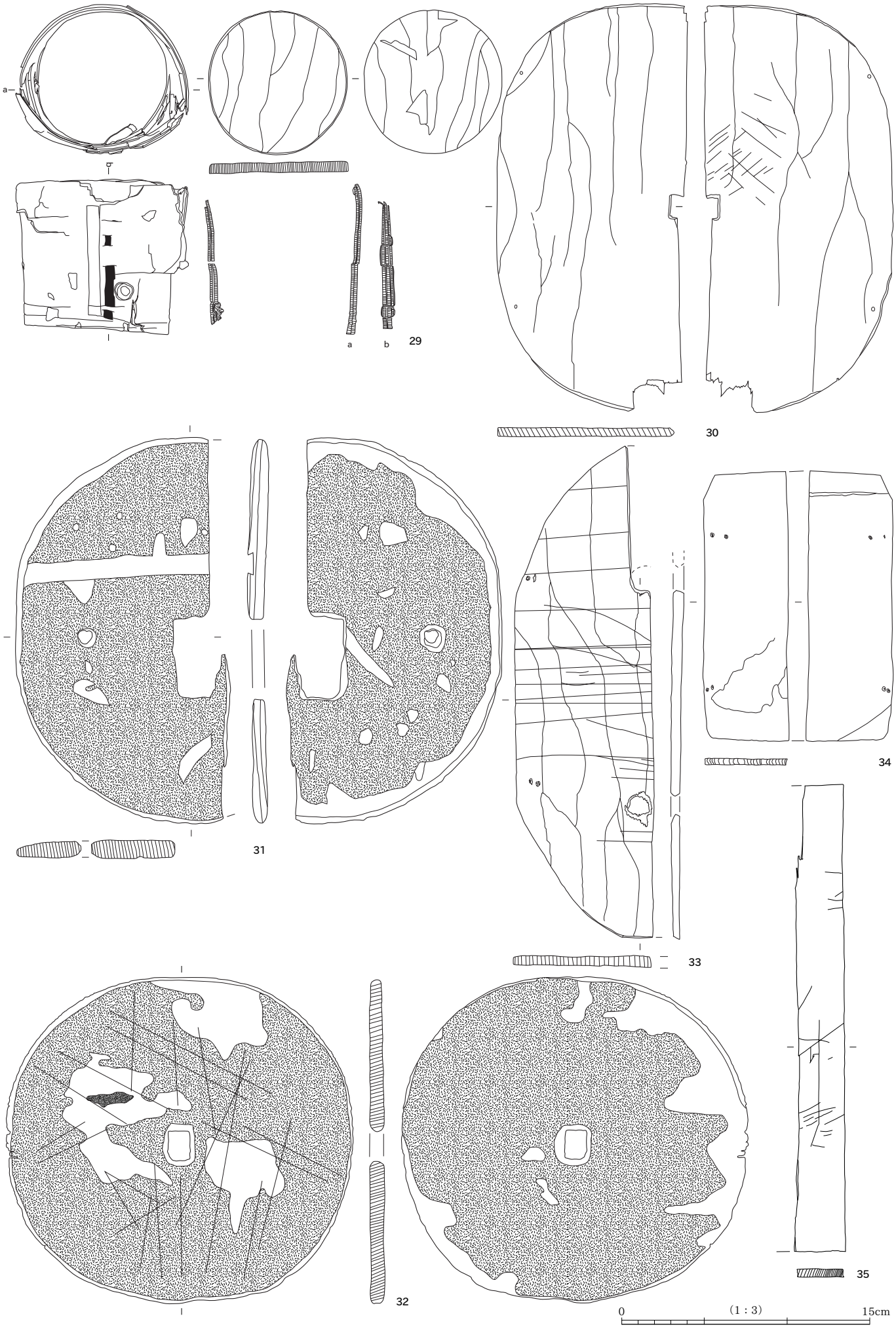
0　(1：30)　2m

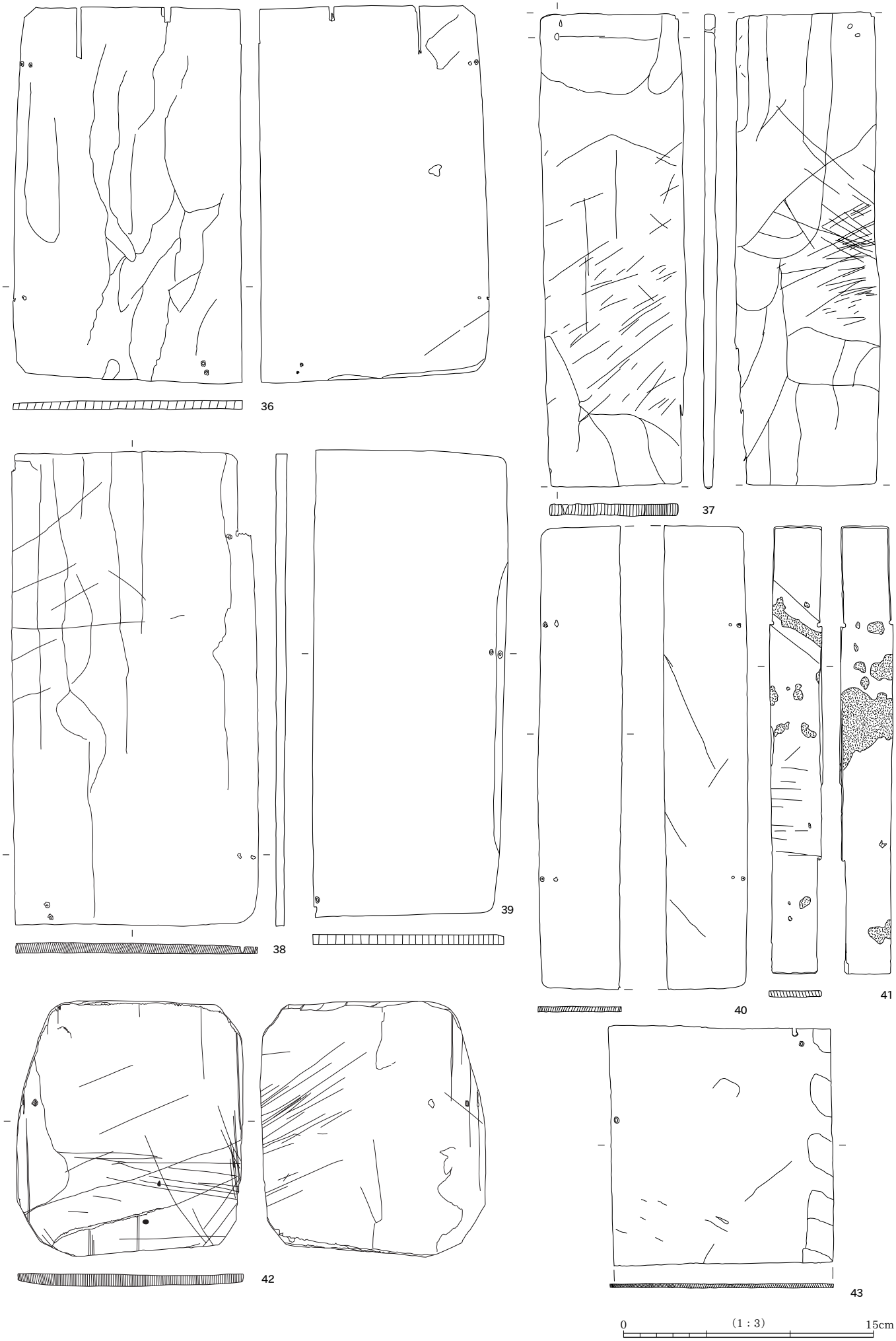
A B C D E F
19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
歩行C
14D 14E
13D 13E
歩行B
歩行A
XI層上面にて検出
13D 13E
12D 12E
0
(1 : 80)
20m


UNE-B
UNE-A
VIII層にて検出
0
(1 : 80)
20m

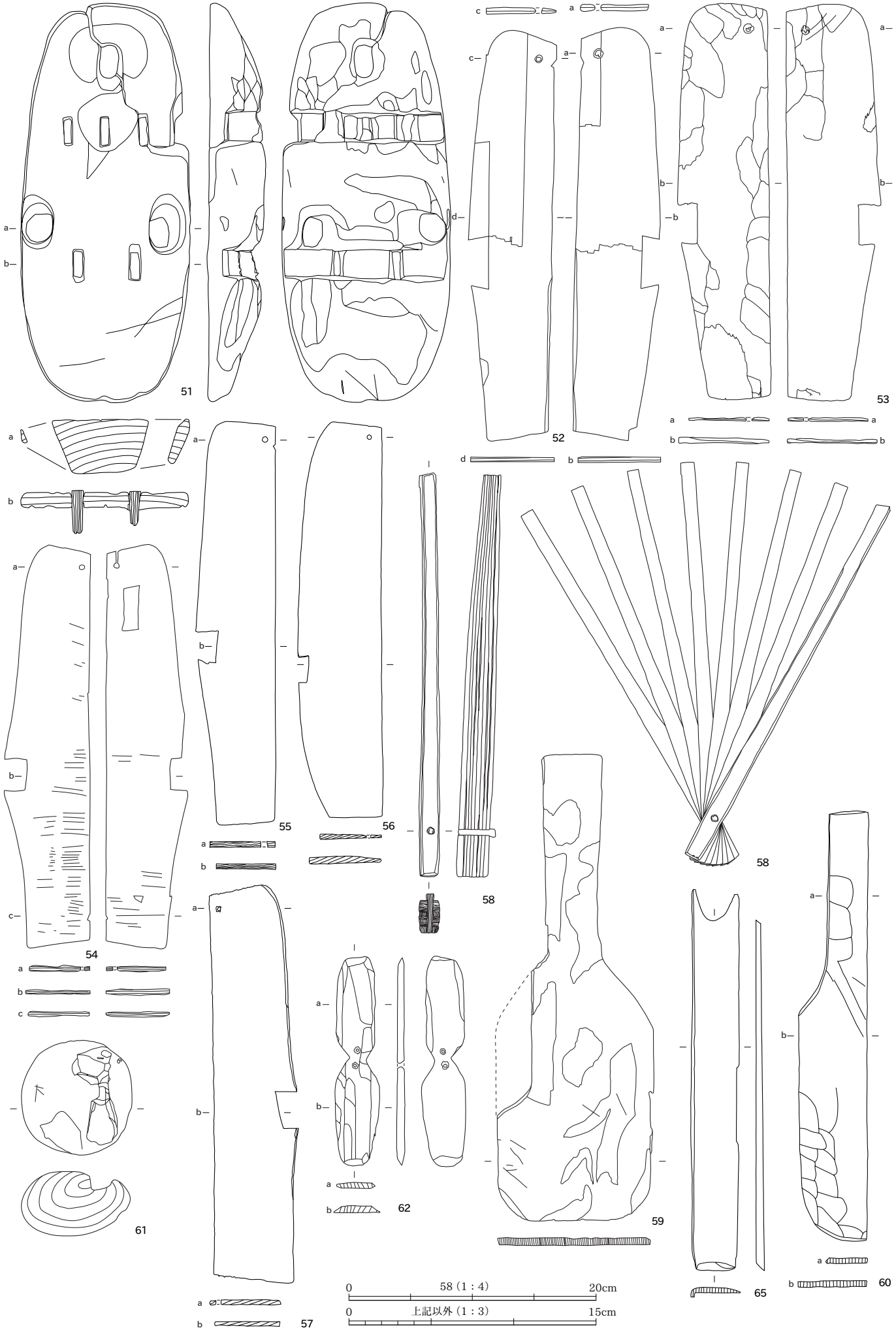

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
(1 : 3)
15cm

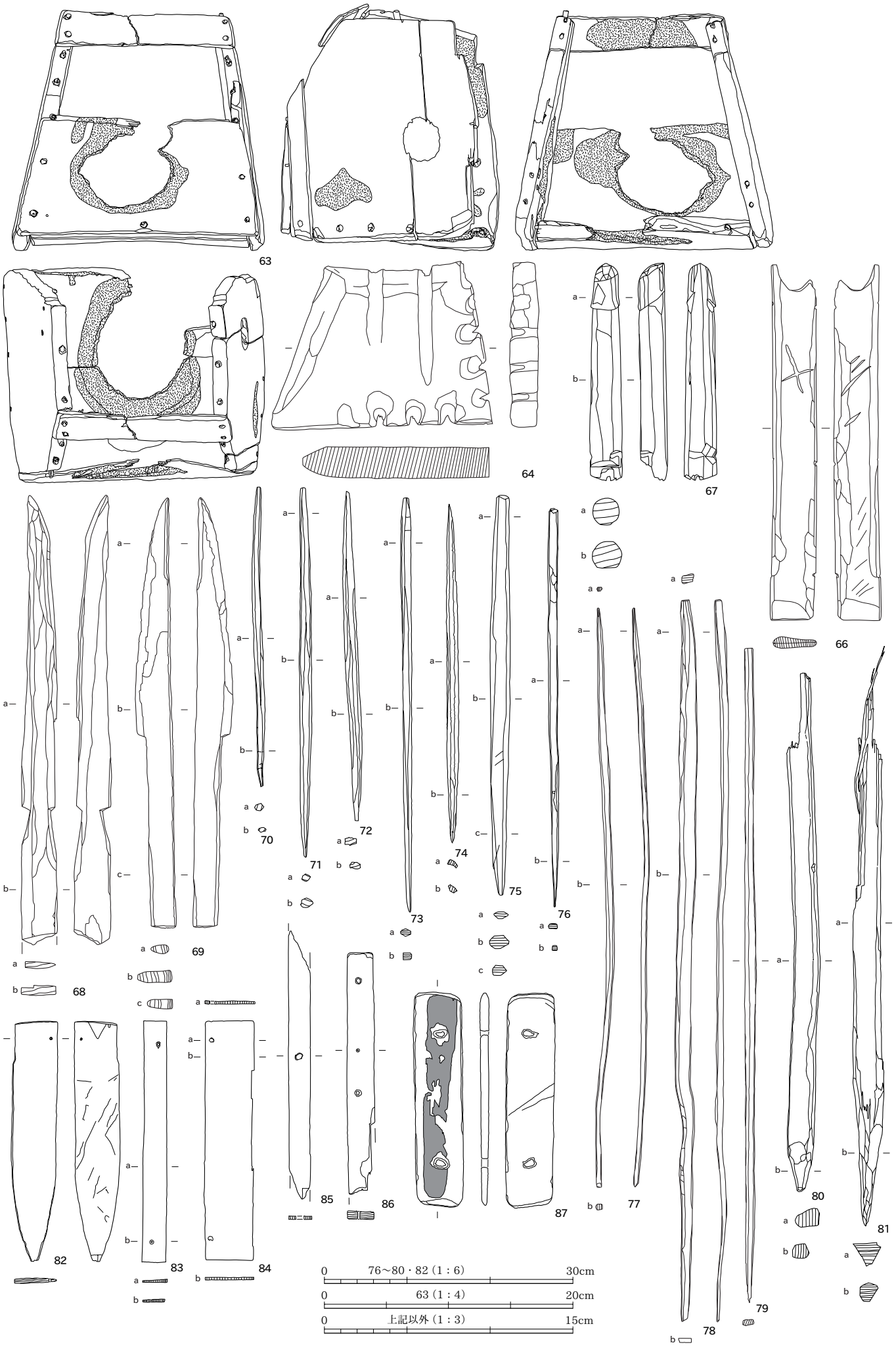

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
(1 : 3)
15cm

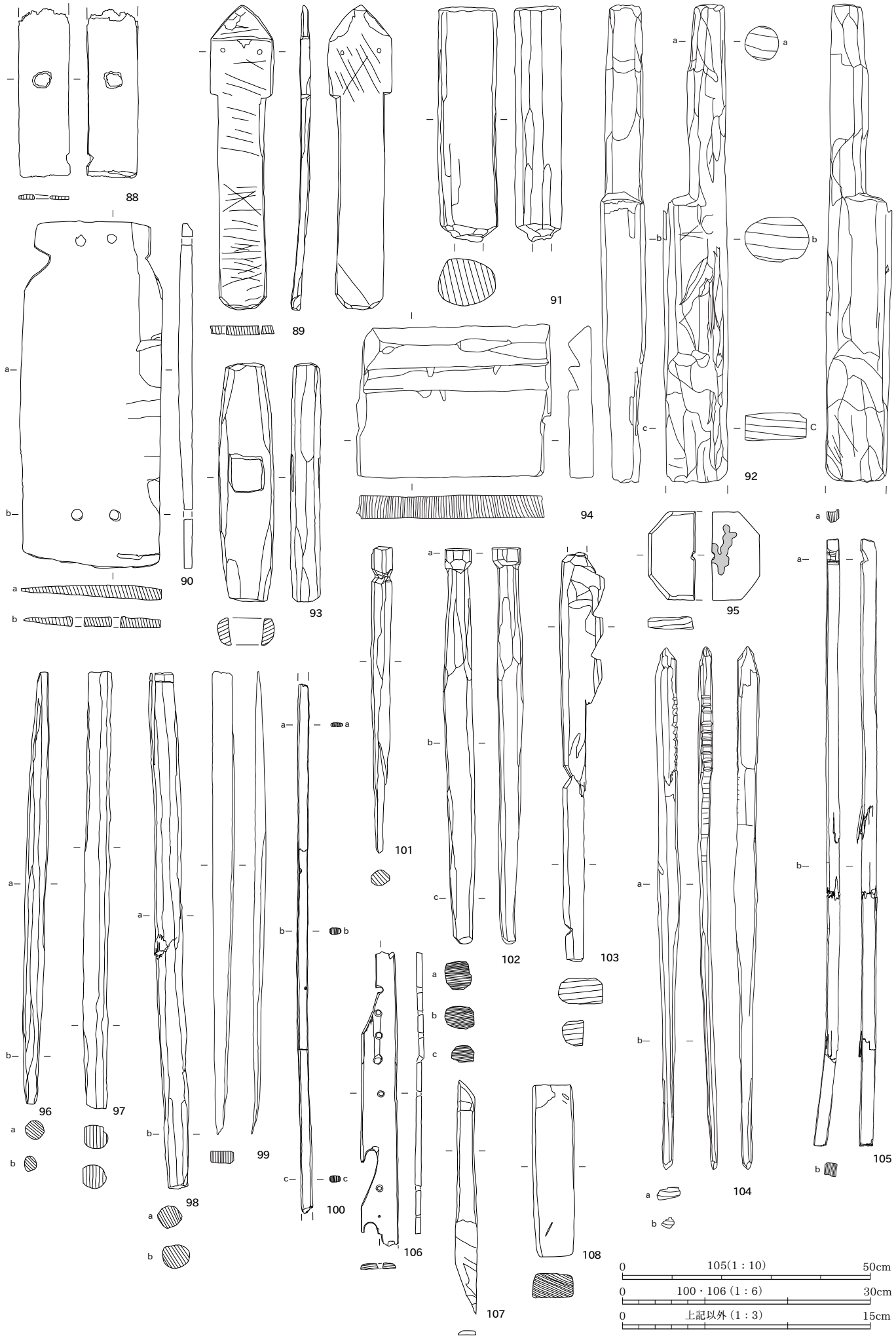

a
a
b
29
30
31
32
33
34
35
0
(1 : 3)
15cm

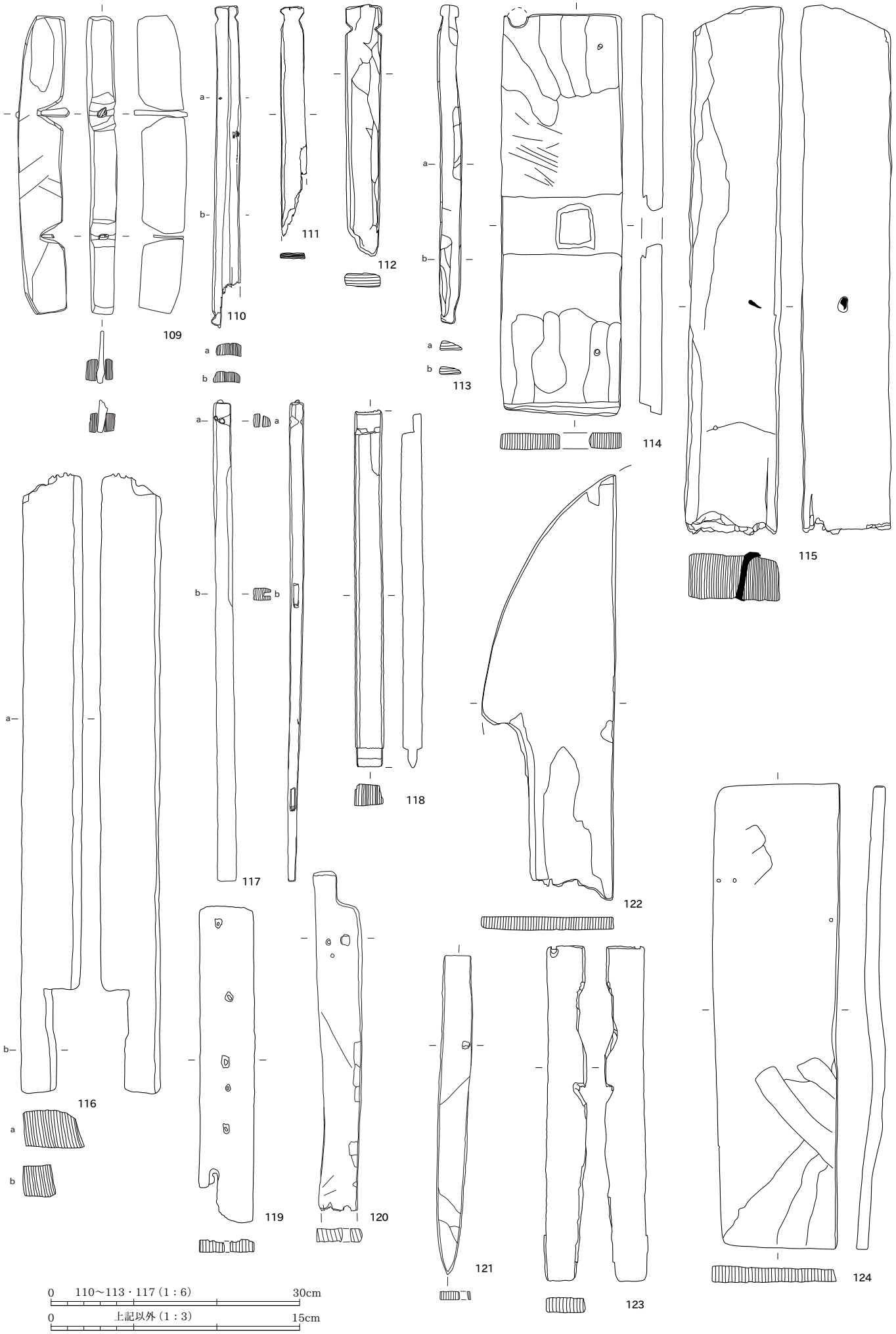

36
37
38
39
40
41
42
43
0
(1：3)
15cm

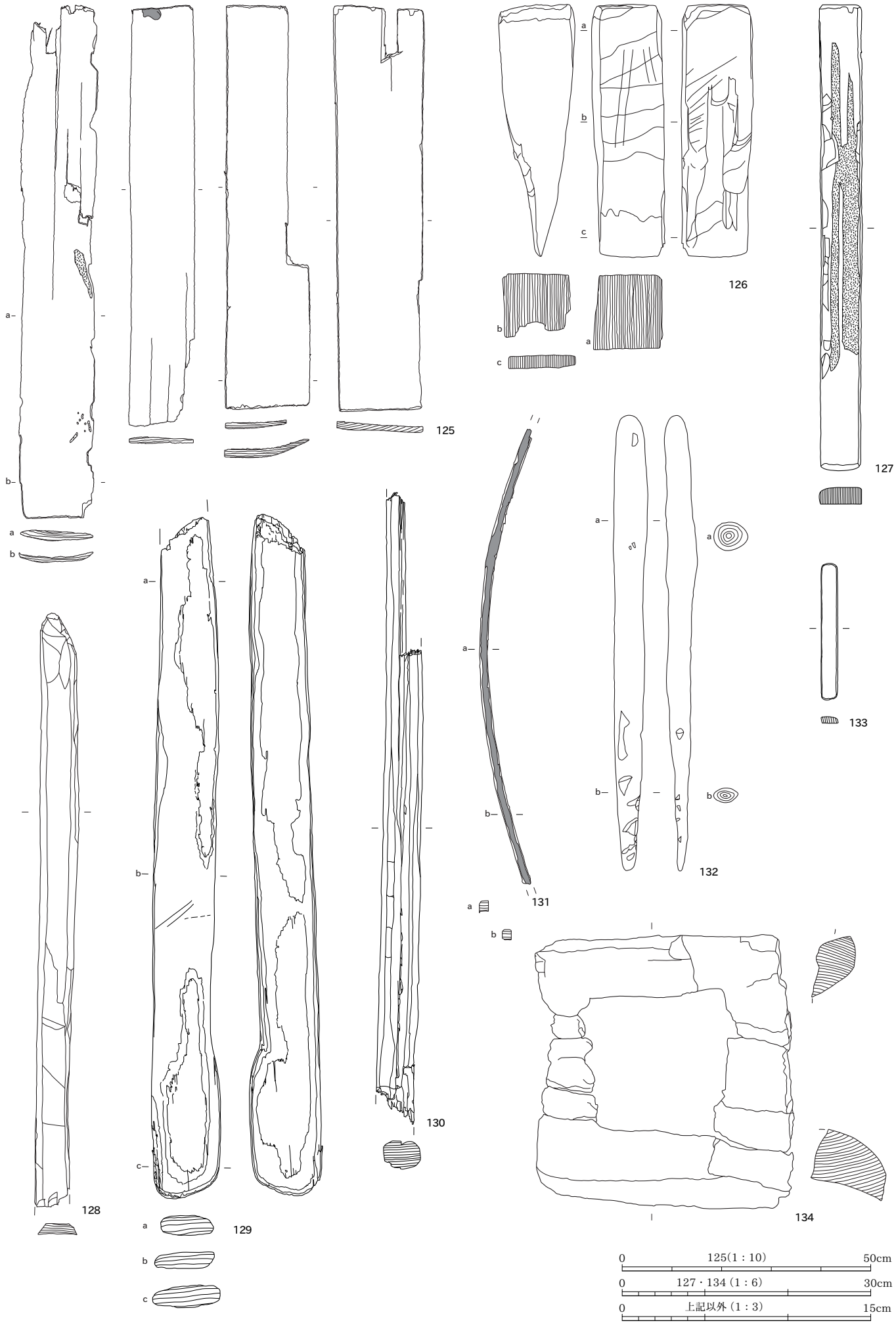
45
44
a
b
46
47
49
48
50
0
(1 : 3)
15cm


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
65
0 58（1：4） 20cm
0 上記以外（1：3） 15cm


63
64
67
66
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0 76～80・82（1：6） 30cm
0 63（1：4） 20cm
0 上記以外（1：3） 15cm


88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0 105(1：10) 50cm
0 100・106（1：6） 30cm
0 上記以外（1：3） 15cm


109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
a
b
0　110～113・117（1：6）　30cm
0　上記以外（1：3）　15cm


125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
0 125(1：10) 50cm
0 127・134 (1：6) 30cm
0 上記以外 (1：3) 15cm

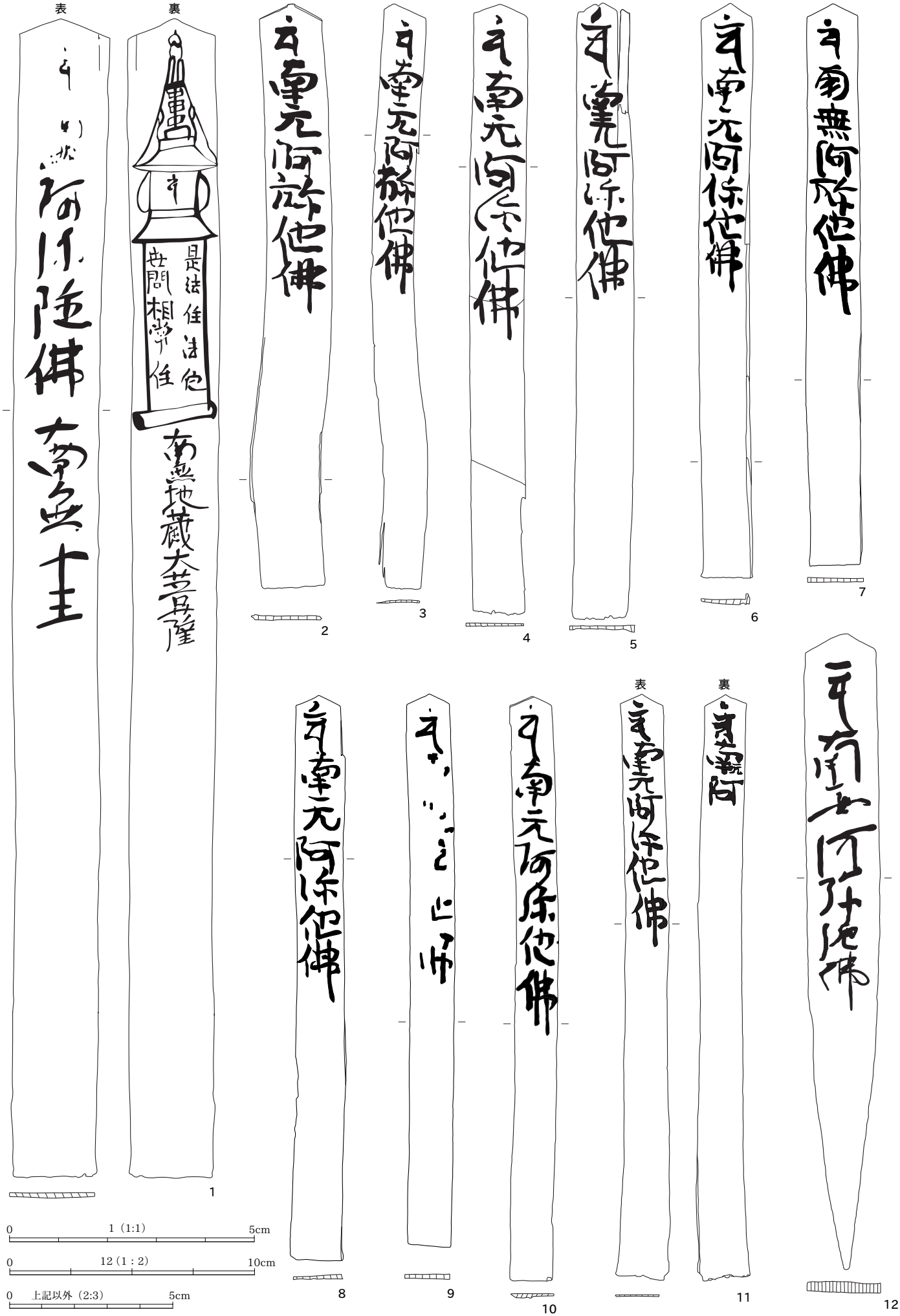
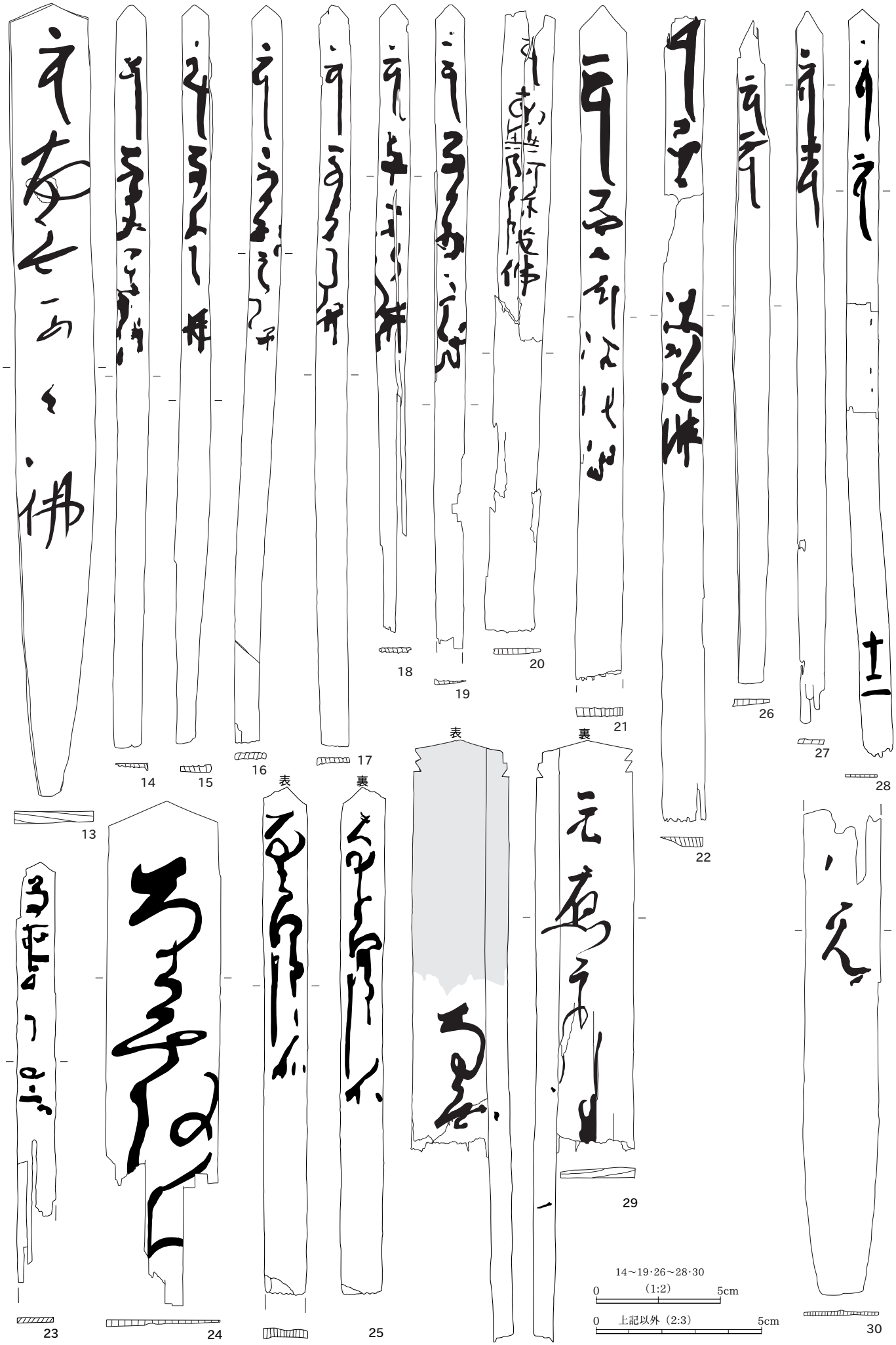


表
裏
是法住法位
世間相常住
南無地藏大菩薩
表
裏
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0　1（1:1）　5cm
0　12（1：2）　10cm
0　上記以外（2:3）　5cm


13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
表
裏
表
裏
14～19・26～28・30
0 (1:2) 5cm
0 上記以外（2:3） 5cm

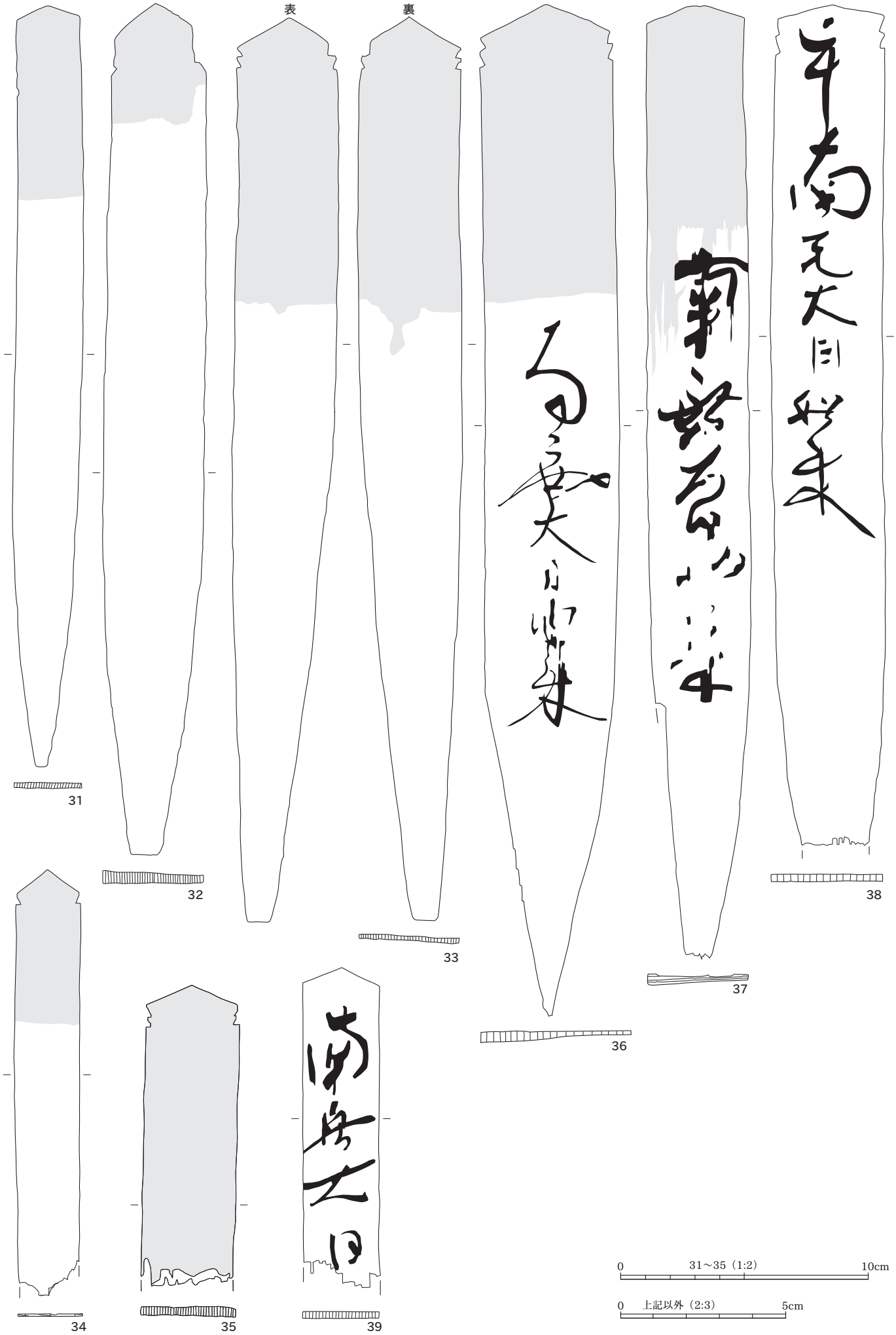


表
裏
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0　31～35（1:2）　10cm
0　上記以外（2:3）　5cm

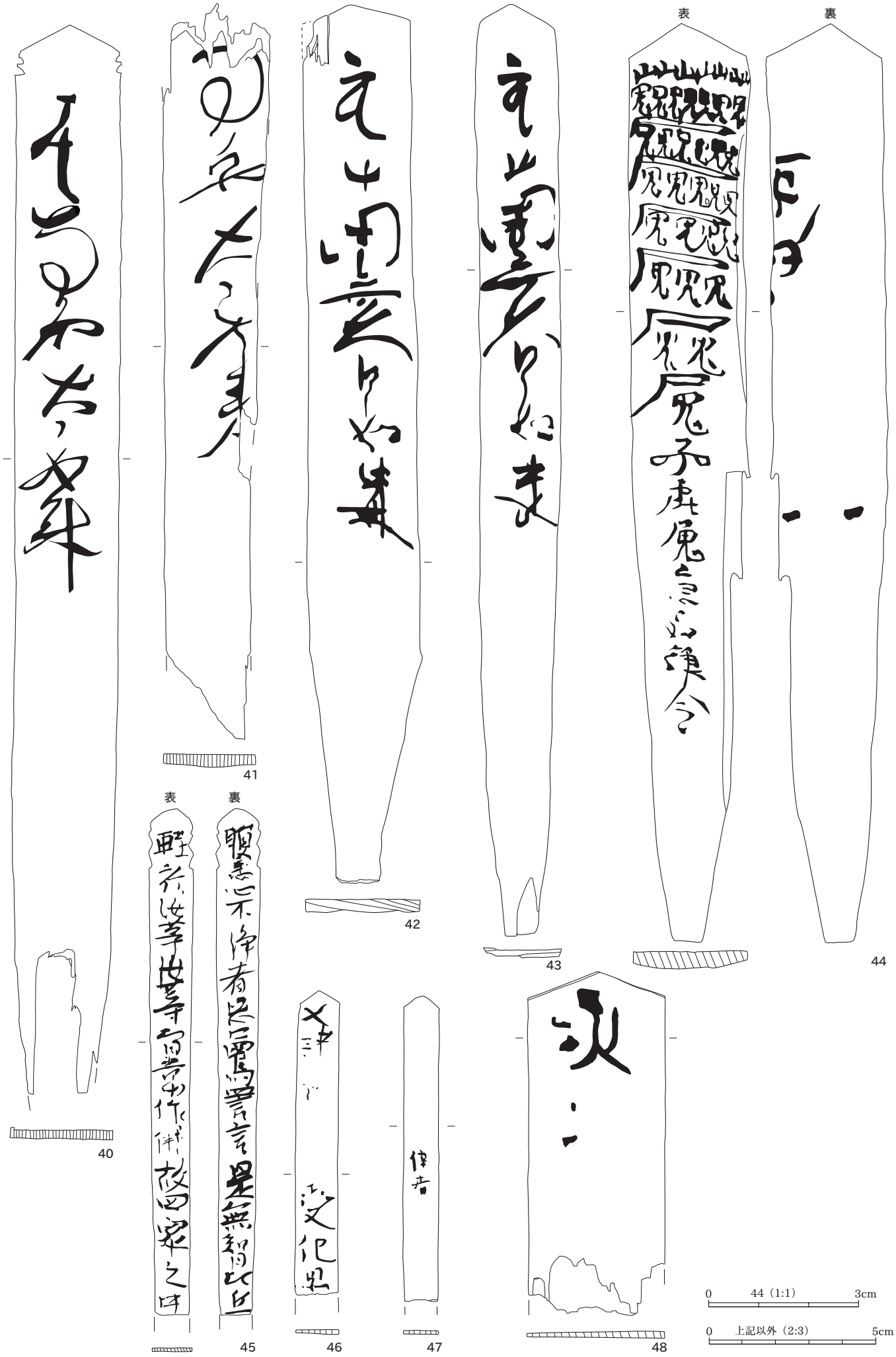


表
裏
40
41
42
43
44
表
裏
45
46
47
48
0　44（1:1）　3cm
0　上記以外（2:3）　5cm

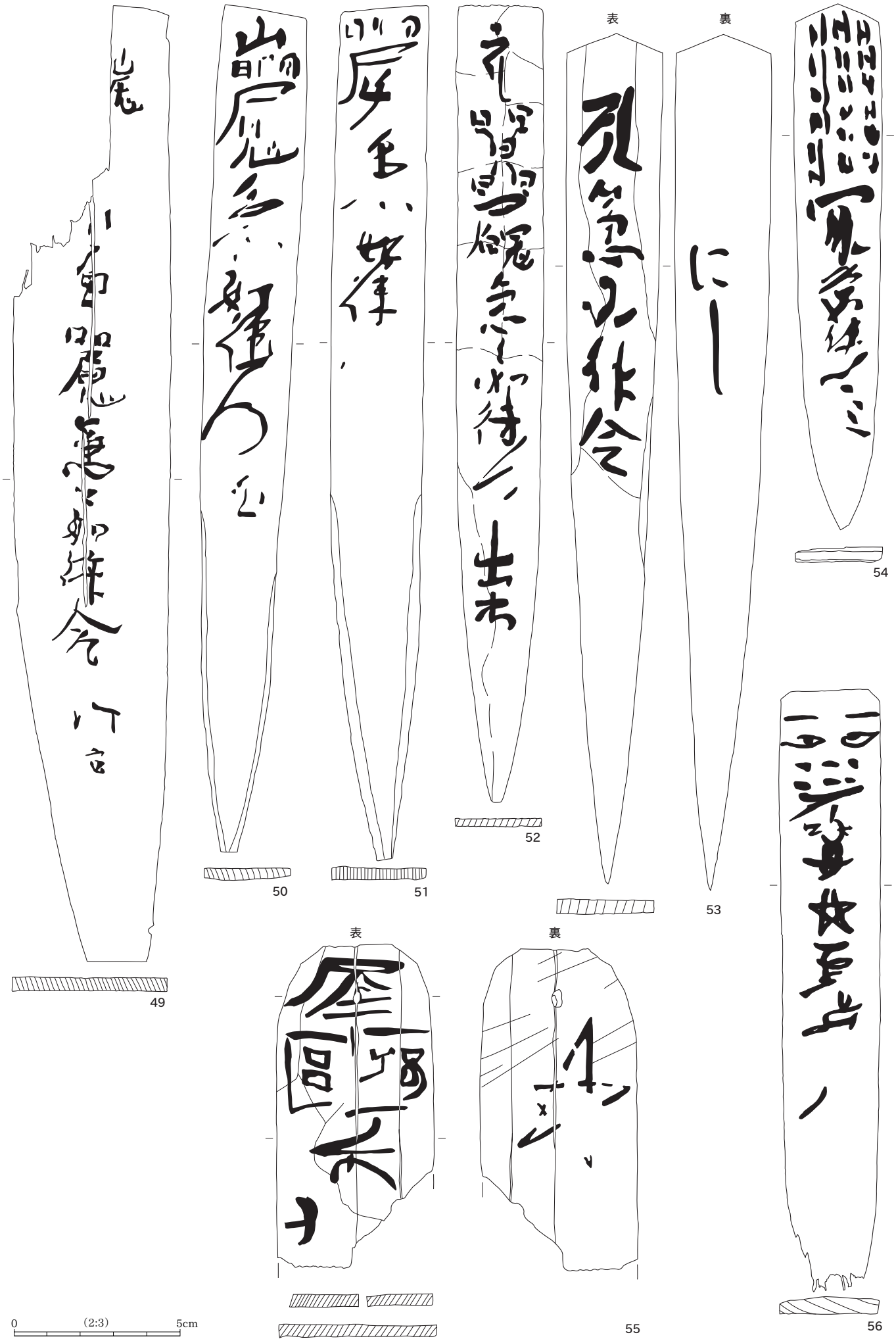


表
裏
49
50
51
52
53
54
55
56
0
(2:3)
5cm

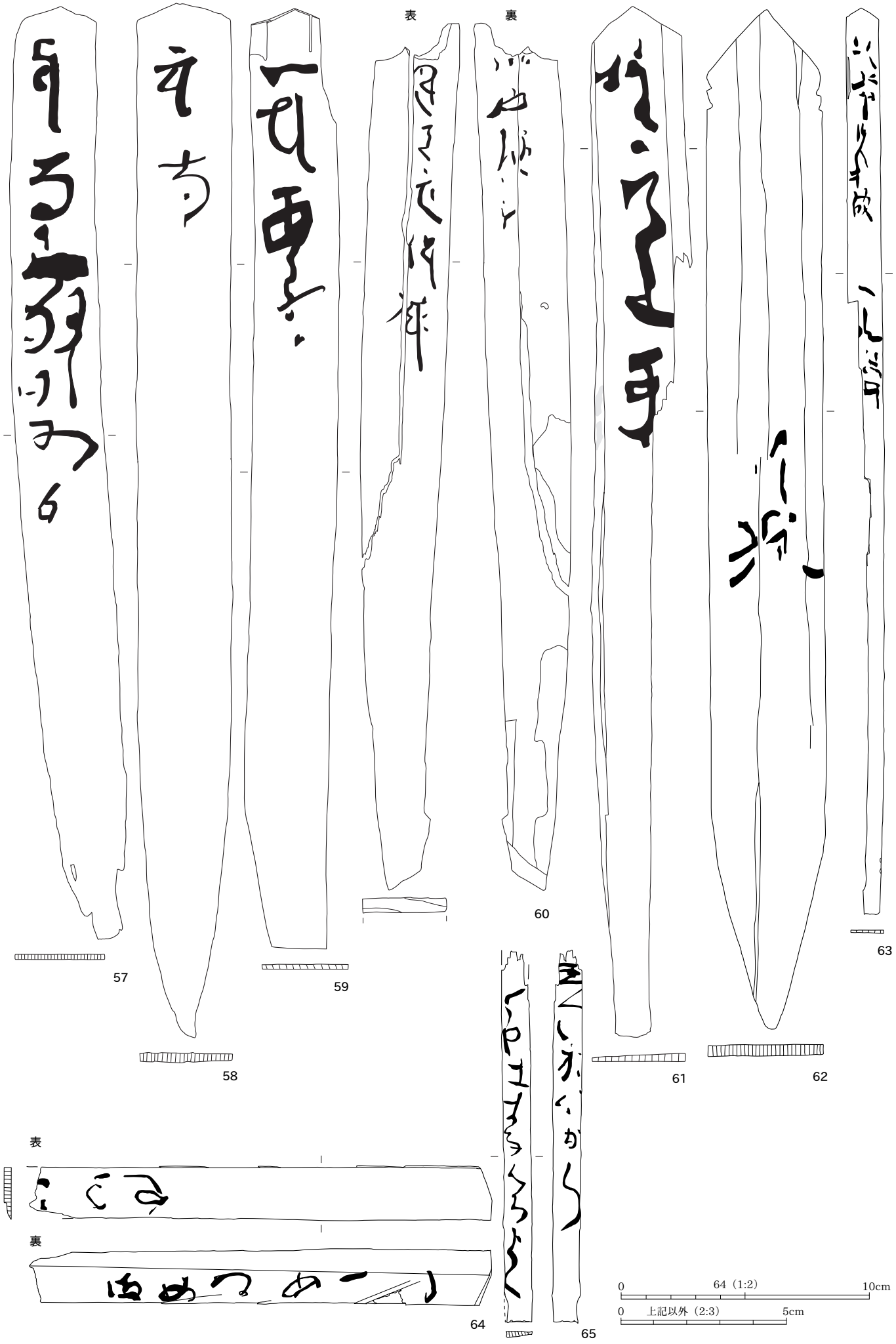
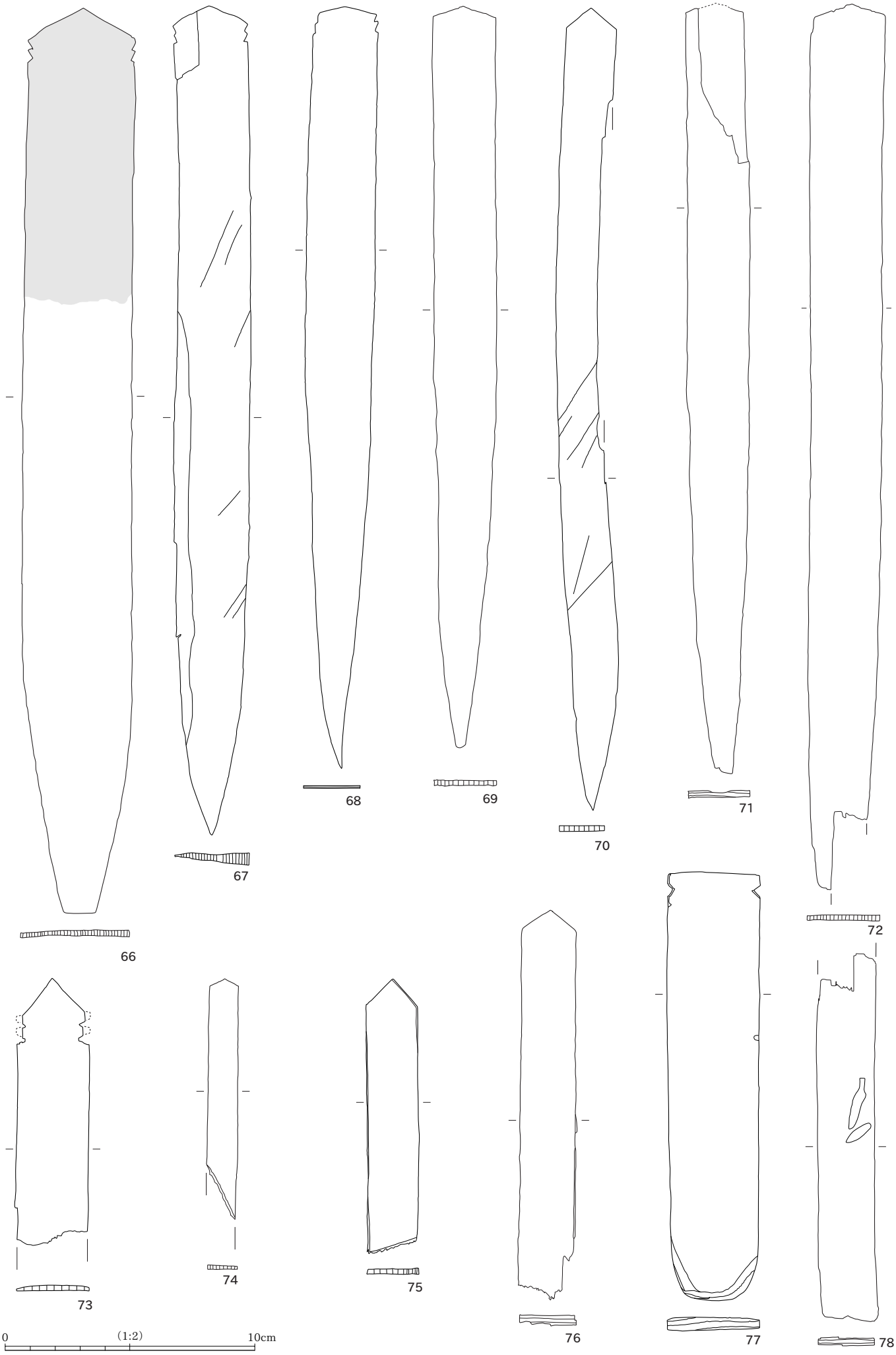
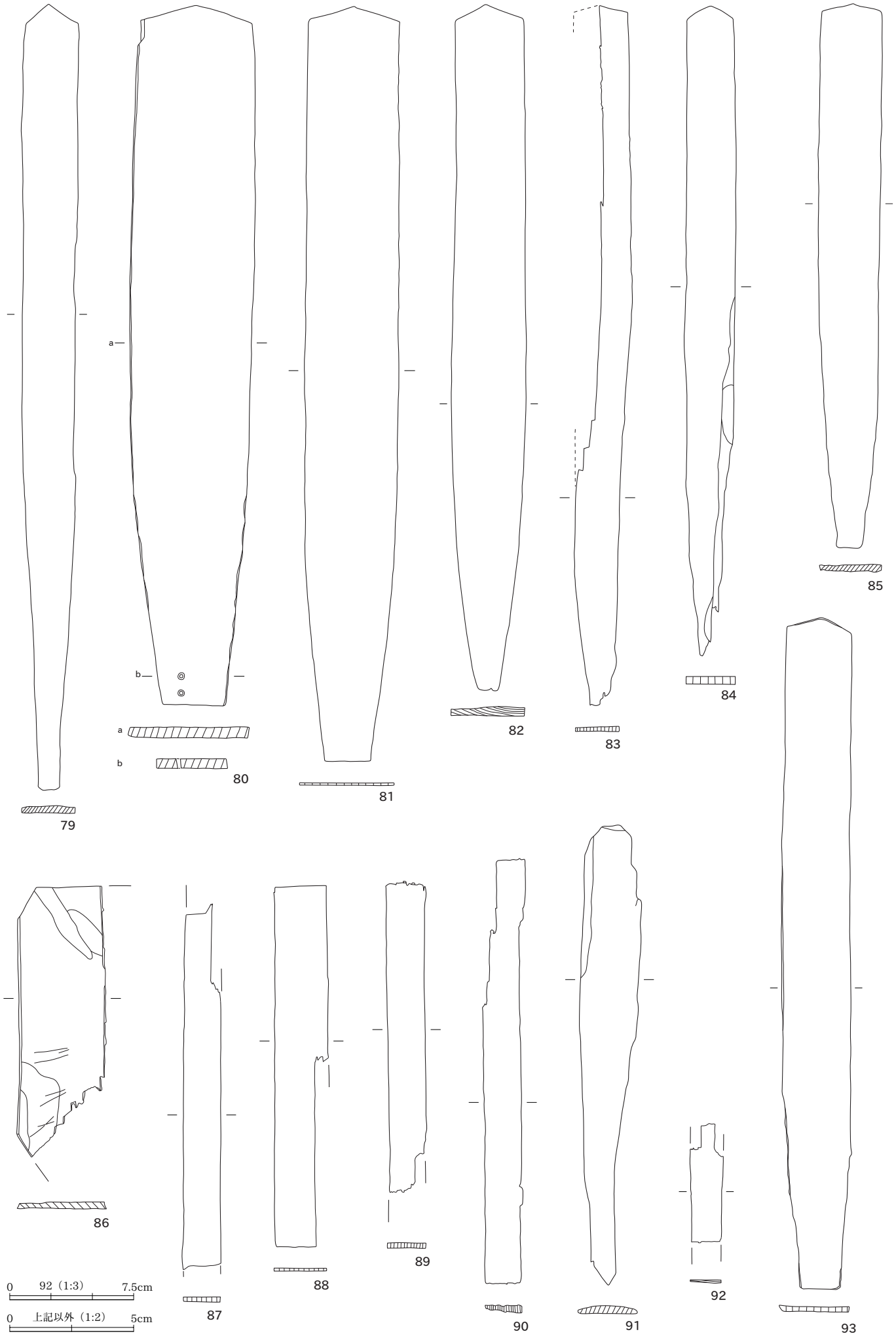
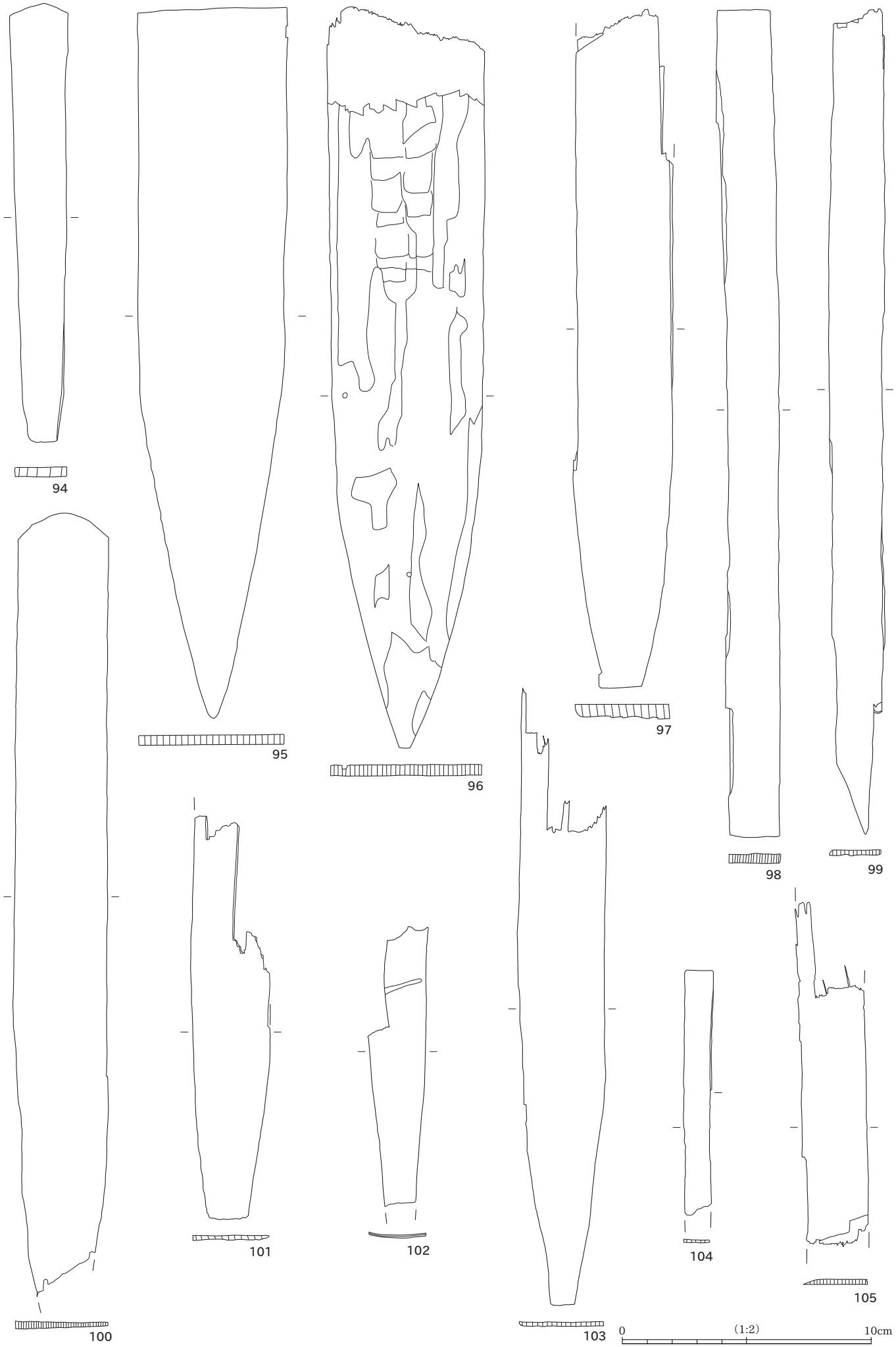


表
裏
57
58
59
60
61
62
63
表
裏
64
65
0　64（1:2）　10cm
0　上記以外（2:3）　5cm


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
(1:2)
10cm


79
a
b
a
b
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
0　92（1:3）　7.5cm
0　上記以外（1:2）　5cm


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0
(1:2)
10cm

遺跡遠景　東から

遺跡全景

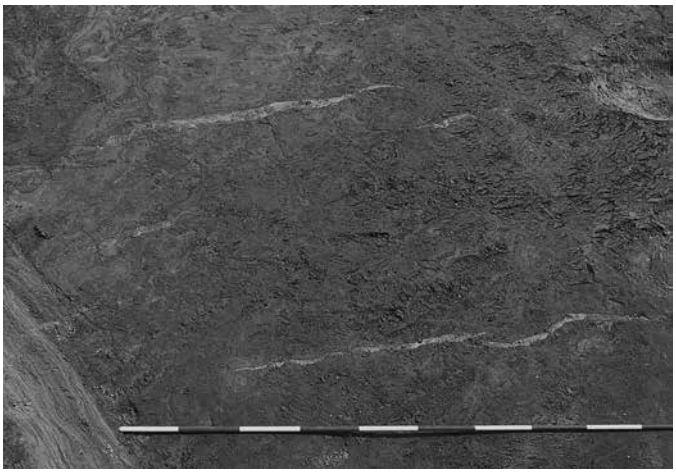
遺跡近景　南から

足跡群

土層断面（柱状図⑦）　西から

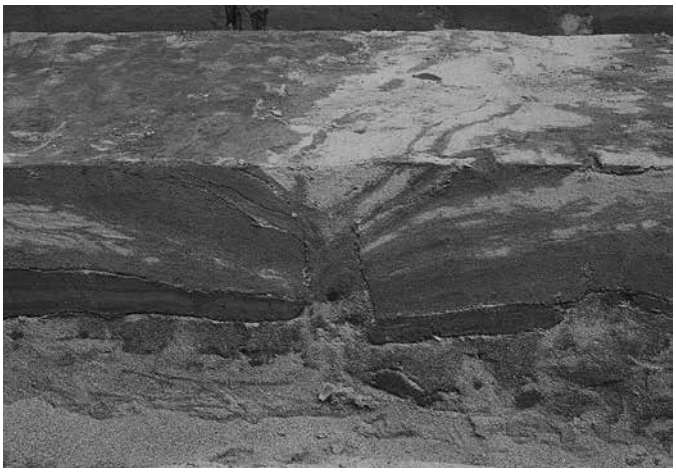
土層断面（柱状図⑨）　南から

土層断面（柱状図①）　西から



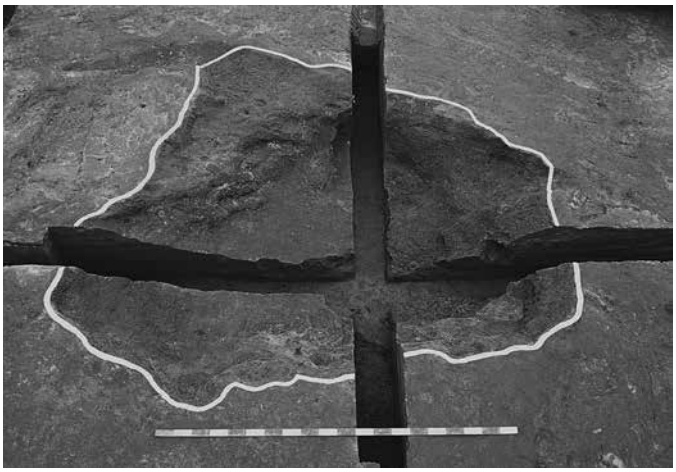
地震噴砂検出状況　北西から

地震噴砂断面（柱状図⑧）　西から



地震噴砂断面　西から

SX01 断面　南から



SX01 完掘　西から

SX02 断面　南から

SX02 完掘　西から

SX04 断面　南から

SX04 完掘　南から

骨１号出土状況　北東から

骨２号出土状況　北西から

骨４号出土状況　南から

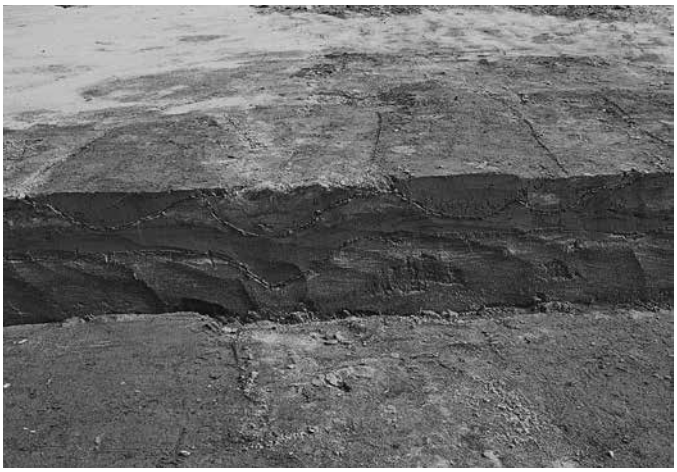
骨５号出土状況　南西から

骨６号Ａ出土状況　北東から

骨７号出土状況　北西から

畝状遺構検出状況　東から

UNE-A断面　南から



UNE-B断面　南から

足跡完掘（Ⅷ層検出）　南西から

足跡群検出状況（Ⅺ層上面検出）　南東から

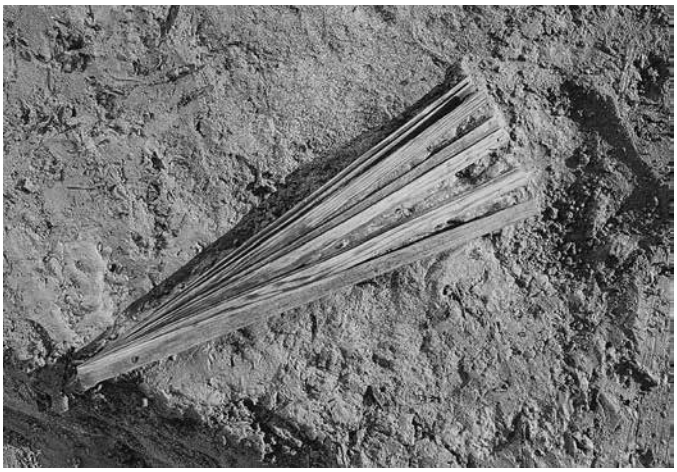
足跡完掘（Ⅺ層上面検出）　西から

卒塔婆一括出土状況　南東から

漆膳出土状況　東から

漆鉢出土状況　東から

漆椀出土状況　南から

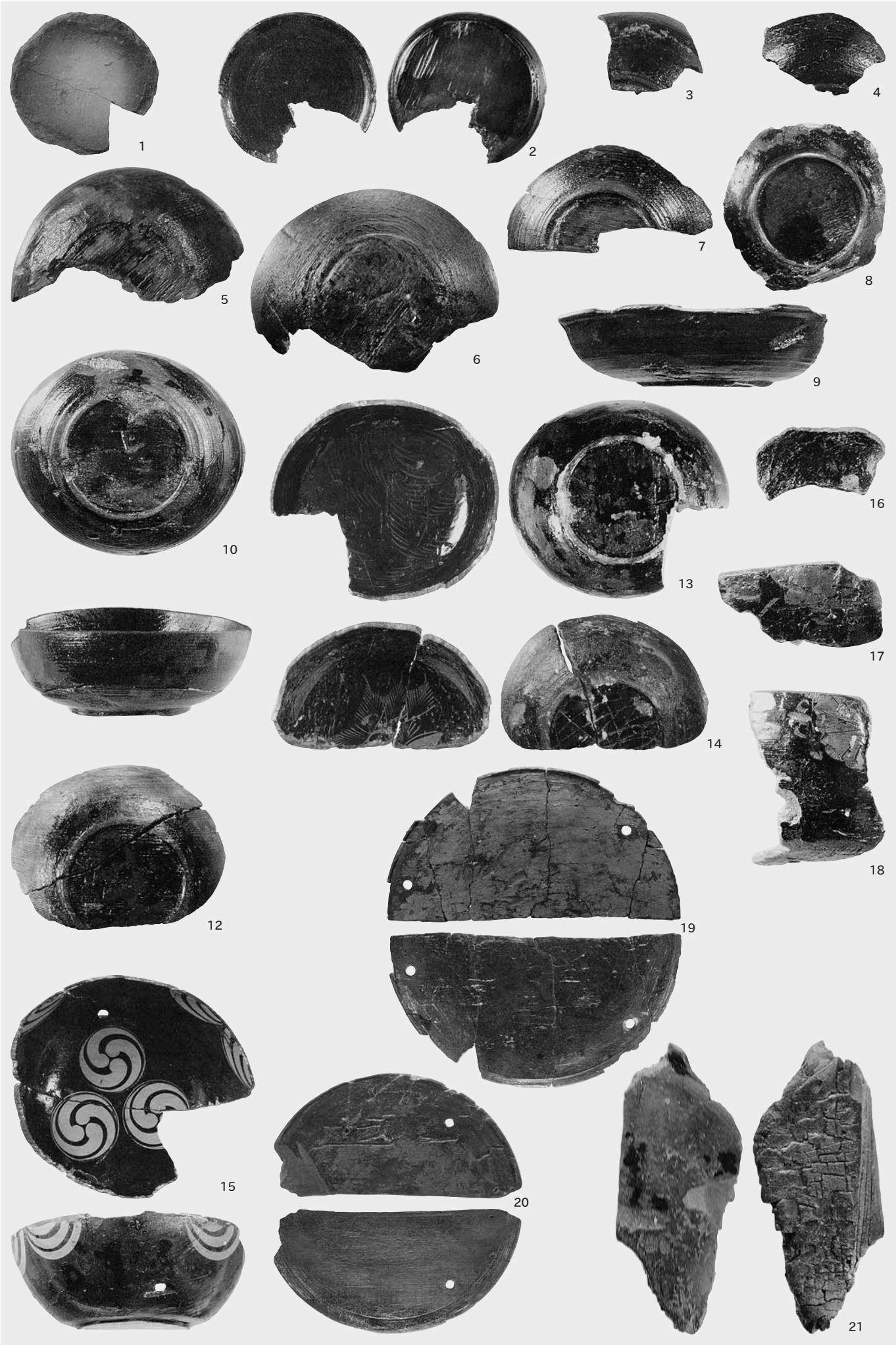


扇出土状況　北から

木製行火出土状況　北から

下駄出土状況　北西から

草履芯出土状況　東から

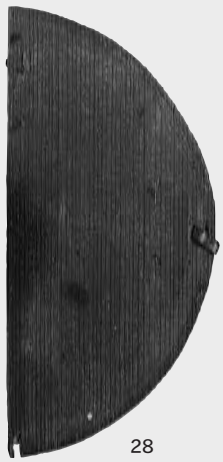

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
13
16
17
14
18
12
19
15
20
21

22

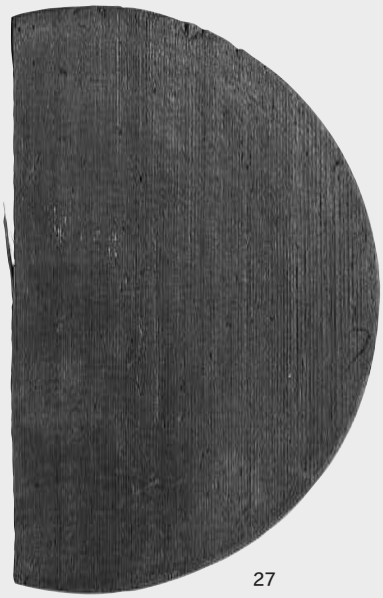
24

25

26


28

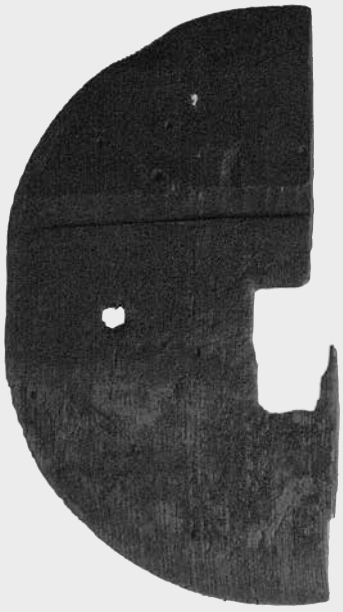
23

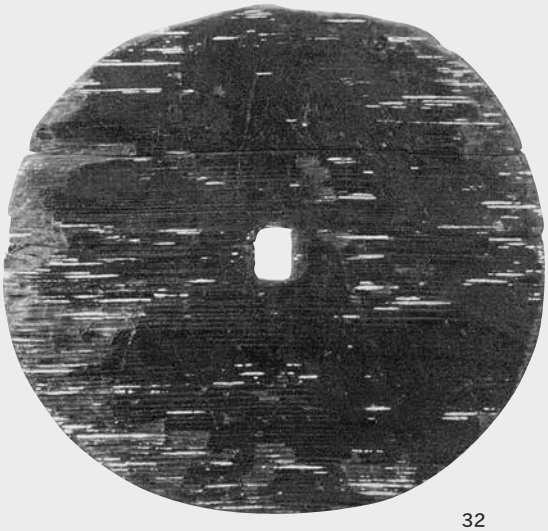

27

29

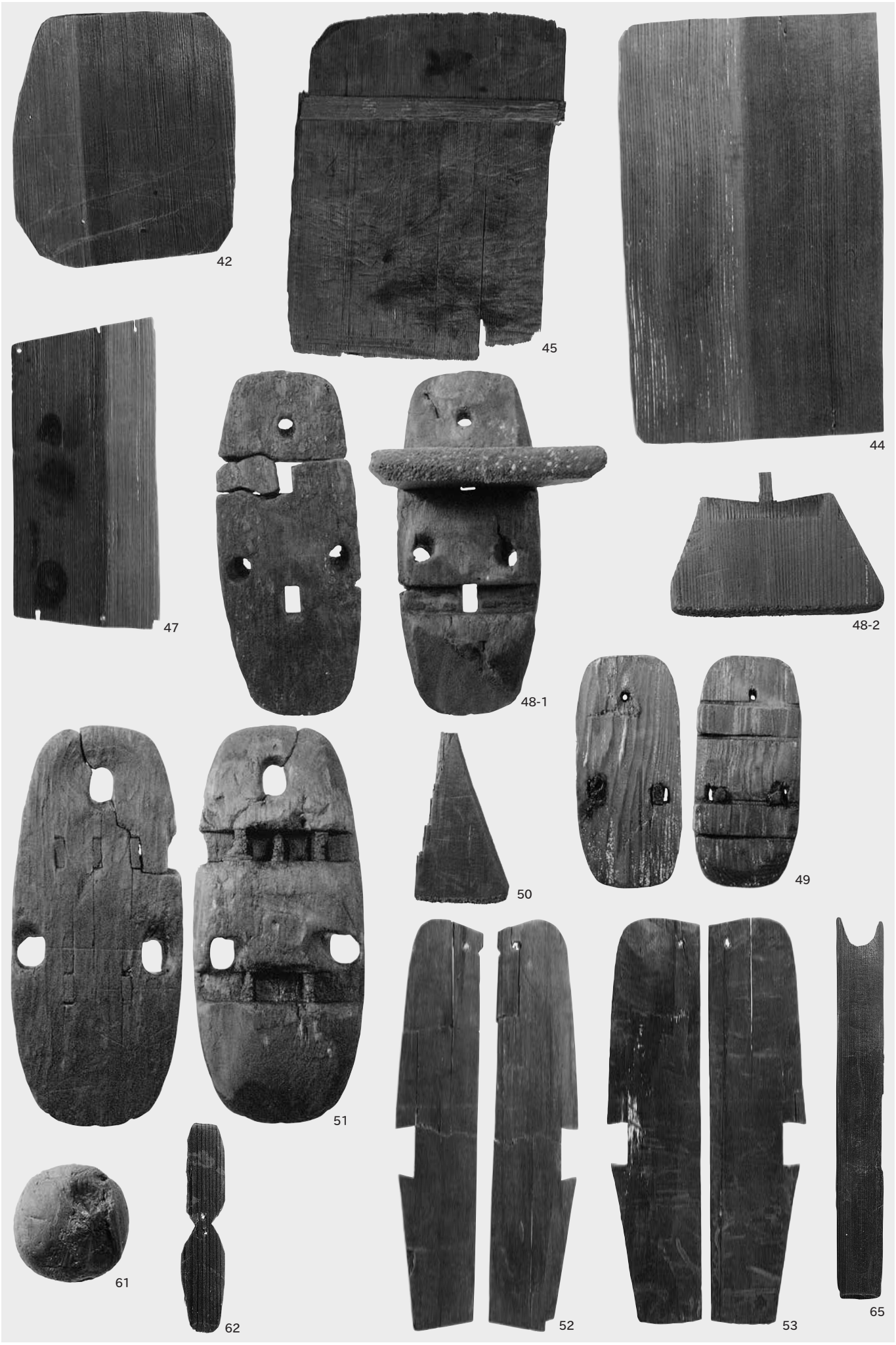
30

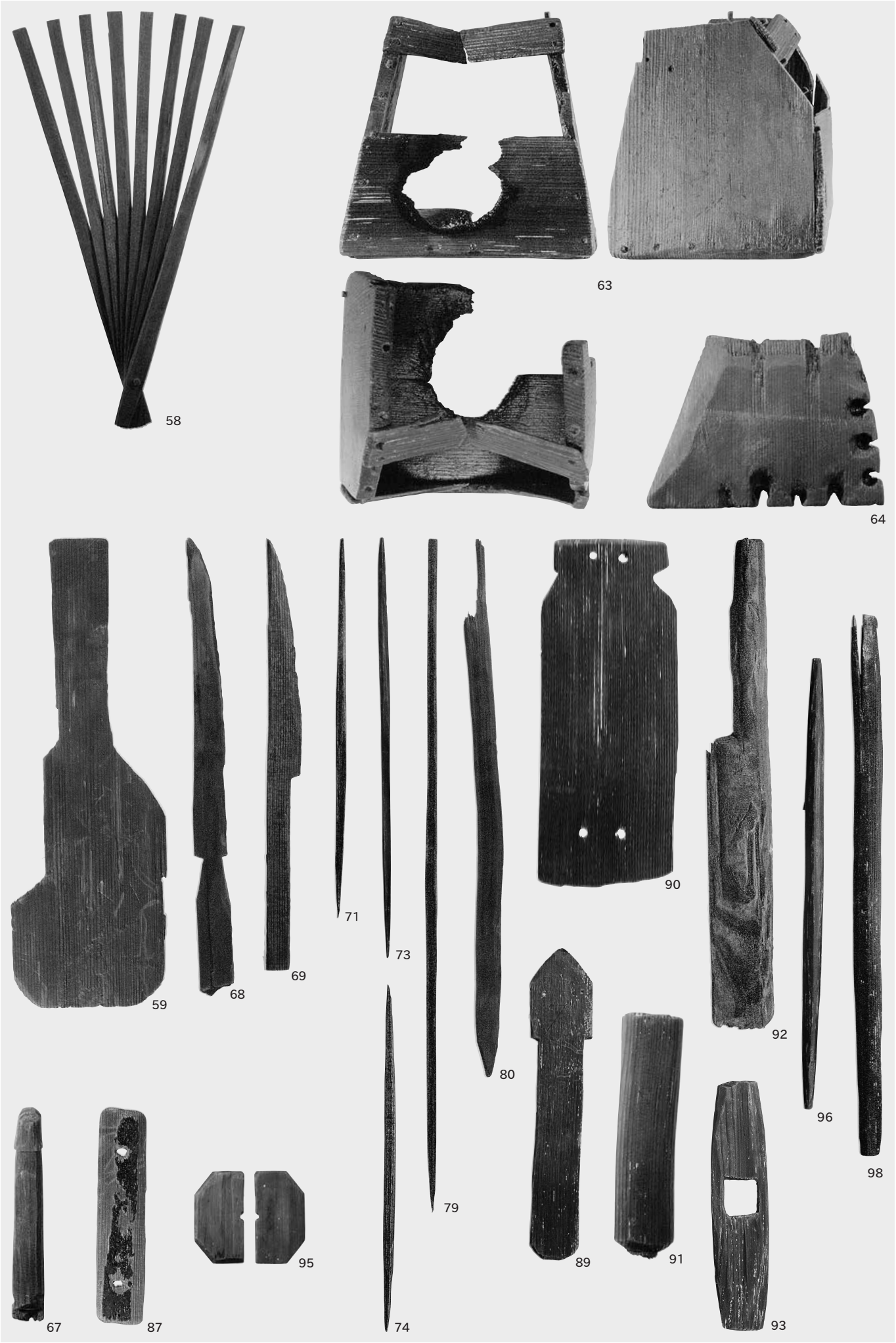
33


31


32

36


42
45
44
47
48-1
48-2
49
50
51
61
62
52
53
65


58
63
64
59
68
69
71
73
79
80
90
92
96
98
67
87
95
74
89
91
93

101
102
103
104
106
109
110
111
112
113
114
117
118
119
120
121
123
125
126
134

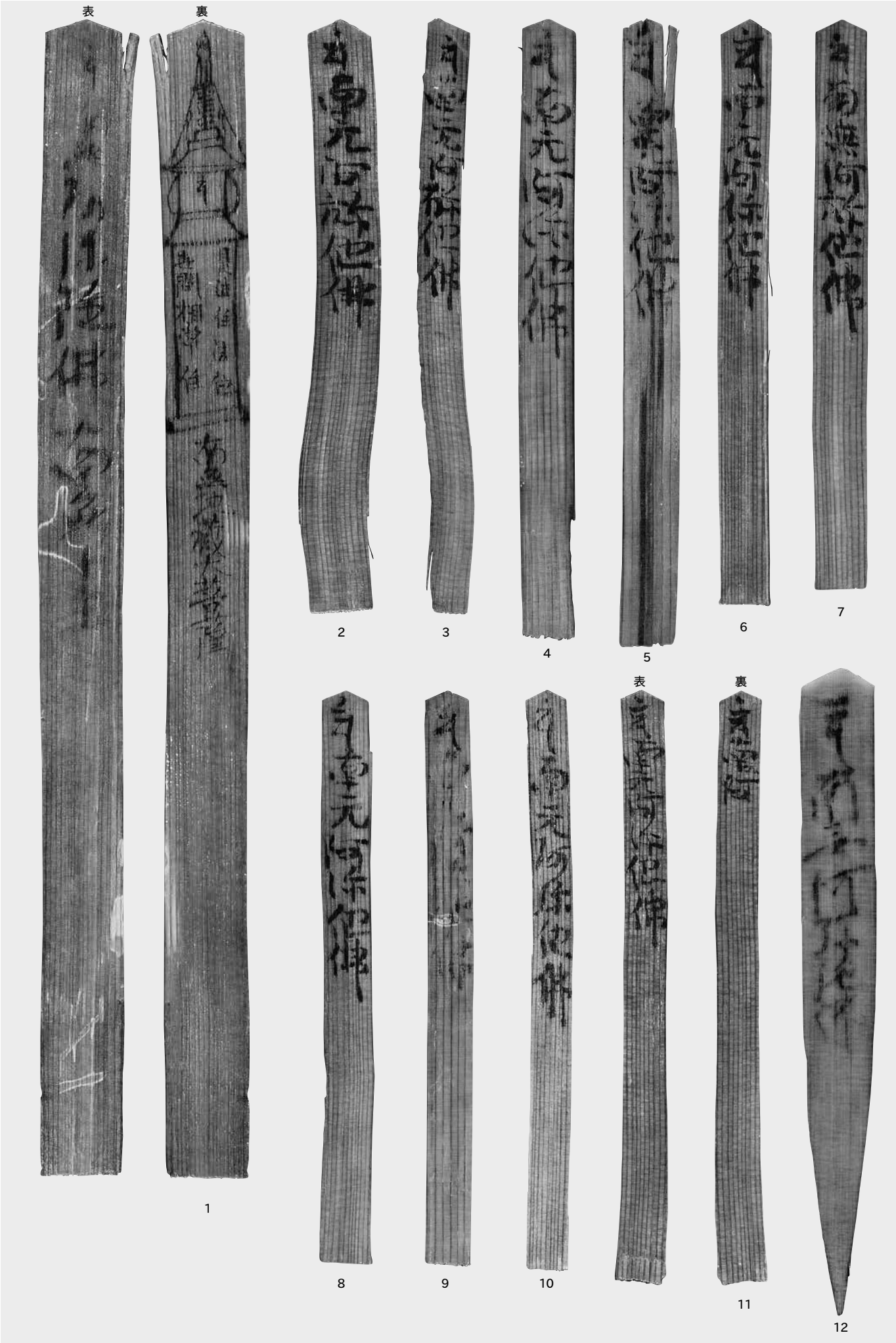
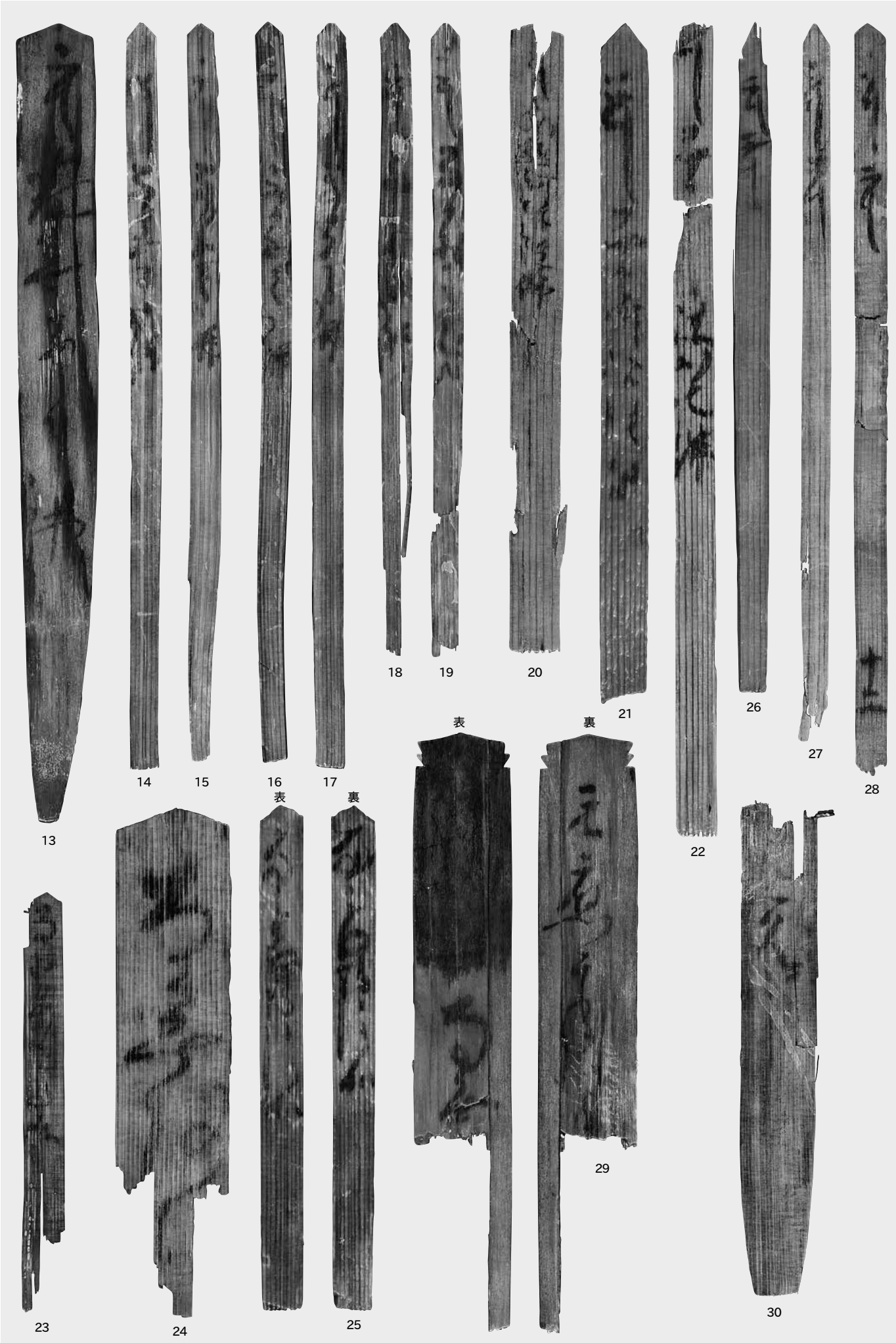


表
裏
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
表
裏
11
12


13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
26
27
28
表
裏
29
表
裏
23
24
25
30

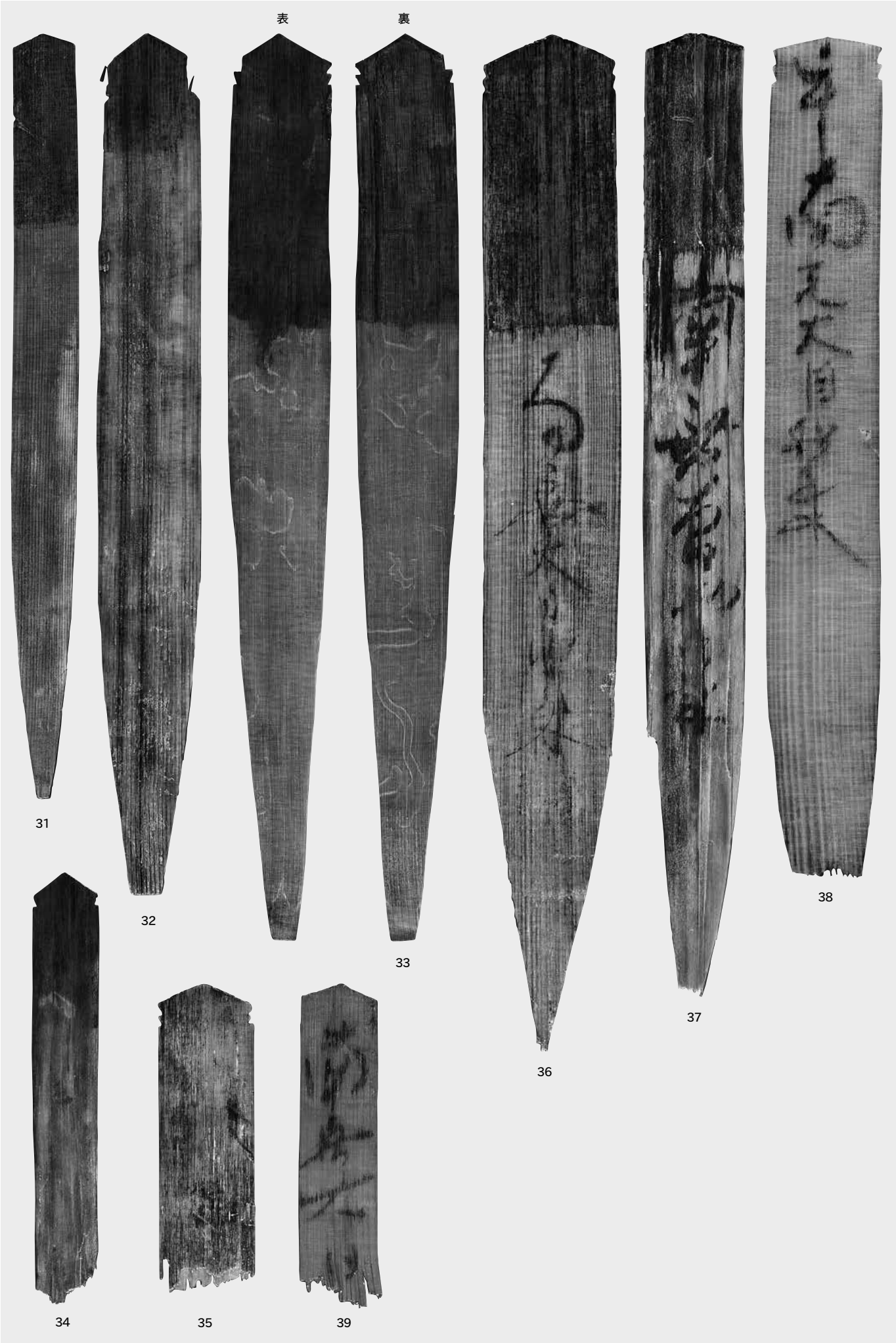


表
裏
31
32
33
34
35
36
37
38
39

表
裏
40
41
42
43
44
表
裏
45
46
47
48

表
裏
49
50
51
52
53
54
表
裏
55
56

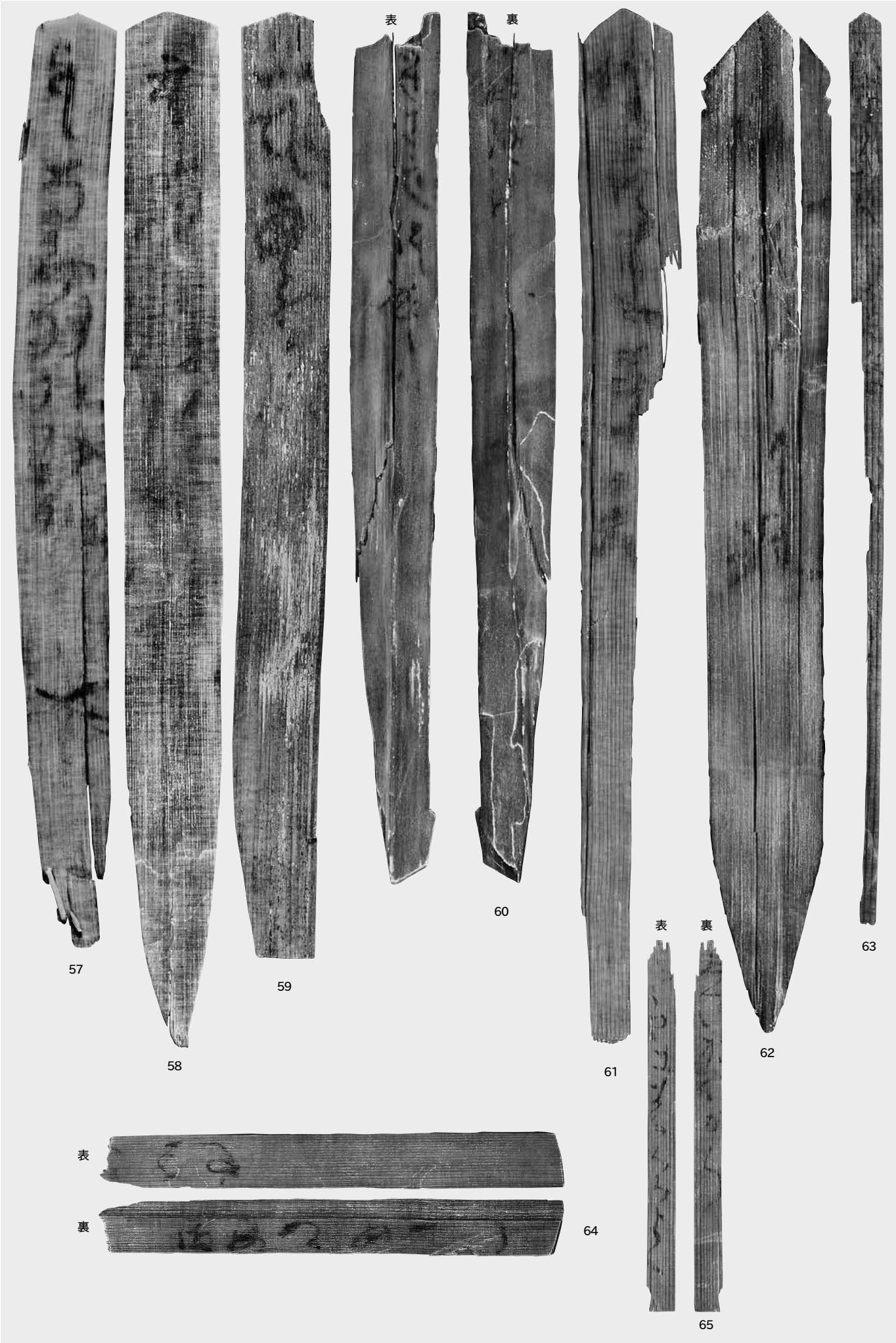


表
裏
57
58
59
60
61
62
63
表
裏
表
裏
64
65

報告書抄録

ふりがな	うらまわりいせき
書名	浦廻遺跡
副書名	一般国道８号　白根バイパス関係発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第126集
編著者名	本間克成　山口勇雄　飯坂盛泰　清田明子　田中一穂　藤田　尚　堀川秀夫
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地１　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2003（平成15）年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
浦廻遺跡（うらまわりいせき）	新潟県白根市大字戸頭字浦廻4369（にいがたけんしろねしおおあざとがしらあざうらまわり） ほか	15220	15	37度 44分 15秒 (旧座標)	139度 5分 15秒 (旧座標)	20020520 ～20021004	6,800m²	一般国道８号白根バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浦廻遺跡	散布地	中世 （13世紀後半～14世紀前半）	土坑（３基） 畝状遺構（２区画） 足跡群	木簡（卒塔婆、呪符） 木製品（漆器、行火、扇、下駄） 骨（人骨、獣骨）	「元應二年」（西暦1320年）と記された卒塔婆が出土

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第126集

一般国道８号　白根バイパス関係発掘調査報告書

浦　廻　遺　跡

平成15年３月28日印刷
平成15年３月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　長谷川印刷
〒950-2022　新潟市小針１丁目11番８号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第126集『浦廻遺跡』　正誤表　　2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯（旧座標）	３８度２４分５６秒	３８度０７分０７秒
抄録	東経（旧座標）	１３９度２４分５６秒	１３９度２４分４５秒